る。

十月とは思へぬ暑くるしい日を浴びながら、やがて、町中の散歩に出かける。熱海とは比較にならぬほどの廣さではあるが、結局發達した漁村である。どつちへ行つても鼻をつくやうである。

足は先づ白雲閣を訪れる。成るほど引込んだ門の前では、傷兵諸君がピンポンをやつてゐる。主人を尋ねると、丁度東京へ行つたといふ話である。全くの行違である。私は愈々清水老人の好意を感謝せざるを得なかつた。

「よかつたね、老人に紹介して貰つておいて。それでないと大間誤つきをする所だつた。」私が顧みて妻に語ると、

「旅は道連れといふのはこれですね、神様のお引合せでせう」

妻も喜んで答へた。私が老人に好意を謝する時に、「いや私も旅で困つたことは度々あります。何の〳〵、お互ですから」といつて、氣輕く私達を案内してくれたことが、どれだけか嬉しかつた。然も私達を信じ切つて、「私の知人です。宜しく願ひます」といつてくれたことが、今更のやうに思ひ出された。そして老人の伊東滞在中の友人の別荘といふのを、聞いておく程の心の餘裕をもたなかつたことが今更悔まれた。私達はもつと〳〵感謝したくてならなかつたのだ。

その夜も私達は町をぶら〳〵した。町にはさすがに、軍需景氣の人々のどてら姿がうねりをうつて流れてゐた。中には臆面もなく、わざ〳〵此處まで來て、東京の恥をさらけ出してゐる淺ましい醉拂も少くなかつた。私達は此人々の波に逆らひながら、バスの發着所なるものをのぞいて、地圖を見て、始めて伊豆の地勢を少しばかり思ひ出した。伊豆の南端にあるのかと思つてゐた伊東は、南端の下田から二十里近くも東北にあるのであつた。いつか下田へ行つて見ようかといふことをぼんやり考へ出した。けれどもバスで二圓何十錢の行程であり、三時間近くもゆられながら、石ころ道を進まねばならぬとき、おまけに立ん坊どもだつたらと思ふと、今の私達二人の體が、果してそんな冒險を堪へ得るだらうかと怪しんだ。

更にぶら〳〵してゐる中に、遊覽何とか書いた高級自動車の存在を發見した。伊豆遊覽一日で、下田から修善寺熱海と廻つて四十圓ときき、下田の往復が三十圓と知ると、せめて附近の名勝舊蹟十圓ぐらゐのコースを尋ねて見た。

そしてそれが二三時間でやれるときくと、私は始めて、今日の半日、而も凄い好天氣の半日を、どんな舊蹟があるかも聞きもせず、ボカンとしてゐた自分の頭の惡さに今更の如くあきれた。而も途中で地圖を買うでもなく、翌朝になつて、やつと宿にたのんで、案内記を貰つた自分は、もう生存價値が殆んどなくなり、探求心のあまりに枯渇してゐることを驚き且つ悲しんだのであつた。

二

翌朝九時頃、前夜大體に話をしておいた自動車の運轉手が來た。十圓の範圍で附近の舊蹟廻りをしようといふのである。私は案内記を基礎にして、十數ヶ所を見る約束で出かけた。それ等の大抵の場所が源平や曾我や、日蓮などに關係をもつてゐて、研究中の古淨瑠璃とは相當緣の深いものばかりであつたので、參考に見ておきたかつたからである。

音無川を渡る時、少し川上の森をさして、運轉手は音無の森だといふ。此地を流るゝ松川を音無川といふのは、靜に流れるといふのか知らぬが、名物の漬物にだつて、音無漬といふのがあつたから、音無の森があるのは當然かも知らぬと思ひながら、くるりと廻ると音無神社といふのがある。豐玉妃命を祀るもので、頼朝が伊東祐親の女八重姫と戀を語つたところだといはれてゐる。淨瑠璃ではこの戀は遂に悲痛なものに終り、八重姫は祐親の怒をなだめることが出來ず、討たれようとする頼朝の身替となつたのだといふが、史實は果してどうなのか。今でも毎年十月十日の夜、燈火を消した暗闇の中に、尻摘祭といふ奇妙な祭が行はれてゐるといふ。尤もその由來と狀況について、運轉手が何も語らぬ所が花かも知れぬ。

少しゆくと細圓の傍に葛見神社がある。伊東の町の總鎭守社といはれるが、その神殿のお粗末なことは呆れるほどである。けれども、境内左方の大楠こそは天下の珍で、幹の根には大きな洞があり、中から頼朝でも出て來さうである。二千年を經てゐるといはれるほどあつて、雄大豪くに足り、天然記念物に指定されてゐる。

大楠の洞や頼朝が出て來さう

二千年の楠の洞や雲を吐く

祐親の菩提寺東林寺といふのは、こゝから右手の山麓に見えてゐる。木像や、遺品、古文書が藏されてゐるといふが、さうした時間のかゝりさうなものは悉く運轉手の割愛する所となる。

祐親の軍資金、黄金千杯、朱千杯を埋藏してゐるといふ傳説の山、瓶山は、その後の山だと運轉手は指さす。近頃數個の土甕を發掘したといふが、中から小判がざく〳〵出たかどうかは知る所にあらず。山麓に曾我兄弟の首塚と、その父河津三郎祐泰の墓があると、案内記は記してゐるが、運轉手にきくと、不得要領なことをいつて、曾我の首塚といつても分骨でせうと話をそらす。それにしても朝比奈三郎や文覺上人關係のものは、此邊にはないかと聞けば、朝比奈は知りませんが、文覺のは鎌倉でせうと、巧に逃げてしまふ。史實にも傳説にも眞暗な自分は、首たまをねぢられた形

である。

自動車はいつか祐親の墓の前にとまつてゐる。下車して見ろといふのは、葛見神社の楠と同樣道から二、三間の丘にあるからである。五輪塔が寂しげに彼の最期を物語つてゐるが、側に出來てゐる新築の家は見事なものである。それとなく家主が墓守をすれば、祐親も永遠に冥することが出來るかもしれぬ。かん〳〵と日が照つて、今日の日は頗る暑い。

伊豆に來て烏の聲のまだ暑き

この邊から左方の物見の松にかけて、伊東城趾である。町から海にかけて一帶を見下ろせるといふので、物見の松が名高くなつたものか、それは古の城趾と關係した言葉かときいても、運轉手はさあといふだけである。さすがに正直である。

松川の上流にあつて、頼朝と八重姫との間に生れた千鶴丸が、源平相剋の犠牲となつて、沈められたといふ哀史を傳へてゐる稚兒ヶ淵は、そこから二十五丁の遠きにあるといふので、いつの間にか割愛どころか、全く度外視されてゐる。

暫く自動車は上りつ下りつ、可成り長い間走りつゞけて、やがて左に取つて急坂を折れ曲つては

下る。ふと坂をくるりと廻つて、海岸に出たと思ふと、漁村の入口で車はぱたりと止る。日蓮が伊豆に流された時に、何とか彌三郎に隱まはれたといふ岩屋が其處にある。小さな堂があつて、成るほど奥に洞窟があるらしい。目の見えさうもない、耳の聞えない、婆さんが飛出して來て、賽錢を投げようとする妻の手を取るやうにして、賽錢箱の邪魔をしながら、是非上れ、上らなければお岩屋の正體は拜めぬといつて、遂には引張りあげようとする。一錢の賽錢を十錢、五十錢にしたいのかもしれぬと思ふと、變な氣になつて、せめて繪葉書でも妻が買はうとするが、見本はあつても賣るのはないといふ。婆さんは飽くまで頑固である。遂に供物をやるからといつて、持出した。幾ら辭退しても、聾らしいので、相手のいふことなど問題にせぬ。強い所は日蓮に似てゐるが、日蓮の化身にしては安つぽ過ぎる。聊か恐くなつて、氣の毒ながら振りはなすやうにして段々を下る。婆さんは悄然として、物凄い白眼で睨みつけてゐる。まことに日蓮堂の堂守らしくて面白い。

睨まれて逃出す秋の暑さかな

三

直ちに、伊豆の一景である與望島を右手近く突角に望んで、車は再び坂路を引返し、元の下田街道にもどる。また暫く勢をこめて走る。やがて又左の岐路に入る。下るにつれて薄もやの間に大島

が見えるといつて運轉手が聲をかける。見えるといつても煙か雲かである。

間もなく、刷毛でなでたやうな美しい丘陵續きを眼下に見る。廣袤六十萬坪に及び、東洋一を誇る所謂川奈ゴルフ場がこれである。南に大島を望み、北に富嶽を眺めるといふほどあつて、なかなかに素晴しい地勢である。一角に立つ觀光ホテルは見るからに堂々たるものである。運轉手にすゝめられて、茶を喫すべく室内に入る。ロビーから見たゴルフ場、更に太平洋を見下ろす趣はさすがである。紅茶と菓子を命ずる。書付を見ると、チップの一割を入れて、驚くなかれ、二人前で一圓五十錢である。その價もまた東洋一である。私達の外に、バスで乘りつけた若人達が、茶と菓子とを得意氣に頬張つてゐたが、歸りには皆針でも呑まされたやうな顔をして、目を白黒させてゐた。それでも、さすがに大きな聲は出さないで、こそ〳〵と何かいつては出てゆく。私達だつて、設備から見ても一圓はとられるだらうと思つてゐたのだが、更に五割も上だつたのである。六十萬坪を遊ばせて、この素晴しい建築を、而も伊豆の東海岸で維持して、その上に相當の利益をあげてゆかうといふのである。外國人よりも日本人の間拔から搾取せざるを得ざる理由は極めて明瞭である。搾取せんとするよりも、氣取つて搾取されにゆく日本人こそ憐むべく笑ふべきである。外國人といへば、ゆふべ伊東の町で見たらしい若い阿婆摺女もゐた。鼠色の、男のやうなズボンをはいて、上衣

も着てゐない二十前後の金髪女である。何のつもりか彼女は廊下を一人で飛歩いたり、ヴエランダに出て寫生でもするやうな風をしたりしてゐる。三十年前から和服で押通して來た私には、どうもかうした女の姿が氣にくはぬ。いやかうした女どもにこそ、此やうな設備はまかせるべきである。さもなくば、日本の長所とか、日本文化の特長とかは、何一つわからない西洋かぶれの、物質文明の憧憬者にのみ、かうした設備の維持はまかせておけばいゝのだ。かう思ひながら、今一度立つて海を見渡すと、足もとから太平洋がはてしなく廣がつてゐる。月下の風景は殊によさ さうに思はれる。

名月や眼下に廣き太平洋

こんなことを口ずさみながら、思ひ殘す所なく、引あげる。そこを出て二三町歸ると崖端に半ば顚覆したバスがある。私達が茶を飲んでゐる間の出來事らしい。それでも大した負傷者のなかつたらしいのが何よりである。私は十年前旅順で、オートバイを避けようとして、車を顚覆させられて腰を打つて、六十何日間大連病院に入院してゐて、妻に迎へにまで來てもらつた折のことを思ひ出して戰慄した。

暫くして頭をあげると、鼻の先に富士の姿が黒々と見えてゐる。どこから見ても富士の姿は同じ

やうである。玲瓏玉の如き富士こそは日本人の理想であり日本の理想でなければならぬ。圓滿であり、眞實であり、而も壯麗であり、雄大であり、永遠に不動不變である。いな、これは富士の姿であると同時に、日本の永劫の姿であり、日本人の永劫の姿でなければならぬと今更のやうに思ふ。世界戰亂の坩堝の中にあへぐ今日の英米佛人の態度を思ふと殊にさうである。

歸途を左に曲つて一碧湖に向ふ。案内記には「日本百景の一、周圍一里餘、碧水漫々として閑雅幽邃、宛然名畫の趣を存し、清遊行樂の好適地」とある。ぐん〳〵と登り道の盡きたあたりにある一沼澤である。幽邃の感は兎に角碧水靜に湛へて何となく愛らしい趣のあるのは、餘りに大湖ならぬ故か。決して芦の湖や中禪寺湖のやうな凄味のないのがいゝ。

指顧の中に秋深し水天一碧湖

とでもいひたいが、決してそれほどの味はない。百景の一には入れていゝとしても、それは都に近いからといふことを割引して考へたいやうな氣もする。それにしても一碧湖の名は何となく氣障である。昔からの名はないかと聞くと、昔は大池とかいつたといふ。一碧湖よりか、その方がずつと愛らしく、野趣があつていゝ。兎に角天氣のいゝせゐもあつて、氣を落ちつけてくれるのはありがたい。それに沿岸の出入も可成りにあつて、相當に風景の單調を救つてゐることもうれしい。結局

昔時の噴火口に水の溜つたものであるらしいことは、湖水が相當高い地勢にあることからでも察せられる。歸りに見ると湖畔の茶店の側に、例の愛山氏の別莊建設地の標木が立つてゐる。

四

一碧湖を下つて、元の下田街道に歸らうとする邊りに、水族館なるものがあつて、東洋一の大鰻がゐるといふ。長さ五尺もあるといふから、相當の珍物であるらしい。一見を望んでゐる中に、車は勢をこめて走り下つてしまふ。街道に出てから大分長い間坂路を走つて、女學校の裏から右手にとつて下れば、日蓮上人流寓最初の開山といふ佛現寺の門前に車はとまる。まことに寂びた靜な古刹である。丁度誰かの佛事があるらしく、數十人の參集者が見えたが、堂内には日蓮自作の像と、天狗の詑狀なるものが藏されてゐるといふ。詑狀といふのは、附近に現れて害をなした天狗を日蓮か誰かゞ攻めつけると、再び罪を犯さぬと謝罪した時の天狗の書つけであるとやら。今の和尚は決して之を公開しないが、面白い和尚です、と運轉手はいふ。その詑狀なるものを見せない和尚は、面白いばかりか、なか〳〵の賢者である。之を傳說の僞にしておいてこそ、眞に面白いのである。怪しげなものを天下に公開して、賽錢を搔き集めようと企みでもしたら、折角の寺の名も詑狀の傳說も臺なしになるのだ。その先の小高い所に、日蓮親筆の曼荼羅を藏する佛光寺といふ名刹もある

が、同じやうなものだから割愛しますといつて、運轉手は代りに漁市場を見せてくれた。

「これでは伊東は温泉町ではなくて漁業の町だね」

私がその般賑さに驚いていふと、運轉手は得意になつていふ。

「全くです。伊東は單に温泉場として知られてをりますけど、本當は生産地なのです。それを認めて頂かぬと伊東の眞價はわかりません、普通の運轉手で、こんな處までお客さんにお目にかけるものはないのですが、私はかういふ處も見て頂きたいのです」

氣焰をあげながら、「此先に汐吹岩の名勝もありますが、お約束の限度は此邊にして頂きたいものです」といつて、彼は車を引返すのである。

歸りの途中に八幡宮の御輿の渡御があつた。あとで聞くと、やがてこの御輿は海中に擔ぎこまれて、盛んな海祭が行はれるのだといふ。かうした面白い祭も、屁摘祭なども、さていつまで續けられることであらうか。淺ましい文明とやらの無風流な風は、遠からず之等を吹きさらつてしまふことであらう。

丁度二時間半を費して管見を終つて午飯前に宿へ歸る。

午後からは町の西北隅、驛の背後にある、眺望伊東隨一といふ曹洞宗の古刹松月院に詣でる。一寸した散歩には誠にもつて來いである。まだ出來てから間もない立派な寺で一本の古松はその名の

出る處かと思はせる。名月の夜などの光景は、天下にも珍らしいものであらう。網引く發動機船の音は遠くほのかに聞えて、漁舟の影がかすかに動くともなく動いてゐる。谷川の水はさやかに音をたてゝゐる。

名月や網引く聲のかすかにて
名月や水潺湲として松の風

こんな光景が想像される。

旅宿の筋向に一茶堂といふのがある。百四十餘年前俳人一茶が伊東の俳友池田松十の夜琴亭を訪れて「浦風に旅忘れたり夕涼」の一句を殘したといふので、それに因んで創製したといふ一茶羊羹を賣つてゐる。名に憬れて買つて見ると、多少の匂があるのが感心せぬだけで、さう惡くはない。即ち之を賞翫して、一句を作る。

名物の羊羹その名も味も一茶かな

頗る俗つぽい處はあるが、女將に之を贈ると、彼女は之を手にして、にやりとした。けれども何のことかわからぬらしく、堂主に俳句の趣味があるかときくと、只「お茶はやります」といふ。けれど去るにのぞんで、羊羹を買つた私の妻には禮をいつても、句を贈つた私に對しては挨拶もしない。堂主に果して俳句を賞翫する頭と風味があるのだらうか。まして私が彼を祝福して此處にこん

なことを書いてゐるとは夢にも思はぬであらう。

空日雨の中を歸京する。出發に先立つて、宿の美しい娘さんは、自分の家に生つたのだから、汽車の中で召上つて下さいといつて、小栗の一網をもつて來てくれる。まだ、ぽか〳〵として溫い。

「おやまだ溫いんですね」といつて、妻もその好意に感謝してゐる。

汽車の伽にと栗ゆでゝくれる宿屋かな

ゆでたての栗一袋手から手へ

我が山の栗にて候と娘手をついて

此宿の女將の丁寧にして、素人らしい眞心の厚いところがいゝ。それが生み出した栗の一袋である。その溫い栗の一つ〳〵に包まれた溫い眞心、素朴な、飾りのない優しい心、羊羹の百本よりかどれだけか私達の心を摑んだのである。願くは此の美しい優しい心が、娘さん達の心に植付けられて、美しく優しく眞心のある人として生立つてもらひたい。

度々來たい、機を見ては來たい、さうした心持は私達の心にしみ込んだ。見る風景は何もないが、その代りに、心をあたゝめてくれる情がある。旅に求むるものは殊に心の世界である。靈の笑である、喜びである。私は宿の人々の心を味ひつゝ、汽車の中でぽつり〳〵と栗をむいた。

栗むき〳〵驛を數へて京に入る

（昭和十四年十月十七日）

滿鮮汽車栗毛

一

圓公は十年も音信不通にしてゐた大連の烏公と伏龍二人に手紙を出した。

支那人は甚だ面白さうな國民ぢや。同じ拜金の民であつても、とても米人なんかとは比べ物にならぬ程面白さうに思へる。米國に行かぬかといはれても、何の興味もそゝられはせぬが、支那といふと何となく行つて見たい氣がする。同じ東洋人でありながら、日本人とはひどくちがつてゐる。歐米人と比べると、むしろずつと僞善的でない、むき出しな國民のやうに思へるからだ。夏の休を利用して支那をかけめぐつて見たい。出來ることなら蒙古へもはいつて見たい。運よく歸へられたら、歸りにはつけたりで、むき出しな朝鮮も見たい。一體世間のゑらい人たちのやうに、羽織を着たり禮服をつけたりした支那や朝鮮ならば見たくない。そんなものは見盡されてをり知り盡されてゐるやうだ。僕は他所行の着物をぬいだ素裸の支那滿洲蒙古朝鮮人が知りたい。ひよつとすると、ヘソの孔が横ちよについてゐるかも知れぬ。いや二つあるかも知れぬからだ。つまり生きてる支那人が

知りたいからだ。

手紙にはこんなことが書かれてあつた。すると伏龍のはがきには只「まつちよる」とあつた。そしてその側に「支那の漫遊に傷害保險一萬圓をつけるとは何のことだ。我日本の勢力を知らぬか、そんな物の分らぬ奴は先づ滿洲へでも來てよく世界を見ろ。」

と書そへてあつた。

二

圓公がバイカル丸から上陸すると、東洋一だとか何とか威張つてる埠頭の入口に、群衆にまざつて、伏龍の禿頭がてか〳〵光つてるのが眼についたものゝ、あまりに爺臭い恰好を見ると、外國へ來て、頭から人ちがいをしてもと思ひながら、通り過ぎようとすると、「おい、來たな」といふ。やつぱりさうだつたかと思ひながら、圓公は立止まつて、「娘のやうな若い後妻まで貰つたといふのに、そのぢゞくさい顏附はどうしたい」といふと、「いや實はな、眼を惡くした上に、昨日から大腸加答兒で、絶食や〳〵」といつてしよけてゐる。「折角千里の遠方から惡友がたづねて來たのに、何といふ泣言だ。元氣を出せ〳〵」といつて、圓公は畫家の烏公を引つぱつて滿鐵の本社へ出掛けた。

そこで友人T理事をたづねて、滿蒙支漫遊の正確な旅程をつくらうとすると、京奉線は不通だとか、蒙古は今ペストの流行中だとか、大連天津間の航路は滿員々々で、二航海は駄目だとか、色んなことに妨げられて、なか〳〵思ふやうに行かない。やつとのことで十日先の天津行の船を約束して貰つて、先づハルビンまで行つて來ることにして滿鐵を出た。

思つたよりは貧弱な、繪で見た程にもない滿鐵を出ると、右前の方に大きな草原がある。烏公は空つぱな腹をかゝへながら、しきりに圓公に指してる。原つぱの中に棒をたて、四方八方に綱を引いて、それにとりつけた色褪せた布切を見ろといふのだ。運動會があるでもなささうだし、見世物があるでもなさゝうだし、怪しみながら近よつて見ると、赤やら青やら淺黄やらの布切には、奉納何とか書いてある。支那人の名ばかりではなくて、日本人の名さへ書いたのが澤山ある。もう一度眼を下けて見ると甚だ小さい、まるで交番の大きなの位の、祠だか寺だかゞある。入口には龍王廟と書いた扁額がある。祠の中をのぞいて見ると、佛法無邊とか何とか、ゐらさうなことを書いた、汚い旗やら、位牌何とかかいたものが幾つもかざつてある。支那人が一人中に居つて、きぼり〳〵此方の顏を見てゐる。烏公は外にゐる一人の支那人を捕まへて、何やら聞いてゐるが、何のことか說明してくれないからちつとも分らない。が、やがて烏公の話によると、滿鐵が一萬圓出して此祠を立退かせようといふが、廟では頑として應じないといふことだ。その話が嘘か本當かは知るところでないが、「こいつは一寸面白いな。滿鐵が此一小祠にへこたれるといふことが眞實なら、其昔一坪とか二坪とかの土地を讓つてほしいといつて、そつぽを向かれた岩崎より話は面白いぜ」といつて圓公は馬鹿に此話に興味を感じた。「さうやな、立退くだけならどこだつて善ささうなもんやないか、

必ずしも此處にゐなきや參詣人がないといふ譯はないやらうからな、つまりもつと出させようといふのやな、支那人なかなかやりをるな、いろんな處で」と烏公が和していつた。

ふと支那式のドンチャン〳〵といふ賑かな音に耳を引かれた。支那人の婚禮の行列だといふ、眞中に大きな輿を八人でかついで、その前に色んな嫁さんの道具をむき出しにしてかついで行きをる。中で最も目立つのは鏡と金だらいと、大きな置時計である。殊に此置時計は持參荷物としてはなくてはならない貴重なものであると烏公が說明してくれる。けれども肝腎の花嫁は此美しい輿の中には乘つてゐないらしい。「迎ひに行くのかも知れない」烏公は何だか小聲でいつてゐた。圓公には物足らない說明だつたが、說明なんかどうだつていゝ。あの輿の左右の長い棒に、更に枝をさかせて八人でかついであるく處や、重な財產をむき出しにして、路々みせびらかしながら持つて行く處や歌の代りに音樂で道中をやつて行く處を目擊したゞけでも澤山だと圓公は思つた。

三

「すぐ此さきに碧山莊華工宿といつて、勞働者の宿舍があるから見せてやろ」といつて烏公は圓公をつれて電車に乘つた。日本のボギー車なんかよりはずつとだゞつぴろくつて、左右に腰をかけて兩側の吊革にぶらさがつても、まだ橫に大手をふつて歩ける位間隔がある所が圓公には馬鹿に氣に入つて、ぬけたやうで、却つて氣がきいてると思はれた。支那の苦力(クーリー)向の安い電車といふのは

相當お粗末な無蓋車だが、安いことが盛に客をよんでる處も圓公にはうれしかつた。

碧山莊華工宿といふのは名前だけは恐ろしく立派なやうだが、所謂埠頭人足苦力君の寄宿舍である。左右に幾つもの棟が並んだ煉瓦造りの長屋で、小さい窓からのぞいて見ると、何のことはない蒜臭い薄暗い穴倉である。その中に眼ばかりぴか〳〵光つた苦力君が、寢たり起きたりしてる。茶色になつたアンペラの數物からはまるで汁が垂りさうである。豚小屋だといふ感じは、鈍い圓公の頭にもピタリと來る。大連の埠頭に石炭を運搬しながら、一日四十錢とかを貰つて、默々として働きつゞけるといふ彼等の安住の地がこれかと思ふと、圓公は妙な氣になつて、支那と衞生といふことも考へてみたくなつた。

衞生といへば路傍の砂埃の中で、鍋の蓋をとつた儘で賣つてる粽も、圓公には不思議なもの丶一つであつた。眞黑な犬の糞みたいな、笹の葉からはみ出したものが、黑い汁の中から頭をのぞけて、それには蠅がうよ〳〵するほどたかつてゐる。

「あんな腐つたやうなものを、支那人は買つて食ふのかね」

間のぬけたやうな質問を圓公がすると「食ふのなんのつて、彼等には珍味や。腐つてようが腐つてまいが、そんなことは問題やないさ。只安いかうまいかといふことが問題や。蠅の澤山たかつてるのと、少ししかたかつてないのと、二つあつたとすると、多く蠅のたかつてるのを彼等は好んで買ふのや。蠅はうまい方に餘計たかつてるといふのが彼等の哲學や、腐つてるからたかつてるといふ

のやないんやぜ」烏公は怪しけな上方言でいつてつるりと禿頭をなでた。

四

「先づ支那料理を一つ御馳走しよう」といつて、烏公は大連二の何とかいふ店へ出掛けた。二階みたいな、御殿みたいな風に立てた左右に幾つもある座敷の一つへ階段を上つて入つて、色々と料理を物色したが、第一等の店といふ丈あつて、凡てがとても高價である。やつと一決して先づ一品丈取よせてみたが、矢張り日本化した日本の支那料理と幾分かちがつて、それほどうまくない。少くとも圓公はそれほど感心しなかつた。すぐに飛出して日本飯の安いのをとあつて基督教青年會館の食堂といふのに連れられて、「外國へ來て柳川が食へるとは面白い」といつて、命じてみたところが驚くべし、柳川のどぜうは大きな牛蒡のまづいのみたやうな味である。圓公は一口食ひついてすぐやめてしまつた。そして漬物で茶漬をやらうとすると、漬物といふのが、また葱臭い、ニガリ漬みたいなものである。二人は汗をふき〳〵、納りの悪い腹の皮をなでながら、支那風呂へ出かて行つた。

湯屋の入口といふのは一間間口で、ずつと引込んだ所に戸口がある。街路にそうて双泉堂とか、池塘とか、輪煥增鄰とか、湯屋營業とか、金文字の色んな看板やら額やらがかゝつてゐる。特等室といふのへ案内されると、値段は八十錢である。一人八十錢は安くないが、實は一室貸切で一日居

つてもよいのである。西洋風の白い湯舟が二つあつて、キュッとねぢると湯でも水でも自由自在に近代式に出て來る。湯舟の手前には別に一室があつて、左右には休息用の臺がある。つまり誰でもつれて來て遊ぶことが出來、日本の待合といつてもいゝ風になつてゐるのである。

「此處では支那人が床屋もやれば爪磨きもやるんやぜ」

烏公の此語をきくと「そいつは面白い」といつて圓公は直ぐに床屋を呼んだ。日本の内地と同じく五十錢の床屋が、ちよき〳〵と毛の數の少くなつた、禿けそこねた頭をかたづけると、また爪切りを呼んだ。圓公は爪でも割られはしないかとびく〳〵しながらみてゐると、實にうまいものである。支那人は左の指を小さい鑿の臺にしながら、印判でもほるやうな風にして、すうと向へついて行つては、得意さうに圓公の顔を一寸見る。

「甘いものだね」といふ聲に應じて、「ほんまにうまいやろ」と風呂の中から烏公がねむさうな聲で答へる。爪切り先生は何もいはないで默つてさつさと片づけて出て行つた。風呂から出て行かうとして方々が見たいといふと、案内者は喜んでいろ〳〵な風呂を見せてくれた。支那の婦人の一室だの、西洋婦人が入浴せんとしてる處だの、遠慮もなく引あけてのぞかせた。そこ此處には大きな支那人がはだかになつて、タオル一枚を褌としてごろ〳〵としてゐた。突然烏公は、「おい圓公、風呂といふと上海での女の風呂事件といふのは面白いやないか」といつて、いつかの上海に於ける男女同等待遇要求運動の際のことを語りだした。女だつて男子と同樣に錢湯にはいれないといふのは不都合だ。

女も入れろ〳〵とあつて、或る日上海の新しい婦人達は、十人ばかりぐるになつて、素裸で男子のはいつてる錢湯に飛込んだといふのだ。何でもないことの樣だが、事の裏面を考へて見ると、支那の女は容易に錢湯に入ることが出來ぬ、公衆の前には女は素裸になることを許されてゐないといふ習慣などがよく分るのだ。さうきいて見ると、支那の男の子は手足や顏以外の肉體を露出すること、內地の日本の子供と餘り變りはないが、女の子に至つては、赤ん坊に至るまでまるで袋に入れた如く包まれてゐることも分るやうに思つた。「全く夏なんどは赤ん坊がむれさうな氣がするからな」といつて、圓公はしきりに支那の女の子のことを氣にやみながらそこを出た。

湯屋の通りは浪花町とか何とかいつて、大連の銀座通りである。夕暮近くなつたせいもあらうが、他の大通りに比べるとずつと人通りが多い。大半の店舗はむしろ日本人のだが、それでも通行人には可成支那人が多い。三人五人と、それがのそり〳〵歩いてゐる。そのくせその殆んど凡てが男ばかりである。女は滅多にゐない。偶にあれば勞働者階級の、どつちかといふと身なりは至つて粗末なものである。色はどす黑くつて、てか〳〵と脂肪で光つてゐる。支那美人はゐないかなと思つて圓公がキョロ〳〵と見廻してゐると、ふとやゝ濃い空色の支那服を着た若い婦人が、同じ若い支那人に手をひかれんばかりにして、すつと目の前を通つて右に廻つた。ハッと思つてる中に女はふり返つた。まるで湯からでも上りたてのやうである。眞白にぬりたてた顏はお化の樣に光つて、空中からでも降りて來たやうである。「奇麗なものだな。繪だなあ」圓公はいつまでも見送つてゐた。

五

其晩圓公は烏公を連れて、T理事からの招きに應じて、星ケ浦の星の家といふのにタクシーを飛ばした。行つて見るともう一時間も前からT君は待つてゐた。支那風呂の研究が少しく長過ぎて居たことを圓公は頻りに詫びる外はなかつた。

料亭のだゞつ廣い芝生は月の光に薄光つてゐた。死んだやうな海がぼんやりと月光に溶け込んでゐる。そこで蒙古の大砂漠横斷の話だの埃及旅行の話などを聞きながら晩餐を終ると、そのまま大砂漠を目がけて飛んで行きたいやうに、血の流れをそゝられた圓公は、まだ自分の體に割合に若さが漲つてゐることをつく〳〵と喜んだ。

やがて一里餘りを自動車を驅つて、大連に歸ると、圓公は直ぐに支那の芝居といふのを見に行つた。入口の看板には、右から横に「保善茶園」と書いてあつた。それに戲場といふ文字も何處かにあつたやうだが、外から一寸見ただけでは、殆んど劇場などといふ感じのしない建物である。建物といふよりも店續の普通の小舍である。中にはいるとその古びた具合といひ汚なさ加減といひ、まづ昔の宿場の茶店とでもいつた體裁である。柱にでも觸れようものなら、煤がつきさうな氣がする。座席といふのが矢張幅五六寸に三四尺の、小舍にふさはしい眞黑な腰掛である。それ

が二十計りづつ三四列も土間に列べてある。テーブルとか卓とでもいひさうな、一尺に二尺位のものがその前に置いてある處もある。何でも烏公は四十錢づゝかを出して、二等か三等かの切符を買つたやうだつたが、大部前の方に連れて行かれて、腰を掛けようとするなり、いゝ加減な年をした男が、まるで垢で煮しめたやうな莫蓙を二枚もつて來た。かけるとズボンが臭くなりさうな氣がして、圓公はそれを辭退した。次のボーイ見たいな男が、すぐと茶と西瓜の種とを二皿づゝもつて來て、卓の上においた。はゝあこれで茶園だといふのかなと圓公はいつた。代は思召しだといふので、烏公が二十錢やつた。すぐとまた雑巾のやうな、黒ずんだ、いかにも汚けなタォルをしぼつて二つもつて來た。それで汗をふけといふのであるらしい。圓公は身ぶるひしながら顔をそらして、じつと舞臺を見て居た。

舞臺の上では變な男やら女やらが出たかと思ふと直ぐに引込む。はいつたかと思ふと、又出て來る。場面が丸で表現派式とでもいつたやうに、それからそれへと變つてゐる。場面が代るらしい毎に、室内の背景を書いたきたない幕と、室外の景色をかいた薄つぺらな幕とが、代る〳〵する。右手の方では、賑やかにヂャン〳〵ドン〳〵と、る〳〵と下ろされたり卷き上げられたりする。芝居だか何だかよくは分らないが、帝劇でいつか金だらいや太鼓のやうなものをたゝいてゐる。新しい芝居といふやうな、嚴見た梅蘭芳の支那劇とは、いささかちがつてゐるやうな氣がする。

肅な氣持は藥にするほどもなくて、戯場とか茶園とかの文字が示すやうに、全く新派の茶番見た

いなものではないかといふ感じがする。二人を外にしては凡てが支那人ばかりであるが、それが手を叩いて喜んで見てゐる。中には腹をかゝへて笑つてゐるものもある。

だが面白いことには、日本の劇場で見る舞臺とは全でちがつて、一體の感じが橋のない簡素な能舞臺のやうである。つまり額縁から奥へ引込んでゐる今日の普通の舞臺とは違つて、舊時の樣に額縁の處から前へ突出されてゐる。突出された舞臺の前方兩端には大きな柱が一本づつ立つてゐる。そこには左右に展開する白木綿に廣告をかいた幕が垂れるやうになつてゐるが、舞臺の下手の方には裸のまゝの大小道具がごろ〳〵ところがされてゐる。必要に應じて、演出の間でも、道具方ではなくして、俳優によつて、門もかつぎ出される、椅子ももち出されるのであつて、その道具の多くが象徴的のものである事は、日本あたりへ來るのとちつともちがはない。

かうした象徴的な道具と、引幕式の背景主義とは支那劇特徴のものであるらしいが、そこに日本の寫實劇などが學ぶべき處が澤山ありはしないだらうか、之によつて費用と幕間の時間とをどれ丈けか節約し得るからだと、圓公は日頃の主張を烏公に物語りながら、しきりに膝の下の方をかき出した。そして飯粒のやうなものが手にさわると、ぐつと力を入れて押へつけて見た。ぴちつといつて何だかつぶれたやうに思つた。彼はその粒みたいなものが、何んとなく南京虫らしいやうな氣がして、つゞけて其處に居ることがたまらなくなつて來た。

ひよいと顔をあげると、御幣でこしらへた蓆のやうなものが、頭の上に左右にぶらさがつてゐる

るのが目についた。圓公が面白がつて尋ねると「あれがその支那の煽風器やね」と烏公はゲラ〳〵と咽を鳴らしながら答へた。蓆のやうな大きな煽風器を綱を引いてえんや〳〵とゆりながら、室内の空氣を動搖させて涼をとるのだといふ。圓公がしきりに中世紀式の趣味に感心してゐると、薄黑い球のやうなものが、眼の前をかすめて、舞臺の右側の下から、後方二階棧敷に向つてヒュツと一つ飛んだ。おやつと思つてふりかへつて見てゐると、又しても二階の他端に向つて黑球がスツと飛んだ。二階の見物はそれを見事に片手で受とつてゐる。烏公の說明によると、あれが矢張熱く煮たてたタオルを客の註文によつて投げてやるのだ。圓公は芝居よりもかうした餘興の方に興味を感じながら其處を出た。

出てしまつてからの圓公の頭には二つの疑問があつた。日本の劇場といへば、觀客は全く女ばかりである。芝居といへば昔から女子供の見るものとされてゐる。それ位に日本の劇場の客席は殆んど三分の二位女で滿されてゐるが普通であるに係らず、支那の劇場には如何にも女らしい顏が少かつた。全體の五分の一か十分の一位しか女はゐなかつた。北平だつて南京だつてさうなのだらうか。矢張こんなに女の外出は少いのだらうか。これが疑問の一つ。それからあんな寄席見たいな小劇場としては、いくら一等劇場にしても、何となく入場料が不釣合に高いやうな氣がした。勞銀との釣合がをかしいやうに思つた。支那にだつて金持はあるといはれゝばそれまでだがあれ位きたない劇場にさう金持などが覗きさうにも思はれなかつた。此疑問は北京にでも行つて

解決する外はないと圓公は思つた。支那語の一語も分らない圓公の直感は餘りに漠としてゐるし十年餘りも大連に住つてゐながら、片言しか分らないで、只日本人を相手にのみしてゐる烏公の說明も餘りに怪しけなものであつたからである。

六

その翌日烏公は今日こそ本當に大連一の珍しいものを見せるといつて、隣の姪子樣を引張り出した。顏の恰好が可愛い姪子樣に似てゐるので烏公がさうした尊稱を奉つてゐるのである。姪子樣はまだ三十餘りの實にいゝ人であつて。のべつに、にこ〳〵してゐて、少しばかりあご髯をはやして、誰が見ても可愛い姪子樣である。それでゐて一寸も風采なんかにはかまはない、見るから尊敬の念を催させる人である。世情に情じ下情に詳しくして、殊に怪談通である。それが圓公を案內して、裏の裏の珍らしい大連を見せてやらうといふのである。圓公は姪子樣が乘り移つた樣な顏をしながら後について行つた。

電車を下りて少し左にまはつたと思ふと、何だか陰氣な建物の中に導かれた。看板には宏濟善堂と書いてある。善の字だとか福の字を矢鱈につかふのは支那人の好みである。何かと思つたら慈善病院でゞもありさうに見える。やがて姪子樣が事務員に談判して、その一人をつれて來た。

一ばん汚ないのが見たいといふやうなことを蛭子様が仰有つてゐる。一同は右に曲つたり左に曲つたり、階段を下りたり上つたりして、奥の奥の、ずつと奥の下の方の一室の前に連れて行かれた。のぞいて見ると、暗い室の左右に、痩せこけた支那人が、十人ばかりづゝきよとんとして寢たり起きたりしてゐる。まるで骨と皮である。眼だけはピカリ〳〵と光つてゐる。中には顏一面に眞白なものをぬつたのもある。寢ころんだのは死んだのではないかと思ふやうである。まるで獄舍とでもしか思へないやうな汚い室には、油で煮しめたやうなアンペラが敷いてある。患者はその上に只ごろ〳〵として生活してゐるのである。生活してゐるといふよりはむしろ死にそこねてゐるやうである。いな、死すべくそこに放棄されてゐるといつた方がいゝやうである。四周の壁は南京虫をつぶした汁の跡で、白いところが殆んどなくなるまでにきたなくなつてゐる。いくら慈善病院にしてもあまりにひどいやうな氣がするので、圓公は始めてそれが何人であるかをきくと、凡てが阿片中毒患者だとある。金もちが阿片の味にすひつけられて、だん〳〵に零落して行路病人にまでなつたのが、此處に送られたり引とられたりして、日々の成佛をまたれてゐるのだと聞くと、少しも力のない、あの物凄い眼の中に、過去數十年間の現實的な皮肉な人生の姿がまざまざと讀まれるやうな氣がして、圓公は長くそれを正視するに忍びなかつた。

眼をうつすと、長さ五六尺、幅二尺たらずの舟のやうな、一方が次第細りに細つた箱が一つ、室の前の地べたに打やらかしてある。その上には蠅がうよ〳〵とたかつて、何だか戒名みたいな

ものが書いてある。今日か昨日あたり死んだ誰かゞ箱に收められて、土葬にされるまでの一日か半日を其處に打投げられてゐるのだといふ。その側には同じやうな箱が二十も三十も積上げてある。室の中にごろ〳〵してゐる衰殘の人々を呑ませうとしてゐるのだと蛭子様が鼻をつまんで通譯なさるまでもない。目の前に棺箱を積み上げられて、朝に晩にそれを見てゐるさうした人達の氣持も、棺箱を茶箱か何かのやうに思つてゐるらしい口吻をする事務員達の心持も、圓公には面白くてならなかつた。凡てが誰にも免れない運命だと超越してゐるといふよりも、凡てが人の事なのである。目の前に禍が落ちて來るまでは、自分の苦痛ではないのである。最初にはそれが苦痛であり、不快であり忌はしいことであつても、慣れて來ると、全く人の事になつてしまふのだ。

それは兎に角に、阿片の中毒があんな悲慘な末路を招くといふことは明でありながら、それをやめられないといふのは何といふ禍であらう。やめさせようとするのを、禁令をくゞつてまでも密輸入したり、それを嚴禁しようとする日本の態度をうらんで、ずる〳〵で公然の秘密として、輸入させる他の國の態度に好感をもつといふ國民は、何といふ氣の毒なものであらう。さういへば酒の害だつて煙草の害だつて大した差はないぢやないか——こんな聲が圓公の頭の隅の方で囁いた。人間、文化、本能、理性！　思ふやうに行かぬのが人生だなと圓公はつく〳〵思つた。

善堂を出ても、まだ異樣な臭氣が鼻の底にこびりついて、氣のぬけたやうにきよとんとして、死をまつてゐる澤山の顏が、はつきりと目の前に坐つてゐる。戒名を書いた儘、地面に投げ出さ

れた、削りもしてない挽き割つた儘の板の棺箱！あれが今でも圓公の側にころがつてゐる。本當に大連一の珍らしい、いや世界一の珍らしいものであるかも知れないと圓公は考へ續けた。

七

再び電車に乘つて、圓公は烏公と二人で、大連の所謂郊外市なる小崗子の小盗市場といふのを見に行つた。小盗といふことは、どこから出て來たのか知らぬが、「せうとる」と讀むのであつてそこで賣られてゐる凡ての物は、皆何者かゞ方々で盗んで來たものだといはれてゐる。まさかにそれが本當だらうとは思はれぬが、兎に角日本では見られない、いや世界の他の何れの國でも見られないだらうほど、奇怪至極な市場である。支那には至る所にこれがあるといはれ、大連にだつて、此小崗子と例の埠頭の華工宿の附近と二ヶ所にある。

一口にいふと、凡ての小盗市が古物市場である。例へば角のボタンでも貝のボタンでも、心のはみ出したやうな細帶でも、自轉車のフレームの錆びたのでも、ハンドルでも、德利の古物でも空罎でも、古靴の片足でも足袋の片足でも、何から何まで人間生活に必要であり、又はありさうなものは、悉くが拾ひ集めて此處に陳列されてゐるのである。而もそれが日本の古物店の如く、雜然と積まれてゐるのでなくて、まるで珍寶の如く、名器の如くに、順序よく奇麗に排列されて

ゐるのである。例へば心のはみだしたやうな四五尺の細紐の如きでさへ、其の先端を丁寧にそろへて、何千本といふ大きな束が、三つも四つもちやんと店頭にならべてあるのである。「あんなものが一體買手があるのだらうかね」といふ圓公の愚問に對して、「買手があるさかい、商品として陳列されてゐるんやろな」と烏公は至つて得意氣に咽をならして答へた。尤も此烏公といふ男は、男前は貴公子見たいだが、のべつに口をあけて、がら〳〵と咽を鳴らしながら笑つてゐるので、それが得意氣なのか感心してゐるのか、皮肉つてゐるのかよくは分らないが、圓公の質問が如何にも愚問である所から見ると、烏公の今の答は得意な笑ひを含んだものであるらしかつた。

圓公が怪しみながら、しきりに店の中をじつと見つめてゐると、中から支那人が出て來て、何か大きな聲をした。怒鳴られでもしたのかと思つて圓公はびくつとした。どなるどころか、何か買つてくれといつてゐるのだときくと、今度はよくある支那人の寶物屋さん見たいに、ねだりでもするのではないかといふやうな氣がして、圓公は足を早めてそこをにげ出した。

市場の眞中へ來ると、小廣場には腰掛のやうなものが少しばかりおいてあつて、五十近い、てかてか坊主が、妙な聲をして何やら頻りにしやべつてゐる。支那の浪花節とでもいはふか、それとも一種の講談とか落語とでも云ひさうなものをやつてゐるやうだ。側では蛇味線見たいなものを小さい女の子が彈いてゐる。十數人の支那人が腰掛にかけたり、寢ころんだりして、熱心にそれをきいてゐる。時々山らしい處に至つて、てか〳〵坊主がチヤオ〳〵ペオバといふやうなこと

をいつて、油汗を流して得意氣に述べてゐると、手を叩くものもある。笑ふものもある。何かの支那繪でも見たやうな光景その儘である。要するに市場へ寶買に來る人々をあてこんでの辻講釋といつた風のものである。附近には勿論支那風の珍妙な食物店がならんでゐる。その凡てが人間の食ひものとは思はれぬやうに、きたなけで、不快で、黒ずんだ奇怪なものである。そしてその凡てに蠅が雲の如くにたかつてゐることはいふまでもない。支那人はそれを買つて平氣で而もうまさうに食つてゐる。

八

かうした奇怪な不潔な長屋店が、縱横に限りなく並んで、其間をゆつたり〳〵、のそり〳〵と支那人が左往右往してゐる。この間にあつても、圓公ならずとも何人の目もひく色彩は方々に散在してゐるのである。それは支那特有の强烈な單色の紋緞子を着た若い私娼である。それが二人三人づゝ手をつなぎ合つて、白粉でぬり立てゝ路次から路次へと示威運動をやつてゐるのである。一間間口の飲食店とか何とかホールとでも云ひさうな店先からも、さうした强烈な色彩と、調子の高いなまめかしい音聲とは、行人の目を射、耳をかすめるのである。だが烏公のいふ所によると彼等私娼の賣る媚の價が、日本貨幣で僅に五錢だといふに至つては、さすがの圓公もどうしても

信ずることが出來なかつた。淺草公園に巣を食ふてゐる乞食仲間の肉の價だとて五錢だときいてゐるに、ビカ〳〵な緞子の媚が五錢では緞子が泣く、緞子が泣く。圓公は即らいつた。「五錢だといふのは嘘ぢやないか、君は自分でそれを買つたことないんだろ?」「勿論や、でも皆さういふとりまんがなあ」「君は大方さういふだろと思つたさ」圓公は如何にも烏公の話を信じなささういつた。

よし、支那の私娼の媚の價五錢說が眞實だとしても、また圓公がそれを信じないとしても、支那にも私娼が盛に行はれてゐる、生活の程度の甚だ低い支那人も、生きんが爲には可成に惡戰苦鬪しなければならぬと同時に、淫を賣り媚をひさぐといふことが、一般支那人の間には何でもないことゝされてゐることは、その後に圓公がある支那通から聞いた次の話でもうなづくことが出來るであらう。

それは小崗子警察署長の話だといふのだ。署長は小崗子に支那人の賣笑婦があまりに多いのに閉口して、或る時私娼狩をやつた。ところが狩られて來た婦人の中に可成に年長の婦人がゐた。婦人と同時に引張られた若い青年新聞記者がゐた。調べて見ると青年記者はその賣笑婦人の息子である。そしてその息子が母親の賣笑の番をしてゐたといふのである。大連のある新聞の記者をしてゐるといへば、支那人でも相當學問のある方であることはいふまでもない。署長は驚き且つ怪しみながら、青年にきいた。「何故にそやうなことを母にさせるのか」と。青年はしやあ〳〵と

して答へた「食へないから仕方がありません。」署長も此答をきくと、如何に支那人の生活が苦しいものであるかを思ふと同時に、道義心の程度が如何に低いかに呆れてしまつて、爾來私娼に對して手をつけることを控へねばならぬやうになつたといふのだ。

小盜市場をぬけて電車通りへ出ようとすると、一人の支那婦人らしい聲が二人の後をつけ出した。そして何かしら訴へるやうな、歎くやうな聲でしやべりつゞけてゐる。圓公は氣味が惡くなつて足を速めた。女の訴へる聲もずん〳〵と速度をはやめて來るやうである。線路を横ぎると女の聲も横ぎる。聲は圓公の背中から出て來るやうである。振り向きでもせうものなら、聲に呑まれでもしさうである。圓公は身をちゞめるやうにして、振向もせずに而も氣取つたやうにのつそ〳〵と歩いた。歎くやうな聲ものつそ〳〵と歩いてゐる。烏公は云つた「乞食やさかい知らん顏しとりなはれや。」圓公は始めて訴へるやうな聲の素性を知つた。

聲はどこまでもついて來る。もう一町もついて來てゐる。圓公は薄氣味惡くなつて、「少しやろかな、可愛想になつて來た」といふと「やつたらあきまへんぜ、やつたら四方八方から、うよ〳〵出て來て取り卷きまつせ」と烏公が脅かす。圓公は身ぶるいしながら、圓タクを招いてひらりと飛び乘つて息をついた。

九

圓タクではない、超半圓タクに乘つて逃げ出した圓公は、訴へるやうな、憐を乞ふやうな、異國的といふよりも、もつと魂の底を流れてゐる人間的な、そして社會的な、哀愁のうめき聲が、どこまでも後を追かけるやうな氣がして、人間生活そのものについて此處でも考へないではゐられなかつた。

單なる目に見える支那人の生活、それには只樣式の差別があるだけである。樣式の差別の上に現はれた異國的な姿、自然の風光、只そんなものを犬の樣にほつき歩いて見まはる丈けなら、自分はわざ〳〵金をかけて此處まで來る必要はない。支那人の生活の內面にひそんでゐる民族的の感情、地理とか言語とか風俗とかが異るが爲に、日本人の生活と異つたり、又は同一であつたりする人類的の情緒の生活、思想の生活、さうしたものの底に流れてゐる何物かを、出來る丈け知らうと思つて來たのであるからには、自然の勢として、蔭の生活も知らねばならぬ。闇の生活をも覗かねばならぬ。といつて圓公には今更闇に咲く花を摘んで、木の實までももぎとつて味ふほどの野獸的な若々

しさと勇氣はない。それには圓公は實際少しく老ひ過ぎてもゐるし、一つには彼の心の底に、妙なものが流れてゐる。珍しい異國風なものに對する好奇心よりも、忌はしくも不潔な支那人の臭氣に對する潔癖感と、民族的な自尊心とでもいふやうなものが、彼の頭の中を占領してゐる。その上支那の闇の花の前に跪くといふことは、彼の道義心といふやうな固苦しいものよりも、高ぶつた氣取つた氣持の許す處ではない。けれどもそんなことをいつてゐた日には、人間生活の姿の最も赤裸にあざやかに見える一面は分らない。人間生活の表面のそれよりももつと眞實な姿は、むしろ闇の中に輝く光を見つめるのが近道であるかも知れない。

圓公がそんなことを考へてゐる間に、超半圓タクはぐるりと横町へ廻つて、ぴたりと止つた。烏公は、小さな路地をはいつてぢきに止つた。

暖簾をくゞつてはいると、意想の外の純日本式のめしやである。相當に物價の高い大連に不似合に、存外安くて一寸したものを食はせる。餘りに綺麗でないのが欠點だが、日本橋あたりの有名なめしやなどに比べても、さう怒るほどのこともない。さしみだのお汁だの、何やかやと、ずい分たつぶり食つて、二人で何でも一圓五十錢ばかりだつたと思ふ。

夕食を終ると烏公を促して又超半圓タクに乘つた。そして御苦勞なことにも、また小崗子に出かけた。いふまでもなく闇の花を見物せうといふのだ。

一體支那の商店といふのは、日本のそれとちがつて、店頭に品物を陳列してゐない。看板だつて入口の左右に小さい金看板が下げてあるか、商寶によつては色んなシンボル見たいなものを入口の軒につり下げてゐるのが目立つだけで、本當の商品は家の中へはいらぬと分らない。娼家といつてもさうした點では、普通の商店とは餘り變つたことがない。別に際立つて一廓が設けてあるでもない。只美しく着飾つた艶めかしい若い女が、普通の家並の入口をうろ〳〵してゐるに過ぎない。入口だけて廣くつて一間間口である。そして十數軒の娼家といふのが、美しくもなければ大きくもない、まづい小ぎたない、煉瓦造の平屋の、而も長屋である點は、何處でもの日本の娼家の多くが、いかめしい大厦高樓であるのとは雲泥の相違である。直覺すれば分らぬことはないが、間のぬけた圓公などには、とても容易に判別がつかないで、むしろ餘りにも外觀の平凡なことが不思議の一つであつた。

烏公はまづ自動車の助手を煩はして、內部の一瞥を申込ませたが、所謂大店とか大籬とでも云ひさうな、幾分威張つたらしい家では、一向に異人種を受けつけない。助手君は何軒かに出つ入りつしたが、少しも色よい返事がない。いつか中等學校長の滿鮮旅行の際、ある校長さんが引つぱりあげられて、數日間閉ぢこめられてゐたとかいふのとはまるで話がちがふやうである。とう〳〵ある

一軒で、本當に見る丈け――見ることを支那語で看々といふ――ならいゝといふことになつて、喜の中にも、おど〳〵しながら、案内されて店の中へはいつて行つた。案内されたのは薄暗い四疊半位の一室、といつても全く土間である。隅の方に、薄ぎたない支那風の寢臺がちよこんとおいてある。室の中はガランとしてゐる。素より闇に咲く花の姿も拜まれねば香を臭ぐことも出來ない。之ぞといふ裝飾も何もない。まことにあつさりした看々である。いかにも看々丈けなら差支ない筈である。日本のやうに靴をぬぐでもなければ、二階を上つて廊下を渡つて、奥へ奥へといふ面倒もなければ何でもない。只靴の儘ですつとはいつて、すつと出る。まづおまはりさんが掃除の檢査にでも出かけたといふ恰好である。これでは話の種にもならねば、生活の裏面も何もあつたものではない。圓公は狐につまゝれたやうな顏をして看々を引上げだ。

うろ〳〵する中に小格子とでもいひさうな家から一行を招いてゐる。これは面白い。仕方がないから此處へでもはいらうといつて、烏公は先に立つて圓公を案内した。そして臺所見たやうな處を通つて本當の奥の室に通つた。

「君大丈夫かね、首たまでもつまれて、裸にされて歸れないなんていふやうなことはないだらうね、君」

びく〳〵しながら圓公がいふと「そないな馬鹿なことがあるもんやな」と烏公はきつぱりと保證した。室といふのはやつぱり前と似たやうなものである。いや前に見たのよりも、もつと狹くて、

もつときたなくて、隅つこには色んながらくた道具見たいなものがつみ上げてある。そしてそれが穴倉のやうにしめきつてあつて、窓一つありさうにも思はれない。呼んだつて叫んだつて、外界と交通がありさうにない。圓公は息がつまるやうな氣がして、汗をふき〳〵扇子をつかひながら立つてゐると、骸骨に着物を着せたやうな、青白い無氣味な、如何にも下司ばつた闇の花君、いや肉のお化けが、暗燈のやうな暗い電燈の下にぼんやりと立つてゐる。烏公が日本語だの支那語まざりに今一人の丸顏の花を相手に頻りに何かを話してゐる。何一つこれといつて話すことのない圓公は、何だか妙な不安の念にかられつゝ、手さけのカバンを後生大事にかゝへてゐる。やがて一寸といつて、烏公は一人の女に連れられて隣の室へはいつて行つた。不快と不安との念は烈しく圓公を襲ひ出した。肺結核のお化の樣な骸骨君は突然日本語で語り出した。

「ねえ、一時間ばかり遊んでいらつしやいよ。」

圓公は目を丸くして、かたくなつて默つてゐた。女は頻りにすゝめたり、ねだつたりして、自分達の境遇の慘めさを訴へたりした。

「あゝこんな生活はもうつく〴〵いやになつた」

「いやになつたら早く廢めたらどうだい」

「えゝ本當に早くやめたいんだけどね」

「お前は此家のものかな」

「家はずつと田舍なんです。こんなことをするつもりで、此處へ來たんぢやないんだけどね、自分の家がこまつてるんだからねえ」

骸骨君の日本語は極めて流暢で、立派に物になつてゐる。そしてその魂の底にはやはり何處の女にも流れてゐるやうな血と涙とが流れてゐる。そしていふ所が眞實だとすると、闇に咲く花の環境には、矢張大して差別がなささうだ。ふいと顏をあげて見ると女は涙を拭ふてゐるらしい。圓公はもう居るにたへなくなつて、チツブをつかませて、烏公を呼んで、穴倉の中から疾風の如く飛出した。

一一

暫くすると二人は大阪町の新地で自動車を下りてゐた。其處には小崗子とちがつて、全然日本人相手の朝鮮の肉の花が咲いてゐるのである。淺草あたりに見るやうな、小料理店といつた風の家がずらりと兩側に並んでゐる。道の幅は素より一間位しかない。

二人がその明るい路地を、ぶら〳〵してゐると、左右の店口から喧しく呼ぶ聲がする。聲の主は凡てが朝鮮の女である。五六人、七八人、中には朝鮮服を着てゐるのもあるが、その多くは、すつかり日本風をしてゐる。髪の結ひ振りから、着附なら帶の結び方なら、純粹の日本人と比べて何の變る處はない。そしてそれが純日本人の語調で、「ねえ一寸」と呼びかけてゐるのである。

「ほゝう！　これは驚いた！」

圓公は呆れながら左右を打眺めつゝ、ゆる〳〵と歩を進めた。

「入らつしやい。遊んでらつしやいよ」

入らしやいの洪水は左右からあびせかけられる。場合によると聲と共に女達の手がすつと二人の腕をつかみさうになる。ひよいひよいと身をそらせようとすると、今度は反對側からの腕が素早くつかみ附きさうになる。つと二人の歩はとまつた。左側の家からぞろ〳〵と七八人が出て來て、二人をとりまいてしまつた。

「おいよせよ〳〵」

生ぬるい聲は女達にとつては、寧ろ刺戟にはなつても、制止の聲とは聞えなかつた。

二人の體はふわ〳〵と浮いたやうに、庭の中へもち込まれた。押す！　引ぱる！　何だか蟻が餌を引ずるやうに、いや、まるで、旋風にでも捲上げられるやうにして、二人はいつか二階の一室に吸ひ上げられてゐた。

烏公はもうにや〳〵と笑ひながら、サイダーを命じてゐた。そして闇の花達は若くて好男子である烏公をとり卷いて逃げようとしなかつた。圓公は忘れられたやうに室の隅つこにぽつんとしてゐた。

何時か烏公はその中の可愛らしい、恐ろしく快活な、優物を見つけて、それにすゝめて朝鮮服を

着ることを要求してゐた。女は簞笥の底から、うすものゝ朝鮮服を出して、する〳〵と着かへて二人の前に坐つた。けれども彼女等の語る處は悉く日本語である。座敷の構造から大抵の器具は凡てが殆んど日本風である。圓公は餘りにその日本化してゐるのに驚くよりも、寧ろ物足らなさを感じた。けれどもさずがに見なれた環境は、彼をして小崗子に於けるが如き不安を感ぜしめるやうなことはなかつた。

その内に朝鮮服は非常な雄辯と猛烈な勢を以て、烏公に遊興を迫り出した。最後には死んでも此儘歸しはしないなどといひ出した。彼女は商賣氣を離れて、すつかり烏公にまゐりこんだ風に見せかけた。圓公は新な不安を感じ出した。

ポツ！

忽然として家中の電燈がすつかり消えてしまつた。どうもフューズの飛んだのではないらしい。メーンスキッチが切れでもしたのだらうか。いやひよつとすると、此が此地の遊興强制の方式どもではなからうか、かう思ふと圓公はたまらなくなつて、女達のとめるのをふり切つて、手さぐりでぐん〳〵と逃出して階段を下りた。そして待たせてある自動車の運轉手と助手とに助を求めに走つた。

暫くしてやつとのことで自動車に歸つて來た烏公は目をしばだたきながら、

「あゝ、今夜こそ本まによはりよつたなあ！」

「だがね君、僕があの女だつたつて、君の樣な男を見たら放しやしないからな」

圓公がおだてあげると、烏公は例の鼻を鳴らしながら、ニヤリ〳〵と笑つてゐた。

二

成るべくなら蒙古まではいつて見たい。少くとも哈喇寺の見られるモリミヤオまではのぞいて見たい。

圓公はこの考で、適當な案内者を滿鐵内で物色したが、そんな蟲のいゝ註文に應じてくれさうなものがない上に、バインタラには、目下ベストが猖獗を極めてゐるといふ報告まで耳にすると、T理事の親切で折角交渉までしてもらつたものゝ、何だか最初の元氣はくじけてしまつた。

それに京奉線は丁度張作霖の軍隊引揚げ中で、北京行を汽車による方法がないので、已むなく海路によつて天津から廻らねばならぬといふ。而も大連汽船に交渉して見ると、既に二航海は滿員で如何とも仕方がない。十八日なら船室が約束出來ぬこともないが、それも今日でないと明日はお請合出來ぬといふ話である。

圓公は北京まで烏公に同行して貰ふことにして、十八日の「天潮丸」に乘込むことにして、船は約束したが、さてそれまでの一週間の仕方がない。思ひ切つてその間にハルビンまで行つて來るこ

とにした。

ところが圓公といふ男は、一體で間抜のくせに、馬鹿に用心深い男である、ろくすつぽ金をもつてゐるもしないのに、現金御携帯はどうも不安心だと仰有る。たかゞ千圓足らずの金だ。まるこけ盗まれたつて知れたものだが、それでもハルビンまで行つて來る間でも、信用狀にかへておきたいと仰有る。

始めて海を渡つた男だ、信用狀といふものを見たことのないお方には、御參考になるかも知れぬとあつて、烏公は第一銀行の支店へ案内して、長い時間かゝつてやつと信用狀なんて御大層なものを手に入れた。圓公はニコ〳〵しながら銀行を出たには出たが、今度はまた計算書と信用證書とを別々の處におけといはれて見ると、右のポケットと左のポケットと兩方に入れてきよとんとして御座る。一つの身體でも、別々のポケットに入れるところに、彼の氣の小さい間のぬけた、處がはつきりと見られるやうだ。

一三

あくる朝八時何分かの汽車に乘込むべく、超半圓タクを飛ばしてかけつけると、其處にはもう烏公がちやんと待つて居た。

手提鞄だけをさけて、二人はすうと長い橋を下り、最尾の展望室のある一等車に乘つた。

「おい、此驛では改札をやらないんだな」

「そこがその大陸式なんやて」

全くこの大陸式はいゝことである。いざ汽車に乘らうとすると、客は雲の如くに集つてゐるのに驛員は十分前位までは丸で知らぬ顏をしてゐる。乘客は汗を流して列をつくつて、長い間立つたまま改札をまつてゐる。それが普通である。

又　田舍の驛へ行くと、時間が來る迄は切符さへ賣らない。切符を賣らないのは事務員の節約かも知れぬが、待合室でまたせたり改札口で長い間またせたりする代りに、いゝ頃にはホームへ出してのんびりとまたせたら、どんな邪魔になるのだらう。そんなことを考へると、改札もやらないで、すうと列車へ乘込ませて、中で適當な時に改札をするなんて、實にいゝ習慣だ、いゝ氣持だ。圓公は先づ此鐵道の第一印象にせい〳〵した。

間もなく花やかな見送人をぞろ〳〵と從へた十人ばかりの一行が、賑かに乘り込んだ。

新派劇のおやま河合武雄閣下夫妻と、帝劇の幹部俳優澤村宗十郎閣下の親子四五人その他であらせられる。

滿鐵沿線の主要都市で、邦人慰安とやらいふふれ込みで、滿鐵の補助の下に興行師がかつぎ廻るのだとやら。そして此一行八十幾人は、昨夜まで四五日間を大連で打つてゐたのであるが、圓公と

同じ列車で長春まで行くのだとある。
俳優閣下達がお乘込み遊ばすと、いや賑かなことゝ。圓公も烏公も眞中の方に小さく縮まらずにはゐられなかつた。
圓公は自分の研究する方面とほ密接な關係がある人々のことだから、折角の機會を無駄にするもつたいないとあつて、やがて先づ河合閣下に向つて大衆劇の前途に對する意見をきいて見た。
「どうも今日の大衆に向くやうな、適當な脚本のないことが一番こまつたことでございます」
要するに結論はこれだつた。圓公はこれをきくと烏公にいつた。
「俳優を藝術家といふのはちと尊敬し過ぎるなあ、おい。」
「何しろお客商賣やさかいな、自分から藝術家やなんて、自惚を起して、とんでもない作品をやらうものなら、それ切り喰へなくなるやろからな」
「全くだ。金色夜叉や不如歸が、今日でもまだむしかへされるつてんだからな。折角の名おやまも氣の毒なものだな」
圓公は慨嘆しながら、宗十郎閣下に向つて、
「今日近松物の一向やられないのは何故でせうか」
ときいて見た。
「どうも近松物は六ケ敷いからでございませう」

とある。語り方が六ケ敷いといふのか、俳優から見て演じ悪いといふのか、文章がよく分らないといふのか、其邊はよく分らなかつたが、動もすれば話をそらさうとされる。圓公は尊嚴を冒瀆せんことを恐れて話題を轉じてしまつた。
歌舞伎劇が依然として一般には好まれながら、藝術的文學的趣味の豐かな物といふよりも、遊戯的頽廢的氣分のみ徒らに好まれ、古典的といふよりも、けば〳〵しい、賑かな通俗的なもののみの喜ばれがちな今日に於て、興行者が營利といふことばかり考へて、近松のやうな、而も非改作の原作の近松物のやうなものに興味をもたないのは、己むを得ぬことながら、折角の歌舞伎俳優が、近松物は六ケ敷いからといつて、徒らに背を向けようとするのは、矢張自然の勢かも知らぬが淋しいことである。進んで之に興味をもとうとするとか、それに一顧も與へようとしないことは、圓公にとつては如何にも物足らぬことであつた。
「やつぱり滿洲、さうだ。日本の劇界も滿洲だなあ」と今更のやうに圓公は烏公に向つて嘆聲を漏らした。
「だが滿洲は茫漠たる寂しさの中にも、未來がありまつせ、洋々たる自由の空氣がみなぎつてまつせ」
「そこだよ〳〵、日本の舊劇界には古典的の味もなければ、新味も覇氣も何もないさ、只銅臭紛々たるのみだ」

圓公は下らぬ處で昂奮しかけた。
汽車はもういつか茫々たる大平原を心地よけに走つてゐた。

一四

やがて圓公は展望車にかけこんで、自然の風物に心を打こんでゐた。
見渡す限り、どこまで行つても只高粱の畑である。熟した高粱の赤茶けた色を見ない處には、青黒い豆の畑が廣がつてゐる。ところ〳〵畔道と思はれるやうな處に、柳やポプラのやうな大きな樹がだらしのない曲線を畫いてゐる。六頭立の荷馬車が處々に道なき道をたどつてゐる。

高粱の穗なみそろひてはてしなくひろごる上を風わたる見ゆ
夕風はさら〳〵吹きて高粱の穗の海の上を靜にわたる
きら〳〵と夕日は照りて滿洲の野良一面は眞赤にはゆれ
高粱のたまの絶え間のでこぼこの路なき路を六頭馬車ゆく
赤ぐろく高粱の實は熟したり眞赤にもゆる光を浴びて
天が下にはても知らなく渺々とたゞひろがれる高粱の畑
高粱の大海の中に一すじの鐵道線路くろ〳〵光る

即景即吟、圓公はまづいながらも兎も角も三十一文字をならべてゐるかと思ふと、十七字で終つてゐるのもある。

一望千里高粱畑豆畑
苦力と馬と高粱と豆畑
柳は綠高粱は黃なる滿洲かな

實際思つたより大きい自然が實に氣に入つた圓公は、其昔北海道を旅行した時の嬉しさにも增して、日本の內地にこせ〳〵して、重箱の隅のみほぢくつてゐる人を、どし〳〵とかうした土地に連れて來たくてならなかつた。

赤々と輝く日が落ちかゝると、妙な方角からひよこりと月がのぞいて笑ひかけてゐた。夢の國にでも來たかと思つてゐた圓公は、矢張自分が地上にゐたことを思ひ出した。

地には高粱天には月の全滿洲

遠い〳〵一里も二里も隔つたやうな地點にぽつりぽつりと燈火がちらつき出した。
「成るほど人家だつてあることはあるのやな」と烏公がいつた。
全くどこにあるかと怪ぶむ位しか、人間のゐさうな處が目に見えない。
「これぢや文明も文化もあつたものぢやないね。小學校なんか行かうたつて、どうしてゆくか、二里も三里も隔てゝ學校へ通ふのぢや泊りがけだ。今でさへこれぢや、昔はどんなに人口が稀薄だつ

たか知れないね。一般の支那人に、全く仁義も道徳もないのは無理もないね」
「本まに孔子の仁義なんてものは、よく開けた特殊階級にのみのことだつたかも知れへんな」
「開けた特殊階級ぢやない。まるで開けてゐないからこそ、いや餘り亂れてゐるからこそ、孔子が閉口してあんなことを說き出したのだよ。文化の行き屆いた所に仁義を說く必要がどこにあるかね」
「それもさうやな」
「いや僕はこれでよく分つたよ。かう水のない、川なんてまるでない、交通の不便な、こんな茫漠たる土地に住んでたんぢや、學問も文化も何もあつたものぢやないな。支那に仁義の道がありながら一般には一寸も顧みられてないことが僕にはよく分つたよ。それで見ると、日本は狹くて仕合せだつたね。大藏大臣の仕事よりか、小さい個人經濟の方がやり易いからね」
「東洋に君子國ある亦故あるかなだな」
「ハハヽヽヽ」
「ハヽヽヽヽハ」
奉天はとつくの昔に通り過ぎてもう長春はぢきだといふ話だ。
河合と宗十郎の兩閣下にきくと、ハルビンへもゆきたいが、ゆくことが出來ないといふ理由は、一行八十人をかゝへた大世帶では、一泊料丈けでも大變だからだとある。
金儲本位の出稼の惨めさが、つくづく思ひやられて、圓公には人ごととは思はれなかつた。

一五

長春までの鐵道は滿鐵の支配下だから、一等のパスを貰つて來てゐる身にとつては、時々列車の中で改札を受けるといふ以外には何の面倒もない。
ところが長春から先は所謂東支鐵道である。第一汽車からがまるでちがふ。此所で乘りかへる上に、一等の寢臺券を貰はないと駄目だといふ。おまけにうまくやればロハで寢臺が貰へるが、まづくやるとてんで乘ることさへ出來ないで、列車の中は危險だといふ噂だ。何が危險かといふと馬賊がゐるといふ。馬賊が乘り込んでるやうだと、寢臺客こそ却つて、金をもつてると見られて危險ではないかといふと、そこはよくしたもので、寢臺の中へは馬賊がはいつた例はないといふ。例がないといふことに不安な安心をして、何とかしてハルビン行の發車するまでに凡べてをうまくやりたいものだと思つてるが、何しろ列車のつくのが夜の八時過ぎで、出るのは十一時である。始めての旅行者には如何にも悪い時間である。道連になるやうな都合のよい相棒でもないかしらと、列車の中をあちこちとうろついてゐると、展望車の中に落つき拂つた紳士が二人ゐる。若い方は陸軍技師で新木氏といふ。圓公の友人の友人で、獨逸へ寫眞の研究にゆく途中をハルビンに一日滯在すると

いふ。今一人のやゝ年輩のはハルビン日々の主筆佐藤氏である。

犬も歩けば棒にあたるなんて、昔の人は實に本當をいつたものだ。矢張昔の人はゑらいものだ。一寸うろ〳〵した丈けで、あたるもあたる二本の立派な、でつかい棒にぶつかつたと密にほくそ笑みながら、圓公は佐藤主筆をまづ第一の心棒として、長春驛着後の二時間半を如何にすべきかを相談した。

いゝ時にはいゝ事がつゞく、佐藤氏は長春にも長くゐたことがあるし、ハルビンのSホテルは氏のお馴染であり、長春にはその支店があつて、そこは氏の別莊のやうなものだといふのだ。卽ちハルビンでは北滿ホテルに行くといふ新木氏には再會を約して、長春につくと、佐藤氏に連れられて、Sホテルの支店に先づかけつけることにした。

長春で下車するなり、先づ助役さんに遇つてみると、T理事からの紹介が行つてるといふので、話はとん〳〵と進んで、ハルビン行きのロハの寢臺券はすぐ手にはいつた。

ホテルに行つて暫くすると、あとから河合や宗十郎閣下の一行がぞろ〳〵やつて來た。私達は其時はもう風呂から上つて、夕食をやりかけてゐた。これも此旅館に於ける凡ての調子を心得、有ゆる女中やおかみさんや娘さんやボーイ達とは、家人同樣の佐藤氏のお蔭である。何の樣子も分らない北滿の果まで來て、かうした目に遇ふといふことは、少くも眞暗闇の孔の中で、聞き馴れた聲で友達に呼かけられでもしたやうな氣がした。

一六

汽車に乘る前のことだ。何でも列車の中の便利の爲にと注告されて、十圓札一枚を、支那の大洋といふ紙幣にかへて貰ふと、十三圓何某くれた。つまらないことだが、悪い氣はしなかつた。が、一ついやなことは、如何にもその札がきたないことだ。世界中何處の紙屑籠をさがしたつて、恐らくあのやうなきたない紙片は見つからないだらう。日本の紙幣にだつて、時とすると貰ひたくないやうなのがあるが、支那のターヤンに比べると日本のきたない紙幣はまだ上等の品だ。ターヤンの多くは緣の線なんて直線ではなくなつて、まるで地圖の海岸線みたいだ。おまけに黑い汚い汗と垢とが、引はげばはげでもしさうである。支那流に誇張した形容詞を用ひると、垢の爲に重さが五倍にも十倍にもなり、厚さ實に一尺とでもいひたい位だ。支那の國民性、國狀、さうしたものが共處にも現はれてゐるとみると面白くも思はれた。

それから何でも發車間際だつたか、習慣によつて時計の時間を二十六分をくらかした。經度とか何とかの關係だといふので、分つてるやうな分らないやうな、何となく變な氣がしながら、物の本に書かれてるやうにやらかした。

暫くして佐藤氏に案內されて、薄暗いプラットフォームを下りて——實に低いフォームだなと、

飛降りる時思つた――堂々と線路を横斷して、中央フォームにつくと、其處にはもうちやんとハルピン行の列車がまつてゐた。

フォームの電燈が暗いので、前の方は見えなかつたが、何でも可成りに後ろの、ひよつとすると最後だつたかも知れない、城塞見たいな高い客車にかぐり上つた。萬國寢臺會社とかの寢臺だといふ。入口なんかもまるで佛壇みたいにぴか〳〵してる。何だか軍用列車とでもいひたいやうな感じがする。そこへ來ると、日本の列車はまるで女性的で、寢臺車なんて如何にもしたしみがあるが、これはまたどこまでも異國的氣分が溢れてゐる。

獨逸の前カイゼルみたいな顏つきと髯つきをした大きなボーイが來て、寢臺券の番號を調べた。さてはカイゼル君はボーイに成り下つたのだつたか。それとも他人の空似か。年はふけて見えるがさういへば、目つきがカイゼルほどに高ぶつて居ないやうだ。カイゼル君に案内されて、夫々室だけは分つた。佐藤氏のと圓公のも四五室離れてゐる。新木氏も乘り込んでゐたが、彼のと烏公のとは寢臺會社のでなくて、別の車でさへある。

窓側の通路に設けられたたゝみ込みの腰掛を引出して、暫く汗をふいてる中に、列車はいつか暗闇を縫つて走つてゐることを圓公は氣づいた。ゴロ〳〵と次の驛で列車が止まつてみると、フォームの上に支那の兵隊さんが、二三間おきに、一人づゝ四五人立つてゐる。劍つき鐵砲を立てゝ、きちんと氣をつけの姿勢をとつてゐるやうだ。これまでの滿鐵の各驛では、日本の兵隊さんが、休めの

姿勢をしてゐたのに比べて、支那の兵隊さんの氣をつけは如何にも皮肉である。大國民らしさがないといふよりも、大砲の音をきくと、鐵砲ほつたらかして逃げ出すといふ噂とはあべこべの感がするからである。「まさかあれは、おれに敬意を表してるのでもなからうから、汽車、さうだ。器械の力、科學の力、いや人類に對して敬意を表してゐるのかも知れない」圓公がこんな冗談をいふと「なあに習慣だよ、只それ丈けだ。あまりだらしがない支那兵に對する、訓練者の命じた習慣さあ」烏公の此眞面目くさつた說明は割合に要領を得てゐた。

そこへカイゼル君がコツプに滿々と紅茶をもつて來てくれた「これは有りがたい大に優遇するな」「あとで五十錢くれいひはしないかな」「紅茶は支那が本場だ。ロハだよ。心配するない」圓公は佐藤氏に敎へられて居たやうに、一人前支那紙幣三十錢づゝのチツプをやると、カイゼル君は、おゝとか何とか牛のうなる樣な聲を出して、大きな掌の中へチヨコンと受取つて、すぐにズボンのポケツトに押込みながら逃げて行つた。

「此汽車の速力はのろいね」チツプ兼紅茶が大洋の三十錢ですんだことに胸をなでながら圓公がいつた。

「全く內地の田舍行きの混合車かなんかみたいだな、ひよつとすると、汽車までが支那人の步き振りをやつてるのかも知れない」

「成程支那人は車夫でもちつとも走らないやうだね。のつそ〳〵と、大きなズボン丈を動かしてる

やうだな、あの流儀かな。それとも支那の國狀その儘といふ所かな」
「汽車だつて、國民性や國狀に合致した足どりをとるのは自然の勢やろ」
「何でもね、二三年前のことだつた。僕の所へ來る中央大學の生徒がね、眞夏の休暇を利用してハルビンまで行つたものだ。その時の話によると、汽車が時々驛でも何でもない所で停車する。そして一時間でも二時間でも機關車は日射病にでもかゝつたやうに、すわつたきり動かない、いつになつたら出るかと聞いても、何時出られるか分らない。何の爲かときいても、言葉がよく通じないからはつきり分らない。乘客は暑いので。たまらなくなつて、野つ原へ散歩に出かける。西洋人なんか五丁でも十丁でも勢よくずん〳〵散歩に行つてしまふ。一寢入した頃に、おい〳〵と呼びかへされて、やつと汽車はのそ〳〵と動き出すといふ、實に面白い汽車だといつてたことがあつたが、それを思ふと、かうしてどろ〳〵でも動いてるのが僕には不思議でならないね」
「まあこれが夜だからえゝがな」
「ところがその學生の話だつたが、歸り路とかに、夜の客車は恐かつたつていつてたよ。暗い、あるかないかのあかりがついて居て、何か雜誌でも本でも見てようものなら、すぐにこき上げられてはり倒された上に、どんなめに合はされるか知れない。或男なんか縛り上げられて汽車からほりだされたといつてたがね」
「共產黨とにらまれたんやな」

「三等の東支鐵道は實に危險だといつてたが、あれから事情が變つたにしても寢臺なら安全だといふのは奇蹟だね。それにしてもお巡りが乘り込んでさうなものやがな」
「お巡りがゐたつてそれは看板さ」
「三等車へ行つて見たいけど、案內して貰はないぢや危險だね」
「きつと馬賊が乘つてるといふからな」
「ぢや、まあ馬賊にねらはれない中に寢るか」
「その面ぢや大丈夫や、馬賊なんか近づくもんか。向ふで同士だと思つて逃出すやろ」

一七

圓公が寢室にはいると、今迄うと〳〵と寢込んでゐたらしい異國人がふいと顏をあげた。露人か獨人でゝもありさうな顏をしてゐる。默つてゐるのも變だと思つて、圓公はだしぬけに「今晩は」とやつてみた。彼は驚くと思ひの外、何やら「わう」とうなつた。圓公はまだ人間から「わう」といふやうなあいさつを耳にしたことがない。けれども彼が割合に泰然たる所を見ると、何だか日本語が分りでもするのかも知れない。何も分らないで泰然としてるのよりは、ちと親みのある「わう」だと思ふと、もう一發「暑いですな」と探り玉を放つてみた。彼は確にもう一度「わう」といつた。それには

確に何も分らないといひたげな表情が伴つてゐた。分らない日本語を威張つたらしくつかつてゐても駄目だ、仕方はない。十年も前に獨習の露語もすつかり忘れてしまつて見込ない。獨逸語も佛語も怪しいとすると、改めて別の一發をさぐり玉にと、お前は英語が話せるかと、へんな英語で聞いてみた。どうかかうかわかるといふ。「占めた！」お互に無言の行で睨み合ひつこするよりはと思つて、相宿君に向つて色々と散彈を放つた。段々發射してる中に、相宿君はハルビン在住の露國の商人らしく、神戸へはちよい〳〵出かけ、今度も大連からの歸途だといふ。ハルビンに於ける露人の生活について色々きいてる内に、彼は一寸時計を出して見たが、圓公の質問に答へるのがうるさくなつたとみえて、「もう寢る時刻だ」といつて、どろりと横になつた。日本人に時間の觀念の乏しいのも悪いが、成程彼にとつては三文にもならぬ相手だからなァと思ひながら、圓公はおやすみをやつて二階のベットに上つた。

二階の寢臺はころがり落ちる心配がないでもないが、それでもいさ襲撃となると、低いよりかましのやうな氣がして、不安心の眼を圓公はいつかつぶつてゐた。

不安心だとか心配だとかいつても、寢てしまへば一切が忘却だ。眠の國、忘却の國、ありがたいものだ。寢たに餅をかへうかといふ諺があるが、寢た位樂なものはない。一生の間醉生夢死と寢てくらす。殆んど凡ての人間樣が一生を寢てくらしなさるも故あるかなだ。

靜かなゆるい汽車、寢るにはもつて來いだ。

ふと圓公の眼の前でピカ！　と光つたものがある。

「來やがつたな、とうと寢臺までやつて來たな」

圓公はてつきり馬賊にピストルでもつきつけられたのかと思つて、すばやく刎ね起きた！　見ると相宿の露人が煙草を吸つてゐるのだ。

「なあんだ！」

圓公は胸を撫で下した。

夜はもうすつかり明けてしまつて、ハルビンから二つ三つ手前の、何だか露西亞風の名前の驛につきかけてゐる。さすがに驛附近の家屋は支那の家とはまるで樣子がちがつてゐる。露西亞の勢力の盛んな時代の建物だといふ。

地味はよほど肥えてゐると見えて、南の方よりか、高粱も大豆もずつとよく出來てゐる。豆の葉なんか黑々としてゐる。その間を走つて歩るく露西亞の子供の濃厚な色彩との際立つた對照が氣持がよい。

「どこまで行つても高粱と豆ばかりだなあ、呆れたものだ」圓公は窓からのぞいてつぶやいた。

そこへカイゼル君がまた紅茶をもつて來た。

憧れのハルピン

一八

列車内の人の往き來が烈しくなつたと思ふと、いつか汽車は靜に歩みを止めた。

ハルピンだ！　圓公は少し昂奮しながら腰をあげた。久しい間の憧れのハルピン！　幾度となく友人達から、東洋のパラダイスだとたゝへられたハルピン！　生き觀音の拜めるときいたハルピン今まのあたりにそのハルピンに來たのだ！

圓公は何物も見のがすまいとして眉毛を愈々への字にして目を見はつた。

「おやをるぞ、をるぞ、露西亞の皇帝見たいな、いかめしい風采をした、軍人らしいのが澤山をるぞ」

「おい笑はせちやいけないぜ、ホテルのボーイやないか、帽子見なはれや」

「何だ、北滿ホテル。さうだ、海軍帽見たいな奴に、ホテルと横文字があるな、ウフ、どうもはや田舍者で、申し譯ございません」

「それにしても、海軍大將か中將見たいなボーイはんが、隨分たんとゐやはりまんな」

圓公と烏公が目を丸うしてる間に、佐藤氏はS旅館の自動車を見つけて來てくれた。有りがたいことには此日は他にお客さんがなかつた。

自動車は黑ずんだ道をすべりながら、暑くろしい砂ぼこりをたてゝ、あつちへくるり、こつちへくるりと廻つて、ひよいと並木路の側で止まると、佐藤氏は一寸といつて、自分の新聞社へ飛込んで、すぐに又出て來た。存外靜な、屋敷町とでもいひさうなあたりである。

Sホテルはそこからちきだつた。

「成程、なか〳〵でかいホテルだ」

スウーツと履の儘で二階へ案内される。日本人の女中さんが居るわ〳〵。これは却つて面白くない。おや、疊の部屋だ！　何だ。內地の旅行とちつともちがはないぜ。まあいゝや、やれ、あつ！上着でもぬぐか、やつこらしよ。

二人はころりと疊の上にねそべつた。

「矢張お互に日本人だなあ！」

「エヘヘ〳〵」

烏公は他愛もなく笑つてる。

外では玉石をならべた敷石道を、支那馬車がのべつにカツチヤ〳〵カツチヤ〳〵と走つてゐる折には鞭者の鞭の音もきこゑてくる。

一九

一凉みすると、圓公は思ひ出したやうに、或る支那人の會社に向つて電話をかけて貰つた。其處には其昔、一昔も前に彼が語學を敎へたことのある若木が久しく勤めてゐることを、滿鐵の小池から聞いてゐたからだ。電話は譯もなく通じて、若木は今一人の同期生である高田と一緒に、四時頃訪問して夜の都を案内するといつた。

時計を見るとまだ十時過ぎである。四時までには少くも五六時間ある。さつと一ドライブをやるにはもつて來いだ。圓公はすぐに北滿ホテルの新木氏に電話をかけた。これから三十分許りするとぐるりとドライブして來たいから同行しろといふ話である。誘へたやうな次第なので、朝食をすますとすぐに、旅館から遠くない、待合せを約束した第一銀行支店へかけつけた。三井物産の岡氏が案内役となつて、間もなく新木氏の姿は其處に現れた。凡てがかうした調子にゆくと、外國旅行も國内旅行よりか却つて便利である。

「幸運だなあ！　だがこれがいつまで續くだらうか」

圓公は烏公に囁きながら、道々岡氏の説明を聞いてゐた。

支那人ばかりの町――日本人はやつぱり主として日本人町に住み、露西亞人は露西亞町に住んで

ゐるやうだ――へ來ると、實に堂々たる大商店が軒並に連つてゐる。入口などを見ても、大連あたりよりかずつと宏壯である。打見た所は商賣も非常に景氣がよささうである。支那が東清鐵道の管理に勢力を得てから後、僅々數年の隆盛だとは岡氏の説明である。四辻といふ四辻には、若い支那のお巡りさんが必ず立つてゐて交通を整理してゐる。よくもあんなにお巡りさんがゐると思ふほど澤山に交通巡査がゐる。いくら人間が澤山ゐるにしても、いくら給料が安いにしても、よくあれ丈け澤山おいたものだと思ふほどのお巡りさんである。

競馬場があつた所だといふあたりへ來ると、岡氏はいつた。由來此競馬場といふのは、日本人が始めたものだが、それが排日思想の盛な時だつたので、支那人が競馬見物に出かけようとすると、支那の憲兵さん達が、入場せんとするものに向つて、一々烈しい壓迫を試みたので、折角の競馬場もパタ〳〵とつぶれてしまつた。一般露國人達も、今日は支那の政治の下に小さくなつて氣息奄々としてゐるのだとかつて――

自動車は凹凸路を走りつゞけて、いつか草茫々たる野原に出た。一體どこまでゆくといふのだらうと思つてるとパタリと止まつた。日本から來た凡てのものが、必ず先づかけつけるとかいふ例の横川志士の紀念碑の前である。

一句も成らない中にすぐに引かへして、今度は反對の一端から町に入つたやうな氣がして、どこからでも一度入り込むと到底出口が分らなくなる位まどつくといふほど廣く面白く出來た、同じやう

な棟が、二つか三つあつた昔の東清鐵道のお役所とやらの側をぬけると　すぐに滿鐵の公所の前だ。圓公と烏公とはそこで再び新木氏に別かれて、所長に敬意を表した。

やがて所長さんの好意で、自動車をかりて、一寸松花江を一瞥して、すぐに日本人會が建てゝゐる小學校といふのに案内された。丁度夏休みだ。おまけに宿直の先生とやらも不在だ。運轉手君の說明をきゝながら校内を一廻りする。

溫室といふのが一番氣が利いてゐる。ずい分と金をかけて、熱帶の植物ばかりが培養してある。寒い地方には最もふさはしい工夫だとあつて、圓公も烏公も、默つて感心する。寒いといふ序に、多の子供の通學がまた困難だらうといふと、皆が橇に乘つて、犬に引つぱらせて樂しげに通學して少しも困らぬとある。更に露國の子供達は　學校からずつと上の大學に至るまで、大抵が男女共學であるが、兩性の間に間違が起るどころか、男性ばかりの教室は却つて騷々しくていけないが、共學の教室はむしろ靜かな上に生徒が勉强しあひ、勵み合つて成績がよく、過失が多く起りはせぬかなどゝ疑を起される丈けが不思議だといふ話を謹聽した。

自分で直接見もせず聞きもせぬ話だが、露國だつて矢張さうだらうか。いや、少し位嘘だつて話は面白いなあ、それに比べると、日本には共學だといふと、すぐに兩性間の過失のみを心配するえらい人達が多いが、實際となると、共學といふことは案ずるよりも存外うまく行くこと請合さといはぬばかりの顏をして、圓公は默つて運轉手君の氣焰をきいてゐた。

そこを出ると、餘りに遠くない公園といふのにもはいつて見た。

「公園は矢張夜來ないと面白くありません。夜はなか〳〵艶つぽい場面も見られます」

運轉手がうらやましさうに說明すると

「でも日本人が、一人や二人で夜來たらあぶないでせう」

「一人ぢや何ともいへませんが、二人なら大丈夫でせう」

日本の公園と變つた處は、茶店――大きなカフェー見たいな茶店に、どや〳〵と雜多な人がつめこんでゐることがちがふ丈けで、木蔭には生活に疲れたやうな顏の人があすこにもこゝにも休んでゐる。惜しいことには片隅にある此地の唯一の劇場といふのが、夏場だといふので、ぴたりと扉をしめ切つてゐる。せめて一場でも一幕でもと思つて來た望は無殘なるかな立派な泡になつた。

烏公は入口の看板を見上げて暫くぢつと立つてゐた。

二〇

二人がS旅館に歸つたのは、まだ三時前だつた。

勸められるまゝに湯にはいると、三助君がいろ〳〵な通がつた話をもち出した、

珍らしいのダンスが、ハルビンの名物といふやないか、おちさん、一體どこでどうして見るんやな」

烏公がきよとんとした顔付で聞きだすと、「馬鹿々々しい、旦那高い金なんか拂つて、そんなものを見るよりか、露西亞のシャンが見たかあ、わしが呼んで來たげらあ、金だつて半分で澤山だ」

「おぢさん、それは本當かい」

「嘘いつてどうするものか。御案内してお望とあらば何人でも呼んで來てあげまさあ。何しろダンスて奴は、一人やそこらでやつたんぢや面白くねえから、見るにだつて餘計な金がかゝらあね」

かういつて大氣焔で、通をふりまはして、それからそれと話はずん〳〵と深く進んでゆく。

「何しろハルピンが東洋の樂園てなあ、まあそこにあるんでさあねえ」

三助どん大得意である。烏公は例の如く鼻を鳴らしながら謹聽してゐた。

二人はやがて若木と高田とに案内されて夜の樂園見物に出かけた。けれどもまだ時間が早いといふので、支那人特有の店である例の小盗市場にものぞいて見た。でも規模からいふと、それはとても大連のには及ばぬ小さいものであつた。どこまで行つても十錢を相場とするといふよりも、強ひてさうさせられてるやうなのする、例の支那馬車にも乘つて見た。繪の中の人物になつたやうな氣がして、案外に乘心地がよかつた。日本人が經營してゐるデパートメントストアにものぞいて見た。

だが何をいつても著しく圓公の目を引いたのは、露西亞婦人の體の美しさである。まるで元氣潑溂たるアラビヤ馬でも見るやうである。張りさけるやうな胸、ふつくらした容貌、大きな樽のやうな腰つき、健康そのもの〻様な堂々たる風采と、美しい肉體に見とれて、圓公は時々ふりかへつて

つつ立つてゐるのであつた。「い〻なあ、何といふ美しさだ。元氣はどうだ。大きい上に丈の高いことはどうだ。あんな日本人を今まで一人だつて見たことがあるか、待合や料理屋のおかみさんなんかには、それは時々太つたのはあるさ、だがあの醜さはどうだ。只太い丈けだ。短かくて丸いだけだ。態度といひ、風采といひ何だ。それが露西亞婦人はどうだ。まるでおれなんか眼下に見下してるほどの威勢ぢやないか。角力取りだつて拳の先で刎ね飛ばしさうな元氣ぢやないか、ヘナ〳〵、ふにや〳〵として、少し肥えると、やせる法はないかなんて、けちなことをいふ日本婦人とは、てんで話がちがふ。あゝうらやましいなあ」

夕方の町を大きな娘さんなんか引連れて、揚々と潤歩してゐる露西亞婦人を見る毎に、圓公はたまらないほど昂奮するのであつた。

見なれてゐる若木や高田は只笑つてゐた。

「カフエーも一つ見せませう」といつて高田が案内してはいつた。

二階を上ると入口にボーイらしくない立派な男が一人立つてゐて、帽子やステッキを一々受取つてゐる。日本でいふと下足番君が、此處では帽子番君、ステッキ番君だ。それが客の歸りには、必ず一人前十錢づゝ位のチップを貰ふのが例だときくと、何だか羨ましいやうな氣がした。

高田の説明によると、ハルピンの町にはかうしたカフエーが三軒とかあるといふのだ。そしてそれが本當の純カフエーである。酒もビールも飲まさねば、料理も出さない。只菓子と、珈琲か紅茶

かのやうなもの丈け飲ませるといふのだ。從つて來てゐるお客さんが、皆品のいゝ落ついた人丈けである。赤い面をした小生意氣な書生さんもゐなければ、一杯機嫌で怪氣焰をあげるやうな怪しげな動物もゐない。絶對に酒に對して興味をもたない圓公は實にいゝ氣持がした。

「これだよ〳〵、日本にもかういふ立派な、而も氣取らない、入り易い、親切なカフェーが欲しいもんだな」

熱い紅茶をすゝりながら、圓公は無粋な叫びをあげた。

「まだ少し早いな、ちと散歩でもせうか」

若木がかういつて、やがて一同を案内しながらぶら〳〵と的もなく歩いた。方々の看板を見つめながら、「こんなことなら、其昔獨習をやつた露語を、旅行前に一通り勉強しておくんだつたなあ」と、圓公はつく〴〵と不注意をくやむのであつた。

二

一同が東清クラブの前で自動車を下りたのは、もう日も暮れてからであつた。

晝通つた時には氣もつかなかつた處だが、夜である上に土曜日のせいか、さすがにクラブの入口は晝のやうにあかるく、集つてゐる自動車の數も少くなかつた。

一人前七十錢の入場券を買つて庭園にはいると、奏樂堂では唱歌の眞最中であつた。坐席はもう滿員になつて、後の方から見ると、ステージに立つた歌姫は、燦然たる光の下に遠く小さく輝いてゐた。餘りに輝いてゐるが爲に、シャンだか何だかよくは分らず、餘りに甘くもなかつたが、さすがに音聲だけは、日本の歌姫とは聊かちがつてゐるやうだつた。

廣い〳〵庭園を一同は暫くあちこちと散歩した。樹木の配置の具合からが、日本の公園とちがつて、何となくのんびりした處があるのが、非常に氣持よく感ぜられた。

いゝ頃腹がすいて堪らなくなつた頃に、高田は食堂へ案内した。たしかもう八時近い頃だつた。五時や六時には夕食をすることを習慣としてゐる上に、晝食ぬきの圓公にとつては、食堂の時間が可成遲いことが一寸苦痛だつた。

食卓につく間もなく、ステージ音樂が終つて、聽衆は皆食堂の方へぞろ〳〵と流れて來た。

「ほゝう、音樂でもきいて、ゆるりと夕飯でもやらかさうと思つて、皆クラブへやつて來るのだな」

「そして食後にはダンスといふ處やな」

圓公は烏公と話し合つてゐた。見てゐる中に、もうピアノがぽん〳〵鳴り出した。三四組がフォ

ツクストロットとか何とかいふ奴をやり出した。
「御苦勞なことやな、夜食ふのもそつちのけにして踊るなんて」
「この暑いのにあきれたものだな」
「ところが踊りたくつて、只それ丈けでわざ〳〵やつて來るものがあるのですからね」
若木の説明をきくと、圓公は妙な目つきで、
「君なんかもその組ぢやないかね」
「どうしまして、僕なんかまだ初歩なんですから」
「處がその初歩といふ奴が最も危險でね、ダンスにのぼせる前に、先づ女にのぼせてね」
「ワハハ、、」
同時に一行に和するでもなく、周圍からどつと妙な笑聲があがつた。ふり向くと、同じ色の血の流れてゐる五六人が、一寸横手の圓卓を圍んでゐる。無表情な女が二三人その仲間になつてゐる。彼等はまた彼等一行で、何かの笑を洩したものらしい。笑の交錯、笑の齊唱、ジャッズの一節でも作りさうである。かうした處に集つて來るのは如何なる人々かと思ひながら、御馳走のくるまでをぐる〳〵見廻してゐると、さすがに露人全盛である。支那人といつては一人も眼につかない。我々日本人の二つのテーブルが既に異彩である。
廣場の方では、踊るは〳〵。一寸休んでは、ビールか葡萄酒見たいなものを煽つては、又飛出し

て踊る。
さうだ、白夜、夜でもなく晝でもなく、ぼうと牛乳をとかしたやうな、朧ろげに霞んだ夜を通して踊りつゞけ飲みつゞけることの習はしをもつてゐると、何かの本で其昔讀んだことのある露人の群れだ。それがこの暑い夏の夜を平氣で踊りつゞけてゐるのである。扇子を動かすさへもいやな日本人にとつては、殆んど解しがたい習はしである。
「いや、さうではない、日本にだつて盆踊りがあるぢやないか。」
かう頭の一角の方から囁く聲がきこゑる。
さうさ。盆踊は日本人の一つの喜びである。それは實に野趣滿々たる夜の遊びである。浴衣一枚で腕まくりして、男も女も殆んど別ちがたいまでに、豆しぼりの手拭に顏をかくしての頰かぶり！汗も出るにまかせる、血も湧くにまかせる。そして原始的な歌の調にまかせて、のんびりした太鼓のリズムにつれて、吾を忘れて踊りぬく。これはまことに田園の若き人々に惠まれた夜の歡樂である。自由な忘我の樂園である。生命の陶醉的飛躍である。
だが西洋風のダンスには妙な形式がつきものである。上着をとつてシャツ一枚でやることも出來ねば、勿論肌ぬぎでやるわけにもゆかぬ。のぼせないものには冬こそもつて來いの運動かも知れぬが、夏のダンスは浴衣の味を知つてゐるもの〻容易にまね得る所ではない。ダンス熱にうかされるとか、いふにいはれぬ特殊の趣味を感じ得る人どもでない限り、とてもはや眞平々々などゝ、つま

らないことを考へながら、圓公はすき腹をがまんして既に小一時間も待つてゐた。何でも禮儀正しくほかんと待つてゐる中に、ボーイ達は、さながらのけものゝやうに一同を忘れてしまつてゐたのらしい。尤もそれには、圓公の爲にとあつて、高田が珍らしいものを〳〵と註文した事も後まはしにされた原因の一つであるらしい。

御馳走が來だすと、來るは〳〵、五六種の料理ながら、とても腹にははいらなくなつた。遂には誰もがダンスと料理とを見くらべてゐた。一人前五六圓の料理と酒とでは、決して高いとは思はれなかつた。太鼓腹をかゝへてクラブを出たのは十一時近かつた。

二二

四角ばつたダンス——而も素人の踊を見あいた果に案内されたのは、珍らしいの玄人ダンスが見られるといふ北滿ホテルである。

北滿ホテルは例のハルビン驛で澤山に見た、露國皇帝風の客引君の本家である。けれどもあれ以來圓公は此ホテルをどうしても露人專用式に考へて居た。成程ホクマンホテルと呼び、新木氏もとまつてゐたりすることを思ふと、決して露人專門と考へる理由は少しもない。けれども「露國皇帝」の第一印象が、よし露人專用でなくとも、歐人專用式に考へさせてゐた。そして其處の專屬のカフ

エにゆくと珍らしいのダンスも見られるし、露國氣分も、いや國際的氣分も、相當に味へるやうに露西亞娘の美しい踊り子が澤山にをり、それが皆玄人であり、體美をさらけ出して、極樂の踊をやるといふのだ。

ハルビンのハルビンたる天國氣分を味ひ、憧れのハルビンの謎を解く爲には、矢張一つ見物せうかいなあとあつて、圓公も烏公も相當の期待と好奇心とをもつて其處に出かけた。

成る程、入り口からがどこまでも日本風ではない。例の下足番君ではない帽子番君からが、三人とも露人風の顏をした男である。

妙な入口なのは地下室なのかな？　などと考へながらはいりかけると、

「入らつしやい、お四人樣ですか」

と來た。顏付は全くの露西亞人だが、すつかり純日本式といふよりも、江戸ッ子式の調子である

「おや露西亞人ぢやないのか、それとも合の子かな」

怪みながら高田にきくと、彼は決して合の子ではないが、日本人が大好きな露人である。日本の內地にも久しくゐたことがあつて、日本語は實に手に入つたものであると同時に、彼は得意になつて、それを適宜に應用する丈けの奇智を十分に持合せてゐるのである。その彼が色々な關係から、不幸にも露國政府から罪人扱にされたことがあつた。そして嘗ては此ハルビンから追放されたのである。ところが此追放といふのが頗る妙な取扱になるので、他の土地へ連れて行つて、そこに禁錮

しておくといふ譯でもない。只法律の命ずるが儘に、當局は汽車で或地點まで運んで行つて、そこで放うりつぱなしにするのである。そして其時浦鹽近所の或地點まで送られて、さうやられた彼は卽ち汽車で歸りさへせねばよいだらうとあつて、その足で、直に線路傳ひに、荒野の中を歩きつゞけて歸つたのである。それ以來彼は日本人の下に隱れて居るのらしいといふのだ。汽車から下ろされるなり、その足ですぐにゐつちらおつちら、あの北滿の荒原を歸つて來るといふやり方と、あの「いらつしやいまし」の江戸ッ子口調とが、如何にもきび〳〵して圓公には嬉しかつた。

室の中にはまだ客が一人しか來てゐなかつた。夜半の十二時を過ぎてからでないと、本當に客は集つて來ないとある。十二時を限りに酒をのませぬとか、歌謠放吟を禁ずるといふのとは、丁度あべこべである。如何にも國際都市的である。

若い露西亞娘の給仕に迎へられて、定連みたいなのがぽつり〳〵とやつて來る。思ひ出したやうに、客は若い踊り子を捕へてダンスを始める。又例のフォクスツロットとかである。至つて面白くどさらぬ。

若木もいつか女給を物色してやり出した。高田も馴染の踊り子に引つぱられて飛出した。

あれで踊つてゐる御當人は面白いかも知れない。面白くなかつたら、とてもやれたことではあるまい。けれども見てゐるものにとつては、甚だ苦痛でもさへある。單調で無變化で、何とも申上げやうがない。合間々々には、ステージで所謂玄人のダンスがある。半裸、全裸、殆んど生れた儘に

近い姿での活人畫見たいなものもある。さうしたものが二つ三つすむと、又お素人樣達のダンスである。

酒も一滴も飲まなければ、お素人樣達のダンスに一向興味を感じない圓公は、ぼうとしてると睡くなつて來た。

「な、烏公、せめて全裸のダンスでも幕なしに見せられてたら兎も角、睡くてやり切れないぢやないか」

たまらなくなつていつた圓公の話をきくと、丁度踊りやめた高田は遮つて、

「そいつはまた僕達にや、やり切れませんね。あんなステージ・ダンスなんか、子供だましで、見てるのもいやでさあ」

「すると何だね、かうしたカフェーといふのは、赤い酒だの青い酒をのんで、女の體にまきついて踊りたい奴さん達が來る所なんだね」

「まあさうかも知れませんね」

若木が妙な笑ひをしながら答へた。

「成るほどそこが、僕等のやうな頭の古いものにや呑込めない所だね」

「そやかつて、卷きついて踊りたいやうなシヤンは居らへんやないか」

烏公の思ひ切つた質問には高田も若木も閉口してゐた。が實際若い娘の子だからか、それとも殊

の外まづいのばかりそろへた爲か知らぬが、圓公が街路で見とれたやうな姿と體の持主は一人も居なかつた。日本人好きのしさうな美しい面相のものが一人も居ないのはまだしも、まだ實の入らない莢豌豆見たいなのばかりしかゐなかつたことは、圓公等を慰むるに足る何物もない事になつた。酒の誘惑、肉體美の誘惑、その何れにも失望させられた圓公は、殆んどそこに居續ける好奇心をもたなくなつた。二時近くなると、圓公は案内者の二人を強いて腰をあげさせた。

出る間際に支拂を引受けた圓公は、小さい香水壜風の一本の何とか酒に對して、十何圓だつたかを要求されて、一層の幻滅を感じさせられた。

圓公が宿に歸つて二階へあがりかけると、日本人向きのするやうな、露西亞風の肉體美が、薄闇の階段をことり〳〵と用心深く下つて來た。

「おや？　風呂番君のいつたのがこれかな？」

「らしいね」

圓公は怪しみながら烏公と語り合つた。

やがて丸石の街路をゆく力強い靴音が、かつ〳〵と次第に遠ざかつて行つた。

二人はいつまでもその音に聞入つてゐた。

二三

墨田川の五六倍もあるもの、さう思へば先づ松花江の概念が浮ぶ。

水も濁つて赤茶けてゐる。流れがそれほど急といふこともないが、決して鈍流ではない。ボートが横斷するにも、先づ可成な角度をとつて進む。これがハルビンの唯一の水泳場である。昔はずつと下流まで水泳に出かけたのが、眼の下にこんな立派な水泳場があるぢやないかといはれて、ほんにさうかと氣づいてからといふもの、濁水も物かはは、汚水も物かはと、どんぶりこ〳〵と、一家を卒あきにして露人が出かけるのが松花江の水泳場である。夏のハルビンに來ては此が第一の見ものである。いや、之を外にしては、殆んどこれといふ見ものゝないハルビンときいては、せめて例の肉體美の魔醉にでもかゝりたいものだとあつて、案内さるゝ儘に圓公は十時頃にホテルを出た。

例の二十錢馬車を飛ばしてボートの發着所まで出かけると、行くわ〳〵、ボートの出る度に、實に文字通り以上の滿員である。

渡し賃は三十錢だつたか、航程はたしか十五分ばかり。

船がつくなり、まづ水泳場を一周して見る。

水泳場といふのは、葭蘆まじりの淺瀬と岸とである。足の向くまゝに左に進んで見る。日本の海水浴場と何のゑらぶ所はない。パンに、サイダにビールに、果物、アイスクリーム、かうした飲食

店が水際にずらりと並んでゐる。一間二間を隔てゝ濁水の中には、川獺見たいなのが、老幼數を知らないほど、浮いたり引込んだりしてる。只それ丈けなら何でもないが、女子供の泳いでゐる處と來ると、水は濁水どころではない。まるで泥水である。流れのにぶい入江の處などになると、殆んどぬかるみのやうに、脚でもはまり込んでゐるやうである。さうした處で、心から喜んで水を浴みてゐる。岸には目もあてられぬ程に、不快な汚物が到る處に散在してゐる。その近所に新聞紙を布いたり、板片を敷いたりして、もつて來た費食などを平氣でやつてゐる。圓公はもう見てゐる丈けでも氣もちが惡くなつた。西洋人〳〵といつて、西洋人のやることなら、何でもいゝことのやうに思ふ奴等に、之を見せてやりたい。衛生思想なんてものが何處にあるかと思ふほど、きたない處で泰然として飯を食つてゐるやうなことは、潔癖な日本人のとてもたへられる所ではない。全く閉口だ。腰をかける處もない、サイダ一本飲む所もない。何とかしてさつさと此んなきたない水泳場を逃避したいものだと、歸心矢の如くなる圓公は、案内の二人を促して足をいそがせた。

二四

「クラブに這入つて見よう」

若木はかういつて、二十錢づゝの入場券をかつた。さすがに二十錢の入場料をとるほどある。クラブ經營の水泳場といふのは、船着場の左方とはまるでちがつたものである。日本の海岸に劣らな

いほどの白沙である。

「これならいゝ。まあ一つ腰でも下ろさうか」

圓公は疲れた腰を地面においた。

此方へ來てゐる客は、無料水泳場の連中とは、聊か種もちがつてゐるやうである。僅に二十錢が人種までちがつてゐるやうに見せるのだ。かうなると、二十錢の金も實に大きな力をもつてゐる。

「いやゐる〳〵、二十錢のお蔭でシヤンも拜める。曲線美も見られる」

島公はニヤリ〳〵しながら、スケツチブツクを出して寫生を始める。若木はコダツクをさげてうろ〳〵する。

水泳着の上へ、日本風の縮緬の羽織を引かけて、だらりとしたモガも居る。豚のやうにペタリと地面にころがつて、人目も憚らず、堂々とモボと甘い戀を囁き合つてゐる年増もゐる。水から飛上つては砂の上を走りまはるモガも居れば、龜の甲を干してはサイダ店へかけつける繪日傘もゐる。寫眞で見たと同じやうな、ズンガリーの水泳場の壯觀は、日本の海水浴場などのそれに比して遙に見事なものである。老ひも若きもしやあ〳〵として肉體美を見せつけてゐるからである　ずう〳〵しくのう〳〵として、日光浴の慰みにふけつてゐるからである。人の顏を見ると小さくなつて逃げまはるやうなけちな若い女もゐなければ、カメラを向けられて顏を隱すやうなお嬢さんは一人も居ないからだ。彼等の前にレンズを向けでもしようものなら、しつかりしてよくとつてくれ、といは

ぬばかりに、繪日傘にかくした顏をわさ〳〵さらけ出してこつちへ向けるのである。大きなお尻にレンズを向けても、日光があたるほどにも思つてゐないからである。そんなずう〳〵しい女はだめだといふものがあるかも知れぬが、ずう〳〵しい點を稱讃しなくとも、泰然として無邪氣に心ゆくまゝに、天賚の日光を全身に浴みて、立派な體貌をつくり上げることを心がけるやうに育て上げられてゐることを、圓公はつく〴〵と羨ましく思つた。といつて川獺のやうな小癪な軀をして、何百米とか何哩とかの水泳競走に參加したり、山犬のやうな恰好をして、何たらボールとか、何たらレースとかに一等を得たとか、何たらカツプを占めたとかいふだけの女は圓公は大嫌だ。彼等は娘時代には獺の眞似もやり、山犬や山猫の稽古もするが、あれが一旦結婚生活に入つて見るがいゝ。一昨日たゝかれた隣の猫のやうな顏をして、すぐによりがもどり、昔の儘の箱入になつてしまふのだ。彼等の行動は凡て理性から出發してゐるのでなくて、只興味中心なのだ。そこへ來ると、露西亞人などは、娘も母親も、婆さんも、爺さんも、亭主も子供も一樣に天の惠に浴することを知つてゐるやうだ。行動の多くが感情から出てゐるのでなくて、理性から出てゐるやうだ。餘計な理窟を考へながら圓公は高田について、煮えくり返つてゐるやうなクラブの食堂に入つた。

午後の半日を心ゆくまでに日光をあみながら、露西亞婦人の肉體美に見あいた一同がクラブを出てボートに乘つたのは、日ざしがもう斜に落ちかゝつて、赤茶けたズンガリーの水が、黃金色に輝く頃だつた。

露西亞人達はまだ暮れるのをまつて、夜の靜かな情景にひたりながら、ロマンチツクな夕を心ゆくまで慰まうとしてゐるのであつた。

二五

高田に分れてから、圓公等は若木の家の側にある敎會に飛込んで見た。舊敎風の敎會で、セントのか一すも分らないまゝで、暫くぢつと見てゐたが、暮れかゝつたので若木の家へ立寄つた。何をする何とかいひさうな髯もじやの坊さんが、數多の善男善女達に幾度も〳〵敬禮されてゐた。隣りの若い露西亞美人が、七八つの可愛い女の子と、鞠なげをしてゐる。圓公はたまらなくなつて、女の子を抱いて、若木にコダツクを向けて貰つたが、光線が足りなくて遂にだめだつたと後からいつて來た。

その夜十一時の汽車で、圓公はハルビンを去ることにしてゐたので、十時になると若木が訪ねて呉れた。

宿の自動車は十時半に出るから待つてゐろといふことであつた。

ぐづ〳〵する中に約束の時間を過ぎただが自動車は姿を見せぬ。例の案內君は疾くから停車場にいつてゐるといふ。玄關に下りて見ると、圓公達よりも先客が一人自動車をまつてゐる。圓公は幾度も〳〵時計を出して見た。もう十五分前だ。自動車はまだ影を見せない。それでも帳場では、大

丈夫ですからお待ち下さいといふ。圓公は遂にたまらなくなつて、例の二十錢の支那人力車に三十錢拂つて、停車場へかけつけさせた。

五分前だ！

だがホテルのボーイの姿が見えぬ。彼は寢臺をとるべくパスも何も皆もつて行つてるのだ。圓公は何でもいゝから先づ乘りさへすればと思つて、例の鋼鐵艦のやうな汽車にかけ上つた。車掌見たいな支那の兵士見たいな男が、頻りに圓公に向つて何か怒鳴りつけてゐる。圓公には何が何だかよくは分らないが、何でも切符を見せろといつてるのらしい氣がして「ホテルのボーイがもつてるんだ」

といつた。けれどもそんなことが通じやう筈もない。若木はボーイをさがし歩いてゐる。圓公は當惑して、幾度となく「ホテルのボーイ」をくり返した。

「もう時計は十一時だ。此處で下りでもしたら大變だ。何でもいゝからかぢりついて居てやらう。その内にはどうにかならう」と圓公がずう〳〵しくかまへ込んでゐると若木が馳けつけて來た。

「ボーイが分りました。一等は彼方です此處は三等です。早く〳〵」

已むなく圓公は高い列車から飛下りたが、薄暗いホームは何が何だか分らない。

「早く〳〵」

いや走つたの〳〵、圓公はまるで地獄からでも逃出す時はかうもあらうかと思ふほど聲について

走つた。やつと飛乘つて「此室だ」といつて、ホテルのボーイから寢臺券とパスとをつきつけられたと思ふと、すぐに「ピー」だ。

「烏公は？」

「あつちです」

汽車はもう動き出した。

「君、早く〳〵」

若木とボーイ君とは、石火の如く列車をかけ下りた。圓公は胸を撫でながら窓から頭を出した。何といふ暗い停車場だ。二人のぼんやりした影の前を汽車はのつそ〳〵と動いてゐる。

「さらば！」

「さらば！」

「憧れのハルビンよ、さらば！」

圓公がかういつて、やがて自分のだといはれた寢室に入つて見ると、確に先程投げ込んだと思ふトランクの姿が見えない。

「しまつた　やられたのだ！」

ハルビンは危險な町だ。出發の際が一番危險である。ぼんやりして窓からのぞいてなど居たりすると、必ず支那人にねらはれる。下車の時はいゝが、乘車の時は決して油斷をしてはならないとい

はれてゐたことを、圓公は今やつと思ひ出しただが、あんなに大騒をやらかされて汽車に乘つたのは生れて始めだ。而も外國に來てだ。先づ乘れた丈けでも仕合せだつたかも知れない。それにしても、是非失つてならぬものはなかつたらうか。圓公は熟考すべく尻を下ろした。だが考へて見ると大したものはない。まあいゝ、却つて手ぶらで氣輕だ。こんなことを思ひながらぼんやりしてゐたが、やがて又廊下に出て見た。そして隣の室の樣子でも伺ふべく、ぶら〳〵と散歩を始めた。ふと隣室を見ると扉があいてゐる。のぞいて見ると誰も居ない。そして棚の上には自分のと同じ大きさ位のトランクがある。

「ゐゝかまふ事はない、一寸見てやれ」

飛込んで引下ろして名札を見た。

「占めた！」

彼は覺えず叫んだ。

「何だ、あはてゝ隣りの室へ飛込んでゐたのだつたか。まあ、よかつた」

圓公は始めて自分に返つて、ソファの上へ安心の腰を下ろした。いつもの通りにボーイが紅茶をもつて來た。圓公は獨りで微笑しながら、ポケットからアルコールを出して額の汗を拭いた。

二六

ガタン〳〵タン！　ガダン〳〵タン！

「それ來た！　馬賊だ！」

圓公が驚いて眼をさますと、ボーイのカイゼル君が「起きろ」と合圖をしてるのだ。いや合圖ではない。寢る時入口の鎖をかけておいたので、開かないまゝに扉をガタ〳〵やつてるのだ。

時計を見ると、もう直きに長春着の時刻だ。

「これはいけねえ」

圓公は口の中でつぶやきながら、飛起きて鎖を外した。列車は丁度長春の一つ手前の寬城子驛につく所だ。すが〳〵しい朝の靜けさの中に、例の支那の兵隊さんは、四五歩づゝ間隔をおいては、五六人で氣をつけの姿勢をやつてゐる。寢ぼけ目でぼんやりと見てゐると、旗には「護路軍」と書いてある。其處へカイゼル君が又紅茶をもつて來た。

圓公は始めてつく〴〵と此のボーイを見た。

「おや！　行く時のボーイとは何だか少々ちがつてゐるな。だが、髭の恰好といひ、眼附といひ、額つきといひ、實によく似てゐる、でもどこかちがつた處がある。前のが獨逸式なら、これはロシ

ヤ式とでもいひたい位に、どうも少しちがつてゐるやうだ。だがやつぱりカイゼルの顔であることに相違はない。をかしいな、此列車のボーイは皆カイゼル型なのかな。それとも外國人といふと、皆カイゼル見たいなのかなあ。そんなことはない。決してそんな筈はない。それにしても、よく似てるものだな。いや外國人といふものは、一寸見ると、皆同じタイプに見えるのかも知れない。馬鹿な、そんなことがあるものか。試みに演壇に立つても、教壇に立つても、生徒も聽衆も、皆同じやうな顔をしてるやうに見える。が、じつと見てる内に、段々と聽衆が同じやうな顔をしてゐないことが判つて來る。二三日經ち、一月立つにつれて、生徒の顔がやつとそれぞれの特色を具へた人間に見えて來る。それと同じ調子で、行きのボーイも歸りのボーイも、同一のカイゼルに見えるのかも知れない。いや、それほどカイゼルに似てゐないのでも、直感でさう思ひ込んでるのかも知れない。さうして結婚當座は、杓子のやうな女房の顔でも、立派な玉子形に見えるのかも知れない。あばたがえくぼに見えるのかも知れない。その證據には、どうも友人の妻君の醫は、今に人をチヤームしをる。」

圓公が他愛のないことを考へてる中に、彼が松花江の水泳場からの歸り途で、渡しのボートのふなべりに腰をかけながら、自分と並んでレンズの中に入つた。肉感的な、日本人好のするやうな、忘れがたないロシヤ人のシヤンの醫が、眼前にぼんやりと浮んでゐのるを見ると、彼は薄氣味惡くもニヤリ〳〵とほゝゑみながら、思ひ出のハルビンの夢をくりかへしつゝ紅茶をすゝつてゐた。

たつた二晝一夜の滯在！　時間からいへば僅に四十時間ばかりの滯在にしか過ぎないのに、今までの有ゆる旅行のそれよりも、何となしに、大きな力强いものが、彼の頭の中を占領したやうな氣がする。「をかしいな、何が俺の頭を占領したのだらう。その中心生命をなしてゐるものは一體何だらう。」圓公はしきりに之を考へて見た。

東半球の茫漠たる平野の中に、ポツンと、大河に沿ふて建設された、それほど大きくもない世界的都市、そこに漲つてゐる、何ともいはれない國際的な悠長な空氣！　さうだ、何ともいへないのびノ〳〵した、少しもこせつく處のない、ゆつたりとした、大きな解放的な空氣！さうだ、確にその空氣だ！　その和かい、溫かい空氣こそは、圓公の頭の中に名狀することの出來ないほどの、懷かしい力を吹きこんだのだ。これぞといつて、何一つ眼をチャームするやうな風景はない。これぞといつて人を引つけるやうな藝術もなければ文化があるでもない。これぞといつて魂をとろけさせる樣な美人がゐたといふでもなければ、去りがたからしめるやうな魅力をもつた何ものがあるでもない。けれどもどこまでものんびりとして、こせ〳〵と人間の魂を縛りつけるやうな何物もない國際的都市、やつぱりいゝ處だつたな！　と圓公はつく〴〵と思ひつゞけながら、四十時間の繪卷物を卷き返し繰返してる處へ、烏公がひよつこりやつて來た。汽車はパタリと歩を止めた。

薄ぎたない長春の驛についたのだ。

南下列車の出るまでには一時間餘ある。二人は驛の事務室へかけこんで、トランクの保管を依托して、ぶらりと散歩に出かけた。

驛前の小公園の側には、二人の支那人が、圓形の鳥籠を街路樹につり下げて、熱心に小鳥を見つめながら、ベットの鳴き出すのをじつとまつてゐる。極めて質素な生活を營みながら、かうした、のび〳〵とした、趣味の豐かな生を樂むことを忘れないあたりは、日本人の眞似得ない處のやうな氣がする。幾らでも小鳥を飼ひ得る身分のものが、ベットとして小鳥を樂むといふのなら何でもないが、如何にも小鳥など飼へさうもないやうに見えるに係らず、悠々として自然を樂んでゐるやうに見える支那人に對して、つく〴〵と興味を感じながら、衣服にのみ、食物にのみ、一生の全趣味を傾けようとする日本人の生活を、圓公はあはれみつゝ、じつと支那人の顏に見入つた。

やがて放射狀に設けられた大通りの一つに向つて、何の目的もなくぽつり〳〵と歩みを進めた。日本人の腰辨らしい小男が、一人こつ〳〵と小刻みに歩を運びながら、向ふの方からやつて來る。驛の交代時間に間に合ふやうにと急いでゐるものゝやうである。廣い町幅と、ゆつたりした庭園付きの小邸宅、どこまで行つてもそれがつゞいてゐる　何だか皆日本人の住宅のやうである。よくもかう澤山の日本人が住つてゐることだ。そしてその凡てが皆勤人らしい住宅である。支那人の邸宅らしいのは一つもない。かうして澤山の住宅をかまへてゐる日本人は、此所へ來て一體何をしてゐるんだらうか。こんなことでは滿洲へ來て住んだところで、それが結局何になるだらう。

餘計なことを考へかけた時に路がつきた。柵に沿ふて大道が横に走つてゐる。公園だ。

時間つぶしに先づはいつて見る。猿がゐる、栗鼠がゐる。大きな鳥籠の中ものぞいて見た。矢張り鴛鴦もをれば鵜鳥もゐる、狐もゐれば狸もゐる。これぞといふ變つたものもゐない。側の池には今し花蓮が眞盛りである。振向いてぼんやり見てゐる。

ポツ！　ポツ！

かすかな音がしては、見る〳〵薄桃色の花が、お伽の國の夢の影のやうにふわり〳〵と開く。二人の外には誰も見てゐるものもない。暖い朝の日はもうかん〳〵と照り出した。日向に出るとぐん〳〵と汗が出る。

咲く蓮に見入る異郷の朝かな
汗を拭き〳〵咲く蓮見る支那の朝

公園の正門を出て暫く行くと、十字路の一角に、例の如く支那人が甜瓜を賣つてゐる。二人の若い支那人が、一つづゝ買つてそれをぱくついてゐる。簡單至極にして、お粗末限りない朝飯である

路ばたや朝飯に瓜かぢりつゝ

瓜食つて飯にかへよと呼ばれけり

うまさうに瓜食ふ人見る支那の朝

元の道に歸らないやうに、直角に〳〵と、ずん〳〵進んでゐる中に、やつと支那人町に出た。殆んど兩側に支那人の店がならんでゐる。けれどもさすがに新しい市街丈けあつて、至つて清潔である。何をするのだか分らない支那人が、頻りにうろ〳〵してゐる。無帽の車屋さんが空人車を曳いては、街路をいつたり來たりしてゐる。不思議なことには、日本人の管轄範圍だからとでもいふのか、新市街だからとでもいふのか、坊ちやんのやうな、支那のお巡りさんが一人も姿を見せない。どこの通りにも居りさうにもない。日本の巡査の影なんぞも勿論見えない。

大平野の眞中に、ぽつんと建てられた新市街、といふ氣持がどこからどこまでもみなぎつてゐるのんびりした田舍町といふより以上に、平和なゆつたりした市街、若々しい、けれども新思想の臭のしさうもない、支那人風の樂天性に充ちたとでもいひたいやうな氣分が、可成りに濃厚な都會であると圓公はつく〴〵思つた。

二八

停車場につくと、八時二十分の發車にもう二三分しかない。此處から、思ひ切つて吉林に行つて

もう一度松花江に接し更に建設列車に乘つて、奥地の大森林に自然の威力を見たいといふ氣がしないでもなかつたが、烏公が氣乘りがしなさゝうなのでその儘南下列車にかけこんだ。

二日前に此の邊を通つた時には、もう夜だつたので、何も分らなかつたが、眞夏の輝かしい朝の光に輝たい北滿の大平野は、一層の大きさと豐かさを思はせるやうである。高粱の實の粒は、ゴーガンの油繪にでもありさうな、充實した力をもつて焦げ茶色に光つてゐる。大豆の枝葉も南滿のそれに比べると、ずつと黑ずんで見える。土地も產物も自然も、凡てが露人そのものを見るやうである。ふにや〳〵した、姦智にたけた、不得要領な南方人を見るやうでなくて、原始性の漲つた、素朴な北人そのものを思はせる象徵であるやうな氣がする。

かうした原始性のあふれた、まだ開けきらない平野の中には、春から秋にかけては、活氣のない半開の人間世界を思はせて、いまだ路と名のつくほどでもないやうな、凹凸そのまゝの路が出來て人馬はその凹凸なりに體をゆられつゝ、ボートが波浪に起伏しながら進むが如くに進んでゐるのであるが、十一月頃から、寒い冷たい風がビュー〳〵と吹き出して來ると、溫度は氷點下三十五六度位まで下つて、天も凍る、山も氷る、風も氷る、地も凍る。一切萬衆が氷となり雪と化して、滿目只純白な大自然に返へると、其處に始めて生々した活動の世界が現出するといふのだ。凍りつめた眞白な路なき大平野には、自然の大道が四通八達する。橇、馬、車、有ゆる利用し得べき交通運搬の便宜は、自由自在に利用されて、賑はしい商業の巷と、めざましい人間の世界が、忽然として湧

き上るといふのだ。

話にきいただけでも想像はつく。

「成る程大自然によつて惠まるゝ活路といふのはそれだな。」

烏公は駄酒落をいつてキヨトンとしてゐる。

「その冬季の活動をまつまでの、人と自然との眞夏の靜けさはどうだい」

圓公はつく〴〵と平野を見渡しながら、人間の小さゝをしみ〴〵と味はされたのであつた。

猫も杓子も橇引くや雪の大平野
豆と高粱の躍るや雪の大平野
雪積むや滿洲の平野蘇る

圓公は駄句をノートした。

二九

上り列車が奉天驛についたのは、夏の日の暮れるには、まだ隨分間のある頃であつた。

二人はすぐに自動車を驅つて、城内と北陵見物とに出かけた。城内といふのは、卽ち各都市に於ける所謂丸の内で、城壁の内部にある都市の中心地である。其處には舊宮城や主要な官衙などがあり、城外には色々な國民が住んでゐても、城内には純粹の支那人ばかりが住んでゐるのである。

北陵といふのは何でも清の大宗文皇帝とかを葬つた地で、東方にある東陵と共に奉天の名所の一つである。

自動車は直線に新市街を走つて城内に入る。城内の入口といふのは、幾度もくる〳〵と曲つてゐて、一直線に入り込めないやうになつてゐる所は、築城法が似てゐたのか、日本がまねたのか、日本の昔の城の入口とあまりちがはない。そして近代文明の先驅をなす自動車なんかゞ、大手をふつてフル・スピードで出入するには甚だ不向なやうに、道幅が至つて狹く出來てゐる。

先頃奉天驛の附近一二町の橋下を通る列車の中で、爆死の不幸に遇つた張作霖の邸宅といふのが眞白く群をぬいて聳えてゐる。遠方の方からそれを眺めつゝ、舊宮殿とかの側を通つて、何ともいへない、變てこな、小氣味の惡い感じをいだきながら、くる〳〵くる〳〵と、支那街をぬけて、郊外へ出るなり北陵めがけて突進する。

支那人ばかりの住つてゐる町へ來ると、丁度ハルビンに於けると同じやうに、例の新兵見たいな若いお巡りさんがゐるわ〳〵、どんな四辻にでも立つて交通を整理してゐる。四辻ばかりではない。時とすると、殆んど人通りもない大道の眞中にさへぽつり〳〵立つてゐる。

郊外に出てからの道路といふのは、矢張道筋がついてゐるといふ丈けである。凹凸の甚しいことは野原と何の選ぶ所はない。いや、とても野原だつてあんな所はない位だ。體はまるでボールの如く躍つてゐる。どかんと投げ上げられて、どつんと頭を打つけるかと思ふと、次の瞬間にはどかん

と投げ下ろされる。實際自動車もろともに、谷底へでも投げつけられたかと思つたことが何度あつたか知れない。おまけにがた馬車が前を走りでもしてゐようものなら、まるで息が出來ぬほど砂埃が舞ひあがる。開けざることどこまでも支那式である。

支那路や自動車の中に人踊る

奉天から一里半しかないといふのに、隨分時間がかゝつて車が止つた。

陵といふのは、約十五町の土塀に圍まれてゐるといふ丈けあつて、可成の廣さである。石象や石馬だとか、古牌だとか、素晴らしい彫刻を施した石段だとか、隆恩門とかいつて、巍然として聳へた三層の見事な大きな門だとか、最も高い所に丸くつきあげられた墳墓だとか、數へあげれば見るものとても限りはない。よくもかうしたどろらいものをこしらへたものだといふことを、つくづく思はされ。文帝の勢力、清の勢力なるものが、その昔はどんなにゑらいものだつたか、富といふものが昔は妙な風に使はれたものだなといふやうなことがしきりに考へられる。

陵の入口に近く、日本人の寫眞屋が出張して、頻りに寫眞をとれ〳〵とすゝめる。そして、どこまでも〳〵後を追かけて來る。右にぬけ左にぬけて、やつとサイダ店を見つけて、そこで涼をとつてゐる間に、寫眞師は他の日本人の旅行者の一隊を見つけて、彼等の後を追ひ出した。圓公等は蛇の追跡をのがれたやうな心地で、車に飛乘つてさつさと逆もどりした。

三〇

一度はホテルにも泊つて見ようとあつて、十圓をふんばつして、例の大和ホテルにとまることにした。成程相當に廣い室で、凡てが西洋式だが、疊の上へ寢ころびなれた田舍者にはどうもそぐいが惡い。調子がぬけて何一つ落つきがない。ベッドに寢ころんで、備つけの、赤ん坊用のそれのやうな三角な蚊帳を吊つたりして見る。をかしくなつて又飛出したりする。

食堂へいつて日本食をやつつけて、暗くなると二人はぶらりと散歩に出かけた。

日本人町をぶら〳〵とやつてゐると、田舍じみた氷店が見つかつた。

「これやえゝ」

烏公が先づ飛込んだ。雪一杯が十三錢だといふ。

「成るほど支那だなあ」

圓公は驚きながら、口よりも腹をひやして出た。

少し行くと、支那人が色んな夜店を出してゐる。邊りは涼みがてらの人出で、宛がらお祭りのやうである。日本の內地とちつともちがはない。ちがふのは蒜や韮や葱の臭ひである。家も風も人も大地までが烈しく鼻を打つて來る。もう何だか自分の手にまで、體にまで、蒜の臭がしみ込んだや

うな氣がして、圓公は烏公を打やらかしてさつさと逃げ出した。

支那美人笑に韮の臭あり
韮の香の天までつゞく支那の町
支那町や地上の砂も韮臭き
韮くさき人にすれ合ふ小路かな
韮くさき町を出れば風薫る
鼻をつまんで支那町出るや夏の夕

恐ろしく暑いといふ程でもないに、渴を覺ゆること甚しい。成程支那の空氣は乾燥してゐる。今度は圓公がもう一度氷を飲まうといひ出した。くる〳〵と裏町をぬけて、やつと薄暗い燈火をつけたそばと氷とかいた店を見出した。

隨分長い間またされて、氷にありついたのはいゝとして、日本人の店でありながら、小ぎたない爲に、韮の臭氣が器物にまでしみ込んでゐるやうな氣がした。それでも二人は二杯づゝ雪を平げて何ともいへない小寂しい物足らなさの感に小腹をさへ立てながら、いさゝかやけ氣味になつてベッドに飛込んだ。

「何てしたしみのない町だい」
「いやに薄暗い小淋しい町やなあ」

「矢張城内へでも行つて見にや駄目なんだろ」
「でも支那人ばかりの邊りは、何となく薄氣味が惡いやなあ」

二人はこんなことをいひながら、いつか寢込んでゐた。

夜があけてから、圓公はしきりに體を臭いて見ながらいつた。

「おい昨夕から何だか體が蒜くさくなつたやうな氣かするぞ」

昨夕からおらが體の蒜臭き

烏公は駄句をひねりながら、例のがら〳〵と咽を鳴らした。

三

翌くる日は一番列車で、撫順炭抗見物にと出かけた。

小さい列車は、いつもながらの高粱の間をゑいや〳〵と進むのだが、さすがに此支線には、內地同樣に小さい驛がちよこ〳〵とある。どの驛の附近にも、人家が大分あるらしい。

撫順の驛につくなり、いはるゝが儘に電車に乘つて、やがて電車を下りるなり、T理事の紹介狀をもつて、炭抗長の處へ出かける。抗長さんはまだおいでがない樣だが、さすがにそこは手馴れたもので、用事の內容が分ると、波越さんといふ親切な人が案內をして下さることになる。汽車の中

で、自分達の向ひに坐つてる親子らしいのを、何だかさうではないかと思つてゐたが、やつぱりその人達も炭坑見物で、同じ波越さんの案内を受けることゝなる。名刺を貰つて見ると、二人は陸軍の豫備少將　の親子、、、、である。なか〳〵立派な意見をもつた、ゑらい人賢明なんであるやうだが、息子さんといふのは、滅多に物をいはない人である。少將　よりかずつとえらい人だと思つた。

見物について何よりも嬉しかつたのは、一行が可成に氣持のいゝ自動車を頂戴した事である。矢張り滿鐵だ。

自動車の先づ止まつたのは、露天堀の見られるといふ古城子である。岡の上ら見下ろすと、目の下は只一面の斜面である。その斜面を地中に堀り込むのでなくて、横に〳〵と堀つてゆく丈けである。まるで山腹で薯堀りをやるやうなものである。簡單であると同時に輕便至極である。一旦埋沒した地層が、いゝ頃にもう一度でんぐり返へつて浮き上つたものであるらしい。凡ての炭坑がかういふ調子にならぬものだらうかなと、圓公は自然のいたづらに感じ入つてゐる。

丁度内地の校長さんとでもいひたげな團體もやつて來て、頻りに感心してゐる。いゝ頃に切り上げて、頁岩からの製油實驗所を見る。實驗所といつても、大仕掛の工場はまだ出來てゐるのではなくて、ほんの實驗だけやれるやうになつてゐるのである。木葉石とでもいひたいやうな、化石見たいなものから、石油をしぼらうといふのである。油の多い米國などでは、製産費が高くつくので、

見向きもされないといふ石から、油をとるといふことは、油の少い國では、まことに結構なことである。

そこを出てから、從業員である支那人の工夫部屋をのぞいて見る。先づ彼等の常食であるといふパンといつても、要するに饅頭の製造所をのぞいて見る。只大きなおそなへのやうな饅頭である。高粱で作つたものらしいがその割に色は白い方である。只それ丈けなら何でもないが、如何にも氣持の惡いのは、例の蠅である。パン、而も作りたてのほや〳〵の上へ、全面が黑くなるほど蠅がたかつてゐるのである。そしてそれが當り前なのである。決して取り扱ひが惡いとか、不潔にされてゐるからではないのである。とても食つて見ようなどいふ洒落氣分の起るどころではない。咽の奥がゑぐいやうにさへ感ずる。食ひもせぬ中から、へどでも出さうである。それを平氣で食はねばならぬのが氣の毒であるよりも、そんなのを平氣で食つてゐられる支那人は實にゑらいものだといひたくなる。又それでゐて割合に傳染病がないといふに至つては、恐れる方が馬鹿なやうにも思はれる氣持惡がつたりするのが阿呆の様にも思はれる。

蠅もろともやいたパンかと思ひけり
暑き日や燒きたてのパンに蠅群れて

支那蝿のパンかぢり居る暑さかな

大連の埠頭人足の華工宿にはいつて見たくて、遂にはいれなかつた圓公等は、それから坑夫等の宿舍に案内された。成るほど華工宿よりかずつと上等だといはれるほどあつて、遙に室内があかるいやうである。あかるいといつた所で、先づ普通の家の夕方か、未明の頃のあかるさである。でもそれが眞夏の眞晝のあかるさなのである。その薄暗い大きな室の中に、まるで獸でもころがつてゐるやうに、非番の工夫達は、青白い顏に目ばかり光らして、ごろ〳〵してゐるのである。物凄いやうないた〳〵しさが、しいんと襲つて來る。敷いてある薄臭いアンペラが澁をぬつたやうなのはその敷物の性質からであるかも知らぬが、それがまた室内の陰氣さを加へること夥しいやうに思はれる。お役人の波越さんがついてゐられるからいゝやうなものゝ、一人ではいれといはれたら、入口からのぞく丈けで、御免を蒙りたいやうな氣がする。

ほのくらき苦力小屋の暑さかな

アンペラの臭の暑し苦力小屋

素裸の苦力寢ころぶ暑さかな

かうした生活をしてゐる支那人と競爭することは、朝鮮人だとて容易なことではない。まして日本の内地から、勞働を目的で滿洲に渡つたとて、それは到底競爭の出來ることではない。一圓にはずつと〳〵足らない賃金で、喜んで働いて食つてゆけるといふ支那人と、一圓二三十錢以下では、

食つてゆくことが出來ぬといふ日本人との競爭では、いつまで經つたとて競爭になりつこはないといつて、波越さんが圓公の質問に丁寧に答へて下さる。

ところがかういふ人々の間にも、戀もあれば性の惱みをいやす方法もあるのである。さうした人達を相手に笑を賣る相手が此處にもあるのである。そしてその價はやはり十五錢か二十錢にも足らぬものであるらしいが、さすがにさうしたことに關しては波越さんもあまり詳しくは說明して下さらない。其方面の專門的の研究者であるといふわけもない二人は、餘りに深くつきつめて聞くことも出來ないで、いゝ頃に切り上げて、車をかつて更に竪坑の入口をのぞいて見る。

何千尺とかの底までいつたり來たりしてゐる大きな馬穴も、下りたかと思ふとぢきに上て來る。おばけでも上つて來さうなつめたい風が、それと共にすうつと上つて來る。機械文明の力はまざまざと、人間の頭をべしやんこにしてしまふ。少將達も烏公も圓公も、いつまでも默つてそれを見てゐた。

自動車のおかげで、一通りの見物は二時間であつさりと片づいてしまつて、簡單な晝食と何杯かのアイスクリームにありついたのは、まだ十二時前だつた。かうした外形見物丈けではこれといふ土產は得られなかつた。殊に支那人相手では、今の處勞働問題などは香ひもしさうになかつた。

三時過には二人はもう奉天に歸つて、大連行の列車をまつてゐた。

やがて南下列車の展望車の中に圓公がぼんやりしてゐると、先程奉天で乘りこんだ滿鐵の松岡副社長からの招きだとあつて、秘書役のF君が自分の名刺を出して夕食の案内に來た。圓公丈けは喜んで招きに應じたが、食卓で向ひ合ひながらつくづくと見ると、Fの顏には何だか見覺えがある。苗字にも名前にも覺えがあるやうである。二十年前に友人N君の處によく出入してゐたFそつくりである。きいて見ると矢張さうである。Nと副社長とは親戚關係だといふ話だ。それでは烏公を知つてるだらう。N君はその昔、烏公の二階に下宿してゐたぢやないかといふと、話はそれからそれへと戻つて、二十年前の山口時代の光景がそこに展開されて來る。

「さうか、どうもさうだらうと思つたて」

「さうだつたか、あれから二十年も遇はんもんぢやからのう」

展望室に立歸つてからの話が大分つゞいた頃に、何とか驛でひよつこり乘り込んで來たのは稅關吏である。煙草とか何とかを檢閲するのだとある。

圓公は東京を立つ前に、Kから聞いた話を思ひ出した。

——何でもKが大連で汽車に乘る時とか、下りた時とかである。支那人がづか〳〵とやつて來て彼のトランクを引つかまうとする。そして何だかいふやうだが一向に分らない。彼は驚いて支那人をプラットフォームへ投げ倒してしまつた。格闘は群集を招きよせた。一足先に進んでゐた友人と

いふのも驚いて駈けつけるとKである。事情をきいて見ると、Kは相手を泥棒だと思つたいふのである。そして友人の說明によつて、其支那人といふのが、支那側の稅關吏と分つたといふのだ。——

圓公は此話をきいて、大連には支那と日本との兩方の稅關吏がゐると思つてゐたのに、最初北行の際にはそれらしいものにも遇はないで、變だと思つてゐると、今汽車の中へ日本の稅關吏が乘り込んで主として煙草の檢閲をするといふのだ。圓公はハルビンで買つた露西亞煙草の百本入りをトランクの上へ出して、檢印をまつてゐた。

稅關吏の檢閲が何事もなく終つたと思ふと、やがて副社長をたづねて乘り込んだ新聞記者らしい男がある。記者先生は副社長を取つかまへて、奉天に於ける支那側との何やら問題のいきさつについて、頻りにそれからそれと質問の矢を放つてゐたが、鐵砲彈がそれるのか、的の方からそれて行くのか、一向に要領を得ないでゐると、そこへ乘客專務の車掌がぼかりとやつて來て乘車券の檢閲をやり出した。そして記者先生が急行券をもつてゐないことを見ると、直ちに料金の支拂を要求した。記者はバスを振廻して色々と辯解してゐたが、トウ〳〵大分の急行料をせしめられたやうだつた。急行料の追徵が田舍新聞殊に殖民地の小新聞の記者にとりては、とても一日の給料では追つきさうにないことを思ふと、何だか氣の毒でもありはしたが、それにしても、新聞を背景にして田舍ではなか〳〵こわもてのする新聞記者が、料金　すう〳〵しく誤魔化さうとする面皮を引きむかれたことは、アイスクリームの一杯を惠まれたところではなかつた。

其晩圓公は烏公の家に泊つた。

北京行きの爲に天津行の船の出るのは十八日の正午である。それまでの二日間を如何にすべきかの問題を考究した果は、十六日に旅順見物をするのが最良だといふことになつた。そして歸りは汽車によつても、往路は滿電のバスを利用して、海岸の風光を賞するのが賢明の方法だとして烏公にすゝめられた。變つた案内としては、滿洲に來て十餘年になるが、まだ旅順を知らないといふ烏公の妻君を同行することにした。

烏公の妻君といふのは彼の戀女房である。その昔まだ烏公が神戸にうろ〳〵してゐる頃に、京都で見そめた現代式の顔の婦人である。嘗て圓公が京坂に遊びに行つた時、烏公は圓公を案内して京都へ出かけて行つた。そして女の友達とか知人とかをつれて來るといつて、長い間他所の門口に圓公を立たせておいて、やがて十五六の小娘をつれ出して、嵐山から圓山へと、一日中彼の女を引つぱりあるいて見せつけたものだ。その少女がやがて大連に流れ込んで、烏公との間に、もう四五人の芽をはやしてゐる。それでゐてまだ子供のやうに見える顔をしてゐる。うつかりすると二十歳前後にしか見えないやうである。あとできくと、何でも圓公が娘を連れて遊びに來たと思つたものも

あるといふことだ。

海岸の沿道は、大變景色がいゝといふ話だつたが、さて内地に比べると、何でもないものだ。何處にでも見られる風光である。むしろその間にあつて、圓公の眼にとまつたのは、道ばたにある支那人の家屋で、家の周圍が石がこゐにしてあつて、風と雪とを防ぐやうになつてる樣子は、何となく面白いと思はれた。眞夏の盛りでありながら、路傍に遊んでゐる農夫の子供でも、女の子は頭と手足の外はきちんと包んでゐるのも眼についた。

路傍に小川らしいものが處々に見られても、何處にも一滴の水もないのも圓公には珍らしかつた雨の降る時には水が出ても、平生は砂利の川であることは到る處同じことであるらしい。

旅順の中央白玉山頂に屹立して、白く光つてゐる白玉塔は、いつの間にか鼻先に突立つてゐた。人口も相當にあり、市政を布かれてゐるといつても、旅順は矢張田舍町である。地の底から淋しさが湧き上つてゐるやうにしんとしてゐる。

バスの發着所で下りると、關東長官邸はすぐだつたのに、樣子を知らぬなさけなさで、すつと先へ行つて、關東廳舍の側でバスを下りる。長官を尋ねて秘書室へ行つて見ると、長官は常に官邸で仕事をするといふ。例の烏夫人に支那人の力車をやとはせて、エツチラ、オツチラと逆もどりをして驛の上で坂を上る。

行つて見ると、長官邸は白玉塔の眞下だ。遠緣になるのを幸、自動車でもかりて見物でもしよう

といふのが圓公の計劃である。丁度來客中だつたので、暫くまたされたが、やがて通されたのは大廣間である。例の日露戰爭前までは、ステツセル將軍が此室に居たのかも知れないと思ふと、何だかなつかしくもなる。

ヴエランダへ出て見る。旅順港は眼下に手の中にある。旅順攻擊の狀況を、此處からいゝ氣持になつて、せゝら笑ひながら、見下ろしてゐたらうステツセルの顏が眼に浮ぶやうだ。

旅順口の閉塞、あんなことが實際どうして行はれたものだらうかと思つて居たが、來て見ると、港口の[illegible]いのは驚くよりも感心される。よくもまあ、人工でつくり上げたやうな具合に、いゝ港が出來たものだ、とつく〴〵思はれる。樹木の繁つた丘陵が、右から左から、出たり引込んだりしてゐる。青葉が眞夏の陽に光つて、全く土佐繪でも見るやうである。

見下ろすや青葉に光る旅順口

艦と青葉と土佐繪のやうな旅順口

賣食までの時間をつぶすべく、博物館に先づ出かける。滿洲風俗の模型とミイラとが一番に頭にのこる。二三日もかゝつて見たら面白からうと思ひながら、圓公は十二時頃に引上げて歸る。

氣のおけない長官と、お世辭のいゝ夫人と、何やら夫人と秘書官と數人で、名物の走りのしぎの御馳走になつて、やがて自動車をかりて、戰跡巡りと出かける。

三四

先づ自動車のかけあがつたのは白玉山頂である。長官邸では見えなかつた旅順港の隅ずみまでがパラノマを見るやうに見下ろされる。驅逐艦や水雷艇などが盥の中へ玩具を浮べたやうに見える。鼻先にある黃金山砲臺といふのは、今日本でつかつてゐるかどうか、見た所海上數哩の間は全く安全地帶である。難攻不落といはれた文字が本當だといふことが、しみ〴〵思はれる。日本人だから陷落させたのだらう、廣瀨中佐のやうな人がゐたからだらう、といふやうな思ひが、本當に圓公の頭にぽんやり湧いてくる。

自動車は東鷄冠山の砲臺跡まで、堂々とゆけるやうに路が出來てゐる。砲臺跡といふのは、まるで混凝土の城壁の中に出來てゐる。城壁といつても、五寸や一尺の厚さではない、そしてその中にトンネルが出來てゐる。よくもあんなものをつくりもしたものだが、よくもあんなものを破壞しもしたものだ。何時の間にあんなものをこしらへたものか、案內君の說明によると、露人はあれをつくるまでは、支那人をこきつかつておいて、さて出來上つてしまふと、二千人とかの職工を海に連れて行つて、ずぶりと沈めてしまつたとか。その話の眞僞は別として、兎に角日本人の知らぬ間に此等の砲臺は出來たといふことだが、溝を掘つてはそれに攻め寄せた日本人も根氣のいゝものだ。その當時の日本の偵察では、此砲臺といふのは、まるで大旅館のやうだといふ報告だつたといふこ

とだが、結構正に當らずといへども遠からずだと、圓公はつく〳〵感心する丈けで何もいはない。

山を下ると、黄金山に近く戰利品陳列所がある。もう參觀は澤山だと圓公は思つたが、すゝめられるが儘に十分か二十分で出るつもりではいる。

はいつて見ると、丁度下の闘からの船の中で親しくなつた、旅順工大の丸澤博士も、四五人の友人を連れて來て、所長らしい人から叮重な説明をきいてゐる。そして一緒に説明をきかぬかといはれると、辭退することも出來ないで、ついて廻つてる中に、戰跡の模型圖の處まで來ると、所長さんの得意の砲臺占領の戰話が始つた。こまつたな、飛んでもないことになつてしまつた。おまけに自分も參加した自慢話まで幾度も交へて、續くわ〳〵、いつまでたつても止みさうにない。とうたうたまらなくなつて、圓公は一寸した切れ目を見つけると、失禮してさつさと引き上げたが、長くて二十分ばかり見るつもりだつたのが、一時間餘りたつてゐた。

そこから黄金山下の水泳場を廻つて、旅順驛に行くつもりだつたが、旅大自動車の發着處まで來ると、車はばたりと止まつた。

「汽車は四時半發で、もう三分しかないから、間に合ひません。あとは七時ですが、乘合では如何ですか、乘合は五時ですから」

説明子にかういはれると、非常に乘心地のいい新型のバスではあるし、それではと云ふので、五時の定期をまつことにした。

待つてる間に圓公はいつた。

「これまでは實に凡てが調子よく行つた。今日だつてまあ〳〵順調の方だ。」

「本當に、これからもさう調子よく行けばよどざんすがねえ」と烏夫人はいつた。

處が五時になつて來たバスは、殆んど滿員で、三四人しか乘れなかつたが、客が多いので、臨時を出すといふことだつたので、圓公達も、折角乘つた車を下りて次の臨時車に乘つた。

此臨時車といふのは、旅順や大連の市街を運轉してゐるのと同じ型である。幾分舊式で、二人が朝乘つて來たのとはちがつて、左右に一列づゝ座席があるのだ。圓公は順序として前の方左側の支那人のボーイ車掌席の次へ、烏夫人は圓公の次へかけた。全體で何でも八人か十人の乘客だつた。

旅順から二里ばかり進むと、玉の浦といふ漁村がある。人家は左右に十軒ばかりある。バスがその近くまで行くと、左側の人家から、僅かな勾配の路なき路を、丁度オートバイが上らうとしてゐる。一度上りしくじつて、二度目を上りかけたが、見る〳〵バスとオートバイとは輪々相摩するこゝなつた。可哀想に、オートバイを轢殺したなと圓公が思つた時、バスはブレーキをかけながらぐつと右にそれた。そして四五間の間、車體を斜にしながら海岸にそつて走つてゐた。けれども半ば脱線して斜になつた車體は、遂に平均を失つて眞横に倒れてしまつた。

「あつ！　死んだな！」

圓公がさう思つた次の瞬間には、物凄い音かつゞいた。

「がたッ！　めり〳〵ッ！　ヂヤラン！」

一分間ばかりすると、圓公は眼があいた。

「おや、死んだと思つたに生きてるか、だが、恐ろしく體がいたむ、息が出來ぬ、自分の口から洩れてくるうめき聲がきこゑる」

こんなことが薄ぼんやりと頭に浮んでる中に「動いてはいけない〳〵」といふ聲がする。けれどもその中にほつりほつりと皆が出てゆくやうである。圓公もやがて出やうとして、身を動かして見たが、腰のあたりが碎けてしまつたのか、まるで脚を動かすことが出來ぬ。只手が動く丈けである。

ガソリンが、じやあと眼の前でこぼれてゐる。これが爆發でもしたら、いよ〳〵焦熱地獄だ。生きてたつて腰から下はもう駄目だ。うまく行つて片輪だらう、ぐづぐづしてる中に死ぬのかも知れない。まゝよ、成るやうになれ！　眼をつぶつてじつと痛をがまんしてゐると、二三人かゝつてゑいや〳〵とかつぎ出してゐる。

圓公は路傍の砂地の上にかつぎ出されると、先づきいた。

「オートバイと運轉手とはどうしました」

どちらも大した怪我はなくて、負傷は自分が一番ひどいときくと、圓公は自分の不幸を悲むよりも、人々の幸福を心から祝したい氣がした。

「それはまあいゝことでしたな。」

かういつたゞけで、少しも自分の不幸を悲しむ心の起らない己れを顧みて、圓公は自分が大分大きくなつたことをしみ〴〵喜んだ。

圓公の向側に居た或る學生は、寢ころんで雲を見てゐる圓公の側へ來て云つた。

「僕は何ともないです、幸ひ微傷も負ひませんでした。だがこれで一泊しなければならなくなるのが閉口です。」

「でもかうして脚の立たなくなつたものに比べれば、貴方はお仕合せです、ゆるゆると無事にお歸りなさい。」

圓公は笑ひながら云つた。

支那人の子供達は、いつか圓公のぐるりに集つて、見世物でも見るやうに見てゐる。烏夫人はそれを見るといつた。

「折角順調だつたのが、くるつたのは殘念でしたが、それでもまあ、そんなでよどさんしたねえ。あたし本當にびつくりしましたよ。この菓子は折角子供への土産と思つて買つて來たんだけれど、功德に此人達にやりませうね。」

そして袋を開いて「進上」といつて差出した。子供達はてんでに手をのぞけた。圓公は嬉しさうにそれを見てゐた。

オートバイ避けしたまゆら自動車はシネマの如くくつがへりけり

自動車のくつがへりゆくたまゆらにふと死んだなと思ひたりしを
死にけるとわれはも人も思ひしをいつか目ざめて息をふきをり
目ざむれば腰はたゝなく路ばたの小砂利の上に投げられてあり
支那人の子らに守られ仰向に砂にいねつゝ暮るゝ空見る
人はみなすこやかなるに吾ひとり腰くぢかれて生くはをかしも
乘合ひし人は安けく吾ひとり入院するはせめてうれしも
自動車はみぢんに碎け物皆は逆さになりてうめきつゝあり
もの凄きうめきの聲のさやかにもわが口もれて耳にきこゆれ
その折に死ぬべかりしを生きてありあまりに奇しも泣くにはをかしも

圓公は兎も角も滿鐵病院に入院すべく、さしあたり關東長官邸から自動車を廻して貰ふやうにと賴むのだつたが、その中に旅順から來た二三人の巡査は、それよりか近い旅順に行つて、關東廳病院で早く手當を受けろと叱るやうにいふ。それもさうだと圓公は一先づその命に從ふことにした。

腰ぬけて異鄕に巡査に叱られる
腰ぶら〳〵と御輿のやうにかつがれる
生きてゐるのがをかしくなつて笑ひけり

三五

圓公が再びワッショ〳〵と自動車へかつぎこまれて、關東廳の病院へ運ばれたのは、もうずつと暗くなつてからのことであつた。

外科部長の何とか博士は、あつさり診察して後、何ともなつてゐないから、大したことはない。直きによくなるだらうと仰有る。それでも圓公が體を動かさうとすると、背中の腰の上邊りが、まるで針で刺すやうに痛む。腰から下は一寸も動かすことが出來ない。博士はそれで大した事はないと仰有る。圓公は嬉しいやうな、をかしいやうな、狐につまゝれたやうな心持でぼかんとしてゐると、關東長官夫人からの話だとして、「大した事でないやうなら、官邸の方へ連れて來て呉れ」といふことだと傳へるものがある。圓公は飽くまで滿鐵病院の方へ行きたいと云ひ張つたが、まあ〳〵といつて、そこから遠くない長官邸へつれこまれてしつた。

半身不隨の圓公は、又してもワッショイ〳〵と、奥の日本間へかつぎ込まれる。大變な騒ぎだ。まるでお祭の神輿そつくりである。圓公はどうすることも出來ないで、只爲されるが儘にぼかんとしてゐる。けれども時にはお神輿扱にされるのは、あんまり惡いものではないやうな氣がする。一層此儘神樣になつたらどうだらう。何の爲にかつがれるのだつてかまひはしない。かついでゐる人はワッショ〳〵とやつてる瞬間には、金がどうだの、何をどうしようだのと、下らぬ雜念なんかち

つともまじつてはゐなささうだ。只夢中で、むしろ虚心でかついでるやうだ。虚心でかついでるのだとすると、誰にかつがれたつて同じことだ。一生涯何とかしてかついでくれるものはないだらうか。功徳だの、利益だの、一切の欲望をすてゝ、かついでくれる者はないものだらうか。そんなことは病氣の時ででもなければあり得ないとすると、負傷もこれ位ならありがたいものだ。旅に來て病氣をする。而も始めて出遇ひながら、妙なお蔭で神輿にされてしまふ。そして日本間も日本間、今を時めく親任官様の官邸の一番立派な室を二間ばかり打通して、そこに堂々と祭り上げられる。おまけに知りもしない人が、入れ代り立かはりお見舞だといつてやつて來る。生れて始めて羽根蒲團を打かけられたりする。旅順第一の一等看護婦とやらが附添にやとはれる。考へて見ると、いつの間にか本當の神様に祭りあげられでもしたやうな氣がして、圓公は可笑しいのを我慢してゐる。

ほかんとして腰の痛みを忘れてゐる中に、圓公は、ふいと東京に居る妻君のことを思ひ出した。下らない、すぐ死ぬでもなからうし、よし死んだつて烏夫人が何とかして呉れるだらう。此儘神様になり切りや此上もない話だから、知らせなんかしないで、その儘打やらかしとこうかなと思つたが、まてよ、その中に萬一新聞にでも書かれでもしたら、それこそ一騒がせするかも知れない。いくら此旅行では、馬賊にやられるかも知れぬといふので、出がけに一萬圓の傷害保險をつけたにしたつて、子供もない妻君は、一人で驚いて腰をぬかしでもするかも知れない。そんなことが有りでもしちや可哀さうだ。知らせるだけは知らせよう。その代り出來る丈け心配しないやうに電報を打

つて貰ふことにしよう。圓公は考へに考へて、その晩遂く大連に歸ることになつた烏夫人にたのんで、翌くる朝電報を打つて貰ふことにした。

ジドウシヤテンブク、コシウツ、シンパイナシ

これなら心配することはないだらうといふのが圓公の考であつた。

何とか博士が、たいしたことはないだらうといつても、患者の圓公は、甚だたいした痛みを感じながら、それでも朝になつたら、キヨトンとなほつてゐるかも知らないと望みをかけつゝ、落つきのない一晩中をうとり〳〵した。

短夜を腰ぬけてうとり〳〵かな
短夜を祭りこまれて寢たりけり

三六

ぱつと眼があいた。爽かな朝である。

今し黄金　頂に上りかけた鮮かしい朝日が、處女光を硝子障子越しに投げてゐる。圓公の頭にふいと歌らしいものが浮ぶ。

横臥せる床をまてらす朝の陽は黄金山を今離れんず

薄色の羽の布團にほんのりと朝の日さじてそゞろまぶしも

看護婦がそつと立つてカーテンを引く。青ずんだ空の色が視界から隠される。起きて見たらどんなにいゝ心持がするだらうな、と思ひながら、折角見下ろせる旅順口に背いて、大きな室にぼんやり寢ころんでゐる。

ステツセル將軍の亡靈でもふうわりと出て來て、「おい！　どうしたい、」なんて呼びかけでもしないだらうかと思つてる中に、又うと〳〵とする。

ステツセルの亡靈が來てお早うと呼びかけさうな朝の窓かも

その昔ロシヤの將軍ステツセルがこの家こゝにいねたりけんか

大したことでもないといはれた痛みは、依然としてちつとも變らない。圓公にとつては頗る大したことである。

お醫者さんといふものは、隨分勝手な診斷をするものだ。傷も何もついてゐないから、大丈夫たいしたことはないといふのは、目に見えた丈けの證據での診斷である。見えない內部にどんな故障が起つてゐるかも知れない、すつかり神經が駄目になつてるかも知れない。でなくとも、內部の骨筋肉、そこにどんな傷が起つてゐないとも限らない、それでなくてこんな痛がどうして起らう。此腰のふにや〳〵は何といふことだ。圓公は何とか博士の診察を少しく疑ひ始めた。すぐにも逃げ出して、滿鐵病院へかけ込みたくなつた。彼はその希望を直に秘書官Kにつげた。だが至つて鷹揚な

Kは自分にはちつとも痛くないと見える。

「まあ然し、も少しゆつくりなさつた方がいゝでせう。ぢきによくなるでせう。」

といふ。そこへ烏公が大連からやつて來た。圓公は早速此話をもち出した。

「でもせめてもう一度博士に診察してもらつてからにした方がいゝでせう。」

かういつて皆が皆、至つて他人ごとのやうに泰然としてゐる。

「まゝよ、おれだつて他人のことのやうな氣になつてやれ！」

圓公が自棄くそになつて寢ようとすると、南滿洲電氣株式會社――略して滿電といつてゐるのだ――の、やれ何とか課長だとか、何とか主任だとかいふ人達が矢鱈にやつて來てはあいさつをする。そして今に來診が〳〵といつてゐる中に、とう〳〵日が暮れかけた。さすがに植民地はのんきだ。博士の姿はなか〳〵見えない。

博士が來たのは、何でも夜の八時か九時だつた。診察の結果は、矢張昨夕と同じことを仰有る。圓公はいよ〳〵博士に見切りをつけてしまつた。何もする術もなくて、只寢てゐればいゝといふ診察には、あまりに心細くなつた。十日や一週間で治りさうなら、かうも腰がぬける筈がない、誤診ではないかも知れぬが、分らないのかも知れない。分らないのを分つたやうな顏をされてゐてはたまらない。圓公は斷然として滿鐵病院に入院すべく、凡ての交渉を開始して貰つた。

圓公大明神が、ツツシヨ〳〵と自動車にかつぎ込まれたのは、もう十時を過ぎてゐた。

三七

自動車は淋しい夜道を警戒しながら、十里ばかりの一路を大連に向つて靜に進むのであつた。反對の方角から進んで來る自動車のヘツドライトが、ぺしやんこに體を横へてゐる圓公の眼をチラリと射る度び毎に、彼の神經はひやツ〳〵としたのである。

大連市街だらうと思はれるあかるさが、引きつゞいて車の内へ照込み出したのは、もう十二時近かつた。

暫くして自動車が、大きな建物らしい側につくなり、圓公大明神は車輪つきの擔架の上へ運び上げられた。

家も人間も窓も床も、何もかもが横に斜になつてゐるやうな感がしてゐる中を、くる〳〵くるくると引ずられて、やつと小さい薄暗い室に運び込まれた。そして何だか岸壁の上へでもほうり上げられたやうに思つて見まはすと、居心地の慣れないベットの上に投げつけられてるのだつた。長官官邸の大廣間から、小さい室に祭りこまれた圓公大明神は、何だか燒場の棺置場にでも投げ込まれたやうな氣がした。烏公の話によると、何でも二等室であるらしい。でも圓公は、もう落ついて、其儘に寢込んでしまひたいやうな氣になつてゐると、滿電の社員はもう一度圓公をお神輿にすると

いひ出した。圓公は隨分辭退したが、とうとう又擔架にのせられた。そして再びくる〳〵くる〳〵と廻りまはつて、やがてエレヴエーターに積み込まれた。

ジヤラ〳〵ジヤラ！

エレヴエーターの入口の戸のしまる音がする。

「いよ〳〵地獄へつれてゆくのかな。」

ツーン！　と變な氣がしてエレヴエーターが止まると、擔架はまたくる〳〵くる〳〵と、運んでゆかれる。地獄へ落ちたのかと思つたら、何でも四階までもちあげられたらしい。少しあかるい室に持込まれる。

「これはずつと廣い、これならいゝ」

といふ聲がする。何でも一等室らしい。

「一等室の入院料を拂つて、二月も三月も居ちやたまらない、おれにやそんな金はないがなあ、一體どうするといふのだらう」

しみつたれな圓公は、死にかゝつてゐながら、妙に心細い氣持になる。おまけにもう夜中だから附添も看護婦も傭ひ入れることが出來ない。仕方がないから、自動車の運轉手君が一人殘つて、朝まで看護をしてやるといふ。烏公は安心して歸りかけたが、「イす」といつて、室内の一角に設けてある洗面所兼西洋便所内にはいつたと思ふと、やがて何やらチユツといふ音がした。

「ひやあ！」

烏公は怪しげな聲を出してとび上つた。そして例のだらしない聲でげら〳〵笑ひながら、大騒動をやつてる。圓公には何が何だか分らない。暫くして矢鱈に唾を吐きながら、烏公は出て來た。そして相變らず妙な笑をつゞけながら語る處によると、彼は西洋便所で用を達した後で、壁の方にある妙な『いぼ』を一寸押へたものだ。すると、便所の底から恐るべき勢をもつて、シュッ！ と水が刎ね上つて、それが彼の顏一面に飛びかゝつて、眼、鼻、口、凡ては見事に洗禮されたといふのだ。

圓公は氣の毒といふよりもをかしくてたまらなかつたが、腰の痛さで笑ふことも出來ないで、一生懸命に腹をかゝへて、涙を流しながら口をつむいでゐた。烏公は口をあけたまゝで、いつまでも鼻と咽を鳴らしてゐた。

小便の洗禮に笑ひ泣く男
腹を抱へて泣く〳〵笑ふ暑さかな
腰抜けの痛忘れて笑ひけり

三八

夜半過の薄暗い光の中に、擔荷に寢た儘で見た時の滿鐵病院の感じは、やゝ整頓した牢獄でゞもあるやうであつたが、夜があけてからはまるで大きな殿堂に變化してゐた。大きな復葉飛行機のやうに、左右に幾つもつながれた病棟の大勢が、X光線室に運ばれて行く時に朧ろげながら察せられると、話にきいたやうに、東京にだつてこんな病院はありさうに思はれなかつた。さすがに滿鐵王國の威勢の素晴らしさが髣髴出來るやうだつた。

X線寫眞の結果では、何の異狀も認められなかつた。外科第二部長伊藤博士の診察も、一ケ月も立つたらよくなるかも知れないといふことであつた。そして氷をあてたり全身に濕布をやられたりし出した。眞夏の最中だからいゝやうなものゝ、一日中體も敷布團もじめ〳〵してるのが堪らなかつた。

「二三日もやつたら、腐つて體中に黴が生へるかも知れないぜ」

圓公は附添の婆さんにいつた。婆さんといつても、圓公よりずつと若い附添婦は、子供をすかすやうにしては濕布をかへた。

果して昨日の新聞に出たとかいふので、朝から色んな人が見舞に來る。思ひもかけぬ名士がほつ

り〳〵とやつて來る。大學を出てからもう二十餘年も過はない友達までがひよつこりと顏を出す。東京からも朝鮮からも、しきりに見舞の電報が飛んで來る。病室は朝からクラブを見たやうである。一人が歸つたかと思ふと次の見舞客が來る。時には四五人が同時に集ることがある。本當に大明神でなくても、貧乏神位には祭り上げられたやうに圓公には思はれた。少くとも圓公を中心にして、滿洲の一角に、人間の小さな旋風が起つて居ることは事實である。そして圓公は其旋風の中心になつて、無風帶のやうにぢつとベッドの上にころがつてゐる。見舞客と話してゐない時は、いつもうとり〳〵してゐる。毎日歌でも句でも考へようと思ひながら、鉛筆をもつたまゝで纏りのつかぬうちに寢込んでしまふ。

病室のクラブに似たる暑さかな

氷だいて眞夏涼しき患者かな

總身の濕布微生えさうな暑さかな

薫風や貧乏神に祭られて

入院した朝のことであつた。烏公が土地の一新聞をもつて來た。あけて見ると圓公の負傷を遲ればせに報じて、彼が政府からの秘密な使命を帶びて、滿洲に出かけて來たといふやうなことが書かれてゐた。おらが首相との下らぬ姻戚關係をたどつての憶測から出たものであることはいふまでもないが、それにしてもどこでその樣な香を嗅ぎ出したものだらうと、圓公は苦笑せざるを得なかつ

た。蓋し圓公が對滿關係についての一箇の間者でもありさうな筆法にとられたからだ。

涼しさや僞間諜の病みてあり

三九

人生を殆んど終りかけたやうな圓公の灰色の病室に、時々華やかな姿の現はれたことは、患者にはふさはしくない異彩であり、看護婦室の噂であつた。

例の若々しい烏公の夫人は、殆ど毎日のやうにお晝前に姿を現はした。彼女は圓公と共に自動車顚覆の際に、頸筋を打つたので、骨つぎに行つては按摩をして貰つての歸りを見舞に立寄るのであつた。圓公は彼女を相手にしては、寢ころんだ儘でよく五目ならべに時をつぶした。

彼のも一人の友人で、滿鐵にかゝんでゐる伏龍の李君がまたよくやつて來た。伏龍が丁度眼病で入院してゐるのを見舞がてら、殆んど一日おき位に子供を連れてやつて來ては圓公を訪れた彼女は一向に物をいはない婦人であつた。やつて來て貝腰かけにチョコンとかけてゐた。圓公との間をとりもつものは、伏龍の先妻の子のだゞつ子君であつた。

烏公の母親は圓公の學生時代の友人であつた。二十何年ぶりかに、不思議なことで、しみ〴〵と語り合ふ機會を得た老未亡人は、殆ど聾になつて居るので、例の耳ラッパのやうなものを携へて來

ては、圓公の側に耳を寄せて時々にやり〳〵してゐた。

關東長官夫人も亦時々清艶豊麗な姿を病室内に現はした。そしてよく清新な滿洲果物を彼に味はせた。

種子なし葡萄のアレキサンドリア！　その新鮮にして端麗なる味は圓公の何時までも忘れ得ない所で、これを思ふ時に彼は長官夫人を憶ひ、夫人を思ふ時にアレキサンドリアを憶ふのである。

烏公の隣の例の姪子様の夫人も、時に氣のおけない姿を現はしてよく圓公を慰め、圓公の妻の姪二人は學校が終るとよく病室にかけ込んで來て、なつかしさうに圓公に色んなことを話しかけた。二人の姪の義母も時をり亭主と共に若々しい姿を見せた。

今一人記述を洩らしてならないのはN夫人である。彼女が本郷の圓公の家に毎日のやうに姿を見せてゐたのは、もう七八年も前のことである。彼女がN夫人となつて滿洲に渡る時、圓公は途中まで彼女を送つて、その頃神戸にゐた烏公に夫人の乘船を案内させたことがあつた。爾來彼女は一度上京して圓公を訪れたことがあつたが、それ切り手紙を出してもはがきを出しても、N夫人は滅多に返事をよこすことはなかつた。

丁度圓公が今夜滿蒙旅行の爲に東京を立つといふ晩であつた。忽然近郊市街から電話をかけて、彼女は昨夕上京して來たことを報じた。けれども電話の上ではあるし、出發の間際ではあるし、おまけに彼女は旅順の邸宅を引拂つて、どこかへ移轉するかも知れない、主人が辭職の已むなきに至

つて、求職中であるからといふやうな、全くとりとめもないことであつたので、折角滿洲へ出かけて行つても遇へるか遇へぬか分らなかつた。ところが其後彼女は急いで再び滿洲に歸つて來て、大連に移轉するなり、東京の圓公の宅に向つて手紙を出したものらしい。宅からはその手紙を病院宛に轉送して來た。差出の住所を見ると、病院のすぐ側である。圓公は微笑しながら、喜びをもつてペンをとつた。N夫人は翌る日の午後驚いてかけつけた。そして丁度圓公が入院した頃子供の一人が急性の發熱をしたので、毎日病院通をして居たといふのだ。一階の診察室と四階の病室、間に三階ほど隔りがあることはあるが、不思議なやうな、面白いやうな、可笑しいやうな、何とも分らぬ感じに襲はれながら、圓公はN夫人の姿を見つめて居た。昔しながらの妖艶な靨の持主として、彼女は暫くの間病室を彩つて居た。

病室や女客の靨に風薫る

病みて異郷に舊友と語る夏涼し

八月の二十七日には、京城でラヂオの放送が約束してあつた。前日になると、友人から病狀きゝ合せの長文電報が來たが、圓公は只低頭の外に仕方がなかつた。

入院してから二週間あまりすると、痛が少しく薄らいで來た。圓公は物にたより壁にすがつて、室内運動から廊下運動を始めた。

病棟の東端までゆくと、病院の玄關を見下ろすことが出來る。そこには、支那人の俥夫君が列をつくつてならんで居る。あたりには支那人の馬車も散在して居る。圓公は食前の掃除の間や、退屈した時などは、必ず其處へ出かけていつて、俥夫君達の客をとる模樣を熱心に見下ろすのだつた。

玄關に一番近い俥夫君が先づ病院からの歸り客と交渉を始めるとすると、次の俥夫君達は、だまつてその交渉を注視して居る。交渉が不調に終ると、客はすつ〳〵と逃げてゆく。第二第三の俥夫君達は、すぐにその客と交渉を始めるでもない。日本人の患者や見舞客達がのべつにぞろり〳〵と吐き出されるからだ。ところが最初の客が、いよ〳〵俥夫君達の居る線を脱したと思ふ頃には、數臺の俥の列の中からか、時とすると最後の邊りからか、必ず一人の俥夫君が疾風の如く飛出して、交渉破裂で逃げかけた客を吸ひ込むやうに取り入れて、のう〳〵として走つてゆく。その敏捷さといつたら、まるで形容の出來ない位の面白さがある。かうして交渉不調に終つた客は、きまつたやうに所謂謀叛者によつて安價にさらはれてゆくのである。けれども決して俥夫君同士の間に爭めいたものを見ることがない。そしてその賃金といふのが多くは十錢である。十町でも二十町でも、殆んどどこまで行つても十錢である。乘つて見るとまるで氣の毒なやうである。けれども日本人は多くの場合に、決して十錢以上を支拂はない。萬一それ以上を要求されたやうな時には、日本人は俥

から下りよりとしない。いつまでもほかんとして乘つた儘で居る。するといつかは俥夫君の方から下りて呉れろ、負けるからといふさうだ。そこらが如何にも支那式外交の裏を行つたものだらうが假りに再び遠方まで引つぱつて行かれたらどうするといふのだらう。それにしても殆んどどこまで行つても、十錢で我慢をするといふ支那人の俥夫君には氣の毒にもなるが、それでも根氣よくせつせと一日中、飽かず稼ぎためることを怠らぬといふには自然と感心もせられて來るのである。

ところが十錢の俥代はまだ安くないとあつて、支那人は決して俥に乘らないで、家族連れの時などは、必ず馬車に乘るのである。五人も六人も乘れて、それがまた殆んどどこまで行つても二十錢か三十錢だからである。一人前十錢よりかずつと安くはなるからな。——

かうして大連市中や滿鐵病院などの乘り人の多いさうなあたりは、限りもない俥が停車して居るか所謂流すかして居る。電車から下りてまご〳〵してゞも居ると必ず二三人の俥夫に襲撃されるのである。そしてどこまでゞも十錢ばかりでゆくといふものだから、つい鼻の先でも日本人は俥に乘つて行く氣になる。かうして日本人の大連あたりに於ける生活は如何にも贅澤になるのである。着物でも食物でも東京そつくりである。むしろ東京以上である。成程はいる金は幾らか多いにしても出る金が多いから何にもならない。而も日本人の相手は、結局支那人でなくて日本人だとすると、彼等はかうして共食ひによつて、次第に裸になつて、出稼から再び内地へ歸つて來るのだ、といつて居る慷慨家も少くない。

四一

漸く病院生活に慣れて來はしたものゝ、反對に社會から隔離されたやうな生活に圓公はあき〳〵して來た。一日も早く東京に歸つて見たくなつた。といつて、一ケ月たつても、なか〳〵獨り旅で歸れるだらうといふ自信はつかなかつた。一層妻に迎へに來て貰はふか——こんな考がふいと浮いて來ると、九月の末頃に、見物がてら迎へに來て貰へないだらうかといふ手紙を出して見た。

びつこひきびつこひきつゝ廻廊をはてまでゆきし朝の疲れよ

背の痛みやゝにうすらぎこの朝都にかへる日をかぞへ見る

一週間ばかりすると、それでは海路を一人で出かけてゆくべく、急速に準備を始めるといふ返事が來た。來るといふことになると、只待つてさへ居ればよい筈であるに、圓公には家からの毎日のたよりが矢張りまたれた。これでは、ゑらさうなことをいつても、なか〳〵死なれもしない。半年もこんなことをしてゐると、いゝ年をしながら、ホームシックにかゝるかも知れないなあと、圓公は吾ながらをかしくなつた。

生れ故郷を飛出して、一通り成功して來ると、よく故國へ歸つて來る人間の心理がしみ〴〵と分るやうに思はれた。けちな、あさましい根性と思つたものが、矢張自分にもつきまとつてゐるのが

なさけないやうにも考へられた。

圓公がこんなことを考へてゐた或日の午前であつた。數日間妻を見せなかつた烏公がひよつこり顏を出した。夜でないと來ない筈の烏公が、朝から顏を出して、晝來る筈の烏公の夫人が來ないのが如何にもをかしい。それに烏公の顏付を見ると、何だか落つかぬ樣子である。

「君どうかしたのかい」

圓公は怪しみながらきいた。烏公は附添の婆さんを憚るやうにして、

「昨夕から妻の姿が見えないんや」

と小聲でいふ。そして、結婚したなり大連へ來た切りで、七八年間一度も鄕里へ歸らないので、どうかして一寸歸つて見たいといふことを、彼女が此頃頻りに云ひつゞけてゐたことや、子供の躾のことで、少しく母から小言を食つたりしたので、ぷいと出てしまつたのだといふことや、隣の姪子樣にたのんで、船だの旅館だのゝ方はすつかり警戒して貰つてゐることなどを物語つて、

「こんな事は前にも一度あつたんやからな」

とつけ足した。

「さういへば、妻君昨日來た時に、國へ歸る路順なんかについて、色々聞いて居たが、矢張その爲だつたんだな。夕方近くになつても、ちつとも歸らうとしないで、しきりに五目並べをやらうとするのが、ちつとをかしいなとは思つてゐたがね。つまりホームシックの起つてる所へ、一寸油をさ

ゝれたので、これ幸と、ぶいと實行したわけだな。それとも君がうまく振られたといふ譯かな。よし狂言にしても植民地だけに、芝居が面白いやね」

圓公が盛にからかつてゐると、烏公は例の咽をならしながら、眼を三角にして、べそつきかけてゐる。

「ところで君、金はどうだね、相當もつてゐたのかね」

「五百圓許りはいつたのを、其の儘そつくりもつて出たんや」

「それや中々氣がきいてらあ。早く君警察へたのむんだね、でないとおいてけぼりにされるぞ」

圓公はどこまでも人が惡い。

「でも警察へたのむと、すぐ新聞に出るさかいな」

「そんなことをいつてると、取かへしがつかないことにならぬとも限らぬよ。同じ燕でも植民地の若い燕は、羽が強からうぜ」

「そんな艶つぽい影がさしての事やなささうや」

烏公は呑氣さうに、うぬぼれめいた事を並べてはゐるものゝ、存外びく〳〵してゐるのだつた。

その晩烏公夫妻は、手を引き合ふやうにして、にやり〳〵笑ひながら、圓公の處へやつて來た。夫人は一晩を近所の旅館にとまつて、翌日いよ〳〵船にでも乘らうとして、先づ總領娘に一切を差圖すべく、娘の通つてる小學校の門前に待つてゐる處を、烏公にぽかりと押へられたのだつた。さ

すがに夫人は聊かきまり惡さうにしてゐた。

「奥さんなか〳〵やりますね」

圓公がからかふと、二人は顏を見合せてにたり〳〵してゐた。

四

いよ〳〵妻が迎へに來るときまつてからは、いゝ年をした圓公も、子供のやうに毎日指をりかぞへて、その日をまちながら歌つた。

家をしめてこの大連に病むわれを迎へに妻は來るといふかも
死の門を一度くゞりしこのわれを連れ歸るべく妻は來といふ
はる〴〵と千里の路を腰たゝぬわれを迎へに妻は來といふ

九月の二十二日は、悲しいやう希望にみちたやうな彼女が東京：旅立つ日であつた。圓公は窓か

ら天空を仰いでは、一路平安なれかしと心から祈つた。

これの日は妻立つ日なり一ひらの雲のゆきかひもたゞ靜かなれ

一人旅始めてすなるわが妻の路安かれと夜を日に祈る

二十四日の夕は、どうも海の上が荒れてゐはしなからうかといふ氣がして、圓公は落ちついては寢て居られなかつた。滅多に祈つたこともない祈りを天にさゝげたりした。

玄海の波も今宵は靜かなれわれを迎へに妻來といふに

二十五日の朝は、天氣は晴れて暖かであつた。といつても大連の氣候は內地のとすつかりちがつてゐた。朝晩はもう涼しい風が漸く圓公の身にこたへた。彼は持合せの着物を有りたけ重ねて、埠頭まで妻を迎へに出かけた。かん〳〵と照る日の光が彼には丁度いゝ心持だつた。埠頭には、圓公をめぐる二十人ばかりの人々が新來の客を迎へに集つた。それは圓公と彼の妻に對する同情とか敬意とか友誼とか親切であると同時に、かうした植民地に於ける人々の喜の一つでもあつた。本國からの遠來の客を迎へ、彼に接し彼と語り、本國の事情の片鱗でも知るといふことは、彼等が本國に對する懷かしみと親しみの現れでもあり、心の空虛をいやす小さな慰の一つでもあつたのだ。だから彼等は緣遠い人の送り迎へにも、一家をあげて埠頭に集ることを習としてゐるのであつた。かうした心持は、汽船と港とに對して經驗あるもののみが味ひ得る所である。圓公は其昔學校を出た當時、一年間淡路にゐた時の、かうした心持を思ひ出さずにはゐられなかつた。

あたり前なら十時過にはつく筈のハルビン丸が、十一時過ぎでなくてはつかぬといふ。

「矢張荒れたのださうだ。」

此噂をきくと、圓公は妻が可愛想でならなかつた。始めての海を越えての不安な旅に、さぞいやな一夜を經驗したゞらうと思ふと、更に大きな罪を重ねたやうな氣がした。

だん〳〵に迎への人が埠頭に集つて來た。成るほど、東洋一をほこる程あつて、まるで山のやうな埠頭である。山といつてをかしくば、丘といつたのでは、ちつともをかしくない、而もそれが高さに釣合つて可成りに長いものである。その中央に六千噸のハルビン丸が横づけになるのである。到る處では見られぬ光景だ。

と圓公はいつた。

「最初ついた時には、期待が大きかつたせいか、それほどに思はなかつたが、今よく見ると可成大きい埠頭だね」

四三

豫定より一時間ばかりをくれて、圓公がおなじみのハルビン丸がついた。足の速い大きさの優れたこの船に乘らうとして、彼も最初日取りを數へたし、妻もそれに乘せたくて、出發の日を成るべく遲らさせたのであつた。そのハルビン丸が丁度今眼前に巨體を斜にしながら、寸一寸と、埠頭に

横附けになりつゝある。
「おゝあすこに〳〵」
「どこに〳〵」
迎への人々はそれ〴〵に愛するものゝ姿を甲板の上に認めてはさゝやいてゐる。圓公も吾を忘れて妻らしい姿を物色してゐる。船の方からは數の多い陸上の顏なんかてんで分らないらしい。船がブリッヂにつながれる頃になつて、圓公は妻の顏をやつと確認することが出來た。そして彼女が淋しげに笑顏を見せてゐるのでほつとした。
ブリッヂを渡つて來る彼女の脚どりはなか〳〵しつかりしてゐる。いや誰一人元氣に充ちて居ない脚どりの者はない。さうだ、大陸に渡る人々、凡ては皆溢れるやうな元氣でやつて來るのだ。新しい目的に向つて活動し、新しい運命を開かうとして飛出して來るのだ。さうにちがひない。屹度さうであらう。さういへば妻だつて、矢張多少の希望をもつて來たのだ。可愛想に自分の腎臟症は忘れて、元氣さうに來てくれたのだ。と思ふと圓公は何だかセンチメンタルになつて、妻の顏を見るなり、感激の涙がほろ〳〵と落ちた。そして今迄妻に對して感じたことのないほど嚴肅な敬意をもつていつた。
「まあどうも御苦勞樣！」
「でもまあそんなで何よりでございます。皆樣どうもありがたうございます、色々お世話樣になりまして。」
彼女は眼を凹ましてゐながらも、氣が張つてゐるせいか割合に元氣さうである。日頃から勝氣な彼女は、海の上でも平氣だつたやうな顏をしてゐる。圓公は愛情といふよりも、むしろ一層の敬虔な心持で、胸をなで下ろした。
折角來て貰つて、枕を並べて仆れるやうなことがあつては！
之は强さうに見えて實は宿痾をもつてる彼女に對して、圓公の一番に心配する所であつたからである。
H氏は丁度滿鐵からの自動車で迎へに來て居た。

四四

翌朝圓公の妻は果して熱發した。食物が變つたが爲、腸をこはしたが爲であつた。彼女は二三日の間別の病室に起臥しなければならなかつた。
四日目の午後であつた。彼女は伏龍の案內で、土產物の買集めに出かけた。圓公も思ひ切つて例の俥に乘つてついて行つた。何とかいふ大連一の支那人の呉服店へ先づ立よつた。緞子を買ふのが目的である。柄と色合の適當な品がないので、つまらなささうな顏をしてゐると、日本人には見ら

れないやうな、愛嬌のいゝ店員が、限りもなく品物を出して來る。もう澤山だといふと愈多分に出して來る。色の白い、ちつとも支那人らしくない、役者にだつてないと思ふほどの好男子で、而もちつとも氣障な所のない店員は、「看々結構です」といつて出すわ〳〵。見る丈けでもいゝといふのである。二つの大きな卓の上に見る〳〵山のやうに積み上げた。かうなると買はずには居られない。やつとの事で座布團地を見つけ出してきめると、今度は帶はいらぬかといつて、前のをしまひ込んでは代りを出して來る。例の看々結構、看々結構をくり返しながら、まるで、天空を風でも吹いてるやうな顏附で、幾らでも出して來る。氣に入りさうなのがないからといつても、一向平氣である。その中には屹度氣に入るのがありますといふやうな顏附で、にやり〳〵笑ひながら、まるでロボットが手品でもやるやうに出して來る。

いつの間にか五六十本近い緞子の丸帶地をつみ上げた。圓公の妻は全く氣の毒になつて、はらはらしながら顏をそむけて幾度かことはつた。

「せめて見る丈け見て下さい。」

看々君あくまで泰然としてまだ出して來る。圓公と伏龍とは只感心して見てゐる。

「商賣がうまいな。あれでなくちや本當の商賣は出來ないね。」

「日本の商人と來ると、買はずに出ようものなら、すぐいやな顏をするからな。あれぢや日本人の店はだめだらうね」

それ來たといはぬばかりに伏龍がつゞけた。

「それや君支那人は出入商人でも、大抵の品物なら自分のうちにないといふことをいはないんだからね。若しなければ、高い他の店からわざ〳〵とつて來ても納めるんだぜ、そして信用を得るまでは何でもやらかすんだからね。第一掛賣をしたつて、決して催促なんかしないんだからね。」

「矢張どつかえらい處があるね。」

帶地が愈見込ないとなると、今度は翡翠の帶止めが持出された。例によつての看々物が卓上に幾十となく擴げられた。

「他の店にはまがひ物がありましても、手前共の店には決してまがひ物はありません。まがひ物をこしらへては引合ひません。」

看々君は冷しい顏をして、にやり〳〵笑つてゐる。

店を出て少しばかり歩いてゐると、圓公は腰骨の邊りがふら〳〵と來た。全身がふにや〳〵になつて、その儘つぶれてしまふのかと思はれた。圓公は恐しい危險が豫想されるやうな氣がして、俥に乘つて一足先に病院に歸つた。

支那町を腰ぬけのゆく暑さかな

暑き日や泰然非情の支那の俥夫

汗なんど知らず候支那の俥夫

再びぐらつき出した圓公の腰は、寧ろ逆轉して、後もどりしかけたのではないかとも疑はれた。朝夕の廊下の散歩も堪らなくなつた。いよ〳〵腰が崩壞するのではないかといふ氣さへした。けれども部長の診察の結果では、大した異狀は認められぬといふことであつた。肉體の內部の故障で、X線にも現はれないとあつては、一寸診察の仕樣もないかも知れぬが、圓公は頗るかがつかりしてしまつた。いくら死を賭けて滿洲へ出て來たにしても、あの災難で死ねなかつたものが、此處までになつてから、だら〳〵と病院生活をつゞけたのではたまつたものでない。それに、內地よりも一ケ月もさきがける寒さは、もう朝夕の圓公を脅かしかけてゐる。圓公は萬難を排して豫定通り十月の三日に大連を出發すべく決心した。

かう決心すると、もう一度其豫行演習をやるべく、滿電の自動車を借りて、挨拶やら、妻の見物をかけて旅順に向つた。

思ひ出の遭難所へ來ると、圓公は車を下りて實況を妻に說明した。あの際集り合せた支那の子供達や大人までがやつて來て、運轉手に向つて色々と說明した。其時の負傷者が今目の前にゐる圓公であるときくと、彼等は驚歎の眼を見開いて祝賀の意を表してゐた。圓公は帽子をぬいで感謝した。

遭難の跡來て見るや今朝の秋

關東長官の邸を訪れると、丁度會議中とかで、長官夫妻は玄關まで出て圓公達の謝辭を受けてくれたので、二三時間をそこで節約することが出來た。おなじみの白玉塔から、もう一度旅順口を見下ろすと、すぐに旅順大學に飛ばして丸澤博士を訪れた。

「僕も丁度明日から內地へ歸りますが、それでは一處に行きませうよ。」

「さうですか、それは非常に好都合ですが、實は京城に廻つて、一寸でも見物してゆきたいのですから」

「でもそんなお體ぢやや船の方が安全ぢやありませんか。」

「さうかも知れないですけど、萬一海が荒れでもして、吐いたりすると、腰にこたへてたまらないですから、海の上の時間は、出來るだけ節約したいと思つてるのです」

圓公は折角の丸澤氏の好意も辭して、陸路京城に廻る豫定をかへなかつた。

すぐに引かへして圓公は博物館に妻を案內した。可成いろ〳〵な參考品が澤山あるが中に、圓公はやはり風俗物と、ミイラが何度見てもあきなかつた。

棒鱈のやうにかち〳〵になつてゐる淺ましい姿のミイラ！　千年餘りも半ば開きかけた口をつむりもしないで、ちよこんと白い齒をむき出して、何事かをいつまでもさゝやいてゐるやうな姿！

見てゐるとしみ〳〵と人間に呼びかけて、吾々の生命に對してひそやかに暗示し、現實に對して皮

肉な嘲笑と揶揄と諷刺とを力強くあびせかけてゐるやうである。圓公はそのさゝやきが、はつきりときこえるやうに思つて、氣味が惡いよりも、むしろ敬虔な心持でそれに耳を寄せた。——

「君達にはこんな物が貴いのか、もつと貴い精神文化なんて、お前の國にはないのかい」

圓公は小さくなつて頭を下げた。

そして三人のミイラの中の一人が子供であることに、一層のいたましい記憶をさまされて、十餘年前に亡くなつた一人息子の事を思ひやりながら、標本箱の周圍をくる〳〵と廻りつゞけてゐた。

とこしへにあざけりのゑみ投げにつゝミイラなるかな靜にねむる

四六

豫行演習は案外に圓公の自信を强めたのであつた。ぐづ〳〵してゐて風でも引くよりか、思ひ切つて一氣に歸京しよう、ぐにや〳〵腰とふら〳〵脚でも、妻がついてゐてくれゝば大抵大丈夫だらう、圓公の此の信念によつて、凡ての手配は行はれた。

三日の朝の八時。圓公はいよ〳〵思出の深い大連を立去るべく停車場に向つた。停車場の入口で自動車から下りた時、大地震のやうなふら〳〵ぐら〳〵がやつて來た。圓公は附添婦によつてやつと身をさゝへることが出來た。その時T理事はいつた。

「具合が惡かつたら、安東で下車したまへ。あすこの病院に今から電報で紹介しておくから」

感激の力が圓公の全身にみなぎつた。

「來年の春は夫婦で出かけて行くさかい、まつとつておくんなはれ」

烏公ががら〳〵と咽を鳴らしていつた。

圓公は腰に力を入れて、可成に多數の人々の見送りの言葉を車窓にきいた。凡ての言葉が、ジッ！ジッ！ と彼の身を引しめた。圓公は何時の間にか自分が非常にセンチメンタルになつてゐることを見出して、時の力に恐怖せずにはゐられなかつた。

汽車が動き出すと、プラットフォームの人々も動いてゐた。

「さらば〳〵！」

「永遠にまた見ることなかるべき、而も忘れることなき大連よ！ さらば〳〵！」

暫くすると汽車はもう高粱の刈りとられて、一しほ淋しい茫々たる平野を、他愛もなく走りつゞけてゐた。

高粱の切株百里秋の行く
何時の間に刈りけん黍の南滿洲

乘りかへて安奉線にはいつてからの風景は次第にやゝ變つて來た。山の姿が、だん〳〵に近くなつて來た。と同時に次第に暮れ近くなつた。眼がさめて見ると朝鮮と滿洲の境である安東である。

そこでは一時間ばかり汽車がとまつて、所謂稅關檢閱が行はれるのであつた。

圓公は眞面目くさつて、命ぜられるが儘に、二三の鞄と手提とを開いて、きちんと起き上つて硬くなつてゐた。

やがて暫くして若い檢査官が圓公等の處へ來た。大鞄の中はいゝ頃にしか見なかつたが、手提鞄を手に取るなり、彼は小さい口にすばやく手をつき込んで、寶石と疑ひでもしたのか、占めた？といふ樣な風で紙袋を引ずり出した。そしてそれが圓公が病院で貰つて來た藥であることを知ると、

「何だ、馬鹿〳〵しい」といつたやうな顏をして、紙袋を投げるやうにして、左隣りに向つた。

左隣りの老人は、何でも見た所僧侶ででもありさうである。そして稅關で睨みさうな品物を山ほどもつてゐる。棚の上から坐席の下から、近所近邊つみ上げてゐる。老人は稅關吏に對して、「凡ては貰つたものです」といつてゐる。成程貰つたものらしい證據には、小さい品物が包裝なしの儘で限りなくあるのである。ところがその中でウイスキー二本と、織物二反に對して稅金を要求された外は、あとはまるで素通りである。

之を目擊すると、圓公夫婦は、あんなことならも少し土產でも買つて來ればよかつたやうな氣がした。そしてせめての腹いせに、滿洲でも此處が一番安いときいてゐるMCCを百本買つて貰つた。內地の三分の一の價で、百本までは免稅といふをたよりに、つゝましやかな小さな土產を弟に送る爲であつた。

四七

稅關檢査がすんで暫くして出發した汽車は、すぐに鴨綠江を渡るのであらう。地響でなくて川響きとでも云ひたい空虛な音がきこゑる。冬でゞもあつたら、晝であつたら、變つた風景の片鱗でもつかみ得るかも知らぬが、何といつても夜だ。チラツ！　チラツ！　と、小さなあかりが可成に長い間目に映じた丈けで、何の印象も殘らない。

「鴨綠江だらうが、可成り廣い河のやうだね」

圓公は妻に向つてかうさゝやいた丈けである。

時間の都合と體の具合とで、平壤の「きいさん學校」などは是非見學したいと思つて、親戚に手紙まで出しておいたのだつたが、それも割愛するし、兼二浦の三菱製鐵所の友人を訪ねる約束も反古にしてしまつた。

鴨綠江を越えると體はもう朝鮮に入つてゐるのだが、梟ならぬ悲しさには何一つ見ることが出來ない。雲をつかむやうだとよくいふが、雲もつかむことが出來ない。徒らにどう〳〵といふ音丈けが自分の動いてゐることを感じさせるのみである。凉しい風の中に、目を閉ぢて頭の底を見つめて見るが、何の聯想も空想もうかばない。朝鮮に入つたといふ何の感じも起らない。視力によつて現

實の基礎をつくり上げて來たものには、聽力丈けでは殆んど、夢の世界をたどつてゐるも同樣である。

考へてゐる中に、朝鮮音樂が頭の奥の方で、うすぼんやりと響き出した。その昔いつか神田の靑年會館で見たことのある朝鮮の芝居が思ひ出される。哀愁をたゝへた胡弓の音、一種の琴のやうな大鼓のやうな大きな樂器、さうした音につれて、朝鮮特有の悠々たる風采の人物が眼の前に出て來る。うつとりとして見てゐる中に、圓公は自らいつか夢の中の人となつてしまつた。

夢うつゝ朝鮮に入る夜長かな

目がさめると、もう凉しい曉である。何となく親しみのあるやうな風景が軍窓に近づいてゐる。山、草、木、殆んど見なれたものゝやうである。松！　松！　久しく見なかつた松さへ到る處に見える。圓公は眼を見はつていつた。

「すつかり見なれたやうな景色だね」

「家だつて、何だか餘りちがつてゐないやうではありませんか」

彼の妻が答へた。汽車の中から見たのでは、入口の樣子が少し位ちがふといへばちがつてる丈けだ。自然の風物にしても滿洲の到る處で見たものよりか、むしろ日本の內地のそれに殆んど似たものである。

稻が！　稻が！

棉が！　棉が！

滿洲で見なかつた水田は、二人にとつて一層のしたしみを感じさせた。その畔路などを、例の圓突のやうな帽子をかぶつた男が、いかにものんきさうに、時々ひよつこり〳〵やつてゐる。

やつぱり繪で見た朝鮮だな！

ひよいと川緣を見ると、圓突帽子が五六人ばかり、腰を下ろすでもなく、立つでもなく、中腰をしてゐるのが目につく。

「はあ、あれを御覽よ、あれが話にきいた朝鮮風俗の一つだね。半日でも一日でも、川緣だとか丘だとかへ集つて、他愛もなく話しつゞけてゐるんだつて、」

「へえゝ、おや、あすこにも一組ゐますわね」

「成程ゐるね、」

「朝つぱらから何の話をしてるんでせう。」

「雜談なんだらうが、一日でも打續けてるといふから面白いねえ」

「つまり遊んでるんですね」

「さうらしい、一日十錢もあれば食つてゆけるといふんだからね」

「どうしてです」

「どうしてつて、玉蜀黍や瓜をかぢつたりして、飯を食ふことなんか餘りないさうだからね。現に

いつか家へ來た學生だつていつてたちやないか、半月働いたら、あとの半月は決して働かないで、その間に勉強するつて」

二人が食堂から出た頃には、もう大分暖になつてゐた。

四八

汽車が京城についたのは、何んでも八時か九時頃だつた。迎に來てくれてゐるだらうと思つた勘彌君――其顏の恰好がまるで役者の勘彌君そつくりであるので、圓公は平生から妻の從弟をさう呼んでゐた――の姿がなか〳〵見えない。

「小さいからかも知れないね」

見まはしてゐる中に、出口の處からチョコ〳〵とやつて來る小男がある。朝鮮人かと思つたら、矢張勘彌君だつた。大體の時間しかいつてやつてなかつたので、矢張疑つてゐたものらしい。

「B旅館から迎に來てる筈ですが、大連からはがきを出しておいたのだから」

「それぢや來てゐませう、一寸まつて下さい」

勘彌君が頻りにさがすが一向に分らない。仕方なしに自動車を傭つて出かけようとしてゐると、側で待つてゐる大形の自動車が宿の車である。車の方でも手さぐりに探してゐたものらしい。

「矢張舊式の法被か、提灯をさげてる方がいゝなあ、どこの紳士かと思ふやうな風をしてる運轉手ぢや、聞くわけにも行かないからねえ」

圓公は大きな聲でいつて笑つた。

「でも手さぐり同士でも、とう〳〵ぶつかるから面白いぢやありませんか」

勘彌君柄こそ小さいがなか〳〵氣の利いたことをいふ。

B旅館に來て見ると、近頃建て直したとかで、聞いたにまさつてなか〳〵上等だ。何でも一等旅館であるらしい。靜かな室をと要めて、一階の十疊に收つて、圓公はまづころりと横になつた。

午後になると宿の自動車を驅つて、簡單に一通りの見物旁々先づ總督を訪問する事にした。どうしても必ず見るべき秘苑を拜觀するには、相當な手續が入ることを、丁度來訪したS大學教授が言つて歸つたからである。

通りがけに先づ目についたのは、パゴダ公園といふのである。清正の像とか何とかゞあるといふ至つて小さい公園である。小さいけれどもか、小さいからか、兎に角朝鮮人で一杯である。彼等は

ぶらり〳〵して、一日そこで遊んでゐるのだといふ。一體朝鮮人の家で、一人や二人一日中ごろごろと遊んでないものはないといふことは、話にはきいてゐたことであつたが、今目のあたりに此の光景を見ると、例の川綠の光景と思ひ合せて、圓公は全く感心してしまつた。

「でも日本內地の人間だつて、ぶら〳〵と一日中公園をぶらついてゐる者があるぢやないですか」

「それはあります、ありますけど、朝鮮人のは本當にしよつちう遊んでゐるのらしいんです」

運轉手君が眞面目になつて答へる。

おゝ痛快な遊びの國民！

だが、一生をぶら〳〵と遊んで暮らす。これは決して朝鮮人だけではないやうだ。

人生實際に於て、仕事といひ得る仕事をしてゐる人間が抑もどれ丈けゐるのであるか。よし仕事といひ得る價値ある仕事でなくてもいゝ、せめて生きんが爲に爲さんとするに、何の仕事もなくして、食ふことも出來ないといふに至つては、遊んでゐて低度の生活に慣れてゐる朝鮮人よりも遙に

誤である。

瓜かぢりかぢりつかれて寢る子かな

悠々として鮮人の帽子歩むかな

眞白な衣重ねて暑さかな

白衣重ねて汗ともならぬ暑さかな

四九

全市を殆んど半周したと思ふほど走つて、ひよいと見ると總督邸の玄關に自動車は止つてゐる。旅順で關東長官をお役所に訪ねて失敗した圓公は、始から官邸の方に總督を訪ねて見たのだつたが折柄病氣臥床中だとある。わざ〳〵病人に面倒をかけるでもないと思つて、總督府を訪ふて秘書官に面會すべく、すぐに車を引かへさせた。

暫くすると、車は又しても切開いた斷崖に止められた。朝鮮神宮であるといふ。そこからは殆んど京城府全市を眼下に見ることが出來るが、惜しいことには町の平地からそこまでの通路が如何にも嶮しくて狹隘である。やがては金と人力とをかけて大改修を試みる豫定であるかも知れない。少くともその位の想像は、圓公にだつてつく位に道路の具合が面白くない。

圓公は眼下に全府の市街を見ながら數分間追想にふけるのであつた。東西こそまことに狹い都である。けれども何といつても、東半球に於ける古い國の一つの古都である。その古い國が、今は全く獨立の力を失つてしまつて、只とこしへに綠なる山河のみが、靜に昔の榮華の夢を物語つてゐるに過ぎない。

亡國の都：びれて秋暑き

秋風や亡國の都四顧にあり

豊臣秀吉、加藤清正等、等、等の色々な亡靈が、ひよつこり〳〵と頭を出して、不審さうな顏つきで圓公を見つめて居る。それからそれと朝鮮征伐の繪卷物が眼の前にひろげられてゆく。

秋風や朝鮮征伐の繪卷見ゆ

秋風や亡國の古都を語る山

それにつけても思ひ出されるのは、いつかの騷動の時にあつたといふエピソードである。日本人の溫情主義に高をくゝつた朝鮮人は、日本の鐵砲には彈丸が入つてゐない。全くの脅かしなのだ、といつて、日本の兵士が幾ら制しても騷いで仕方がない。そして果ては銃先に立つてふざけながら動かうともせぬ。閉口し切つた極に遂に引金は引かれた。數人の朝鮮人は將棋倒しになつてばたばたと仆れた。それからといふもの、朝鮮人は日本人の威力を認め、日本の政治に敬意を表するやうになつたといふことである。さうした話は本當の話であるかも知れないが、今や國亡びて食ふに食なき朝鮮人は、恐ろしい勢で日本の內地に向つて侵入し、日本人の職業を奪はうとして、有ゆる都市は勿論村落までも盛に脅かしつゝある。政治と外交と武力とに失敗した朝鮮人は、今や勞働力によつて日本人を脅かさうとしつゝあるのだ。

日本人の眼の覺めるのが早いか、朝鮮人の生活程度の高まるのが早いか、烈しい生活の戰が、極東の天地に見られる事になるのも遠からぬことかも知れない。さうだ、さういへば東京の市中でも晝の休み時間などに、木蔭を求めては、路上にべたりと寢ころんでゐる勞働者達は皆鮮人なのだぞ。

暑き日や路に晝寢の朝鮮人

五〇

總督府にゆくと、來てゐる筈の秘書官の姿が見えない。電話できいて貰つて見ると、床屋へいつてゐる最中だとある。圓公は已むなく首相秘書官からの紹介狀をおいて、秘苑拜觀に關する萬事を依賴して一應引下ることにした。

そこを出ると、裏に廻つて博物館をのぞいて見た。それほど澤山な陳列品はなかつたが、それでも腰と脚とが自由にならぬ上に、丁度風邪に罹つて九度の熱を出してゐた圓公には、一通り瞥見する丈けでも可成りの苦痛だつた。といつて折角見物の爲に大連から廻つて來て、これ位のことで宿屋に寢てゐるのも何だか間がぬけてゐる。「まゝよ、どうせ一度死にかけた身だ。」圓公は二日の間に命がけで京城を見る豫定を遂行した。

初秋や命がけで見る京城府

要するにどこへ行つても、市街はまさに整頓の半ばである。一切の古きものは捨てられて、悉くが新なるものに代らうとしてゐる。舊皇宮も取壞されつゝある。街路も取擴められつゝある。電車も出來たといふばかりだ。到る處まだ雜然混然として、大都市たるの美觀をそなへてゐない。中に燦然たる美觀を誇つてゐるものといへば、大理石造の總督府と二三の公設の建築丈けである。だが

圓公には却つてさうしたものは何の用もなかつた。彼にあつては、むしろ滅びゆかんとする朝鮮が問題であつた。再び永遠に見ることの出來ない姿が見たかつたのだ。

秋風や物皆廢れ行く京城
皇居半ばこぼたれて正に秋深き

五一

圓公はその晩非常な憧れをもつて、朝鮮歌舞伎といふのを見に出かけた。既に久しく京城に在つて、朝鮮の歌謠などを研究してゐる歌人市山氏の案内であつた。

圓公はその夏東京に於て、折柄滞在中の市山氏から、今日朝鮮に殘つてゐる舊劇に、春香傳といふのが只一つあるといふ話を聞いたことがあつた。その春香傳がのべつに上演されてゐるでもなからうが、朝鮮歌舞伎とあるからには、せめてその燒直しとか、幾分古めかしい劇でも上演されるのかと思つてゐたのであつたが、行つて見ると事實は全然豫想を裏切つてゐた。

成る程一時間半ばかりの間に、朝鮮特有の例の大きな、横長い太鼓のやうな樂器を持出しての歌劇といふよりも、一種の歌謠だけはきくことを得たが、その他は歌舞伎どころか、現代劇も現代劇、全くの茶番みたいなものに、淺草の玉乘りあたりで、その昔やつてゐたやうな、鐵棒體操だとかその他子供だましの曲藝ばかりである。

一切の物の近代化！　それは朝鮮娯樂に於ても免れぬことであるにしても、曲藝や鐵棒體操などを、朝鮮も京城の歌舞伎座といふものに於て、而も歌舞伎劇の名に於て見ようとは、圓公の全然豫想しない處であつた。

劇場に體操を見る夜長かな

朝鮮人を通じての市山氏の通譯によつて見ても、歌謠はせめてもの慰とするに足るもので、日本人の想像するやうな本當の歌舞伎などは、今は到底夢想だにすることが出來ないといふので、一同はいゝ頃に切り上げてしまつた。

それにつけても此歌舞伎座といふのは、二三百人ばかりを入るゝに至る小さい小屋で、多くはかうした處に一夜の歡を求めるよりも、日鮮兩民共に活動寫眞を追かけるのださうな。

さもあらう！　さもあらう！　そこに活動寫眞の世界的共通性があるのだ。

歸りがけに圓公が、自動車の中から觀察しつゝ、つく〳〵感じたことは、大通りからが一體に非常に淋しいといふことである。可成りに大きな通りであつても横町となると滅多に人が通らない。

圓公は京城に來ても、奉天に於けると同じやうな寂寥を感じながら妻に語つた。

「まるで町が死んでるやうだね」

「矢張東京に比べるからなんでせう？」

「それはさうかも知れない」

「すると、あなたの頭の方がくるつてるのですね」

留守の間に、總督府から明朝自動車を以て迎へにゆくと通知があつたときいて、圓公は何となく恐縮しないではゐられなかつた。

五二

翌朝約束の通り總督府から、K氏が案内役として旅館を訪れられたのは、丁度八時であつた。

圓公が女中から受取つた名刺には、總督府囑託兼大學講師とあつた。K氏なら圓公の説明役には丁度いゝだらうとあつて、わざ〳〵命ぜられて來たとの話である。圓公は聊か恐縮せざるを得なかつた。殊にK氏は總督府の生字引といはれる程の古老であり、殊に寶石類の鑑定などにかけては、素晴らしい頭と鑑識力とをもつてをられるといふ話である。圓公夫妻は差廻はされた自動車に同乘しながら、敬虔な態度でいろ〳〵の質問を貪ぼるやうに發するのであつたが、K氏は文字通りに、字引でも引くやうに、それからそれへとすら〳〵と明答を與へた。——が惜しいことには、圓公夫妻はもう二年前の話を殆んど忘れてしまつてゐる。幾らその際感心して聞いたことでも、今となつては殆んど覺えてゐない。只すうと、西から東へ、東から西へと、他愛もなく自動車を乘り廻した丈けであるやうな氣がする。勿體ないことである。惜しいことである。が、今は朧ろげな記憶をたどつてそれを追懷する外はない。——

自動車が先づ止まつたのは、宮城内の門の内であつた。そこにはもう總督府からの電話があつてお役人S氏が更に一行を案内してくれることになつて居た。

當り前なら、圓公夫妻の如きは、よし秘苑の拜觀は許されるとしても、自動車でこれを乘り廻はすなどいふことは、規定によつて絶對に許されない筈であつた。

處が自動車轉覆で負傷して、まだろく〳〵腰の自由のきかない身であるといふのが、幸か不幸か特別のお許しが出て、特に貴賓にのみ許されるときく自動車巡覽を許されることになつた。

圓公は特別なる優待に對して、心から恐懼しなければならなかつた。もしさうした優遇が與へられなかつたとしたら、圓公は始んど苑内の何處へも歩みを進めることが出來ない容態にあつたからである。

可成りに廣い庭園の間を、自動車は蜿々として廻りながら、奥へ〳〵と山を上つて進んだが、やがてぱたりと止まつた。

朝鮮人であるS氏は、先に自動車を下りて、K氏を導びいて崖路を下り始めた。その後に續いて行くことは、圓公にとつては殆んど命懸けのやうであつた。やがて彼は自動車を出はしたが、突つ立つた儘で暫く考へた。

秘苑の秘苑たる所以を知るのは、此處であると聞くと、折角これまで來て二三十間の崖路を下りて見ないといふのも、如何にも殘念である。彼は思ひ切つて倒れてもいゝつもりで、片手は杖によ

り、片手は妻の肩にもたれながら、よろ〳〵と坂路を下つた。下りて見ると苦みはそれほどでもなかつた。

盆地の平な所には、皇帝の爲に茶を煎るべき冷たい清水が、大地の底から滾々として湧き出てゝゐる。むくり〳〵と、靜な波紋が沸立つが如くに溢れ上つてゐる。試にコツプに掬んで見ると。舌端刺すが如くである。

傍には皇帝と皇后との爲に、別々に設けられた茅茸の亭がある。小砂まじりの清らかな地面には松の落葉がばら〳〵と散らばつて、靜かな松籟と共にさすがに幽邃の境である事を物語つてゐる。

K氏とS氏との間に、朝鮮語の會話が折々に交されてゐる。

ネー！　ネー！

といふS氏の重々しい肯づきの音が心地よく木魂にさえる。

蟬も鳴かず清水湧く音の靜かなる
湧く水の波紋につれて舞ふ落葉
今は昔茶を煎給へる清水かな
民いまだ掬むを許さぬ清水かな
砂の上にかそけく松の落葉かな
靈の蟲かそやかに鳴く秘苑かな

五三

S氏の物語によると、松茸も年々可成に收穫されて、お膳部の用を便ずるには足るといふことである。

再びくるり〳〵と、可成りに長い間、山姥ではないが、山又山を山巡りして、自動車がひよつこり出て來たのは、蓮池の傍である。圓公は一行に連れて、又よろり〳〵と池の廻りをめぐつた。池の彼方には何でも櫻の樹があつたやうだ。日本の櫻とは少しく花がちがふやうな話だつたかと思ふ。

頭の上を見ると、妙な實のやうなものがなつたつがのやうな樹がある。きいて見ると白檀だとある。久しく名を聞いた丈けで、樹の正體を知らなかつたので、S氏に頼んで五すばかりの小枝を折つて貰つた。

側を見ると、どこかの女學校の生徒がえつさ〳〵と階段を上つて、廟のやうなものに參詣してゐる。この邊りまでは、許を願ふと、普通の人間どもでも入苑を許されるのだとある。

自動車が再び溫室に向つて走りつゝある途中であつた。K氏は聲を細めて圓公にいつた。

「妙なことを申すやうですが、かうして案内して貰ふと、一寸したお禮を包んで渡すことになつてゐるのですが」

圓公は矢張り小さい聲できいた。

「でも何だかお役人に對して失禮ではないでせうか」
「日本人の頭には、ちつとをかしくきこえますが、朝鮮ではそれが例になつてをり、何だか一種の禮儀見たいなものですから、それは御心配ありません。」
「左樣でございますか、それでは恐入りますが、あなたから宜敷お計らひが願へますでせうか」
「えゝそれはようございますとも」
圓公は妻に差圖をして一圓紙幣を紙に包ませた。
「こんなことでよろしいのでせうか」
「えゝこれで結構ですとも」
紙包は溫室の前でS氏の手に握られてゐた。彼がちよつと、ニヤリとしたのを見ると、圓公達はほつとした。そして何だか外國式だなと思つた。
溫室見物を省略して、門の處でS氏に別れて苑外に出ると、廣場では丁度小學生が運動會をやつてゐる所であつた。
面白いことには、大人の朝鮮人と來ると、上着から袴までが、眞白の通しであるが、小學生の中には赤だの靑だの黃だの、色とり〴〵の袴をつけたのがある。
「あれはいゝですね、スカートを色物にしたのは、非常にいゝですね。あれなら第一經濟的ですね」
「全くです、あゝしろといつていくら勸めても、なか〳〵いふ事をきゝませんでね。習慣といふも

のは恐しいものですね」
「へえ、さうですか、子供は昔からあゝして色物を用ひてをりますのですか」
「いえ〳〵、小學校でもしきりに勸めるのでほつり〳〵あゝやり出したのです。大人で着てるのはまあ敎師位のものです」
K氏の說明に對して圓公は肯きながら尋ねた。
「でもよくあんなに白い着物を皆着てをりますね。隨分下級の勞働者と見えるものでも、あまり汚れてないやうなのを着てゐるではありませんか。」
「いや、さうでもありません。けれども朝鮮の女は、可哀さうです。全くあの白衣の洗濯に殆んど一日中かゝり切つてをりますからね。」
「さうですかね、隨分不經濟な話ですね。それにしても朝鮮の白服と支那の靑服とでは、全く國民性が顯はれてゐるやうに見えるのも面白いとも思ひますが……。」
「いや一見似て非なるものといふのは全くこの事でせうなあ」
自動車の中には笑ひ聲が高まつた。

運動會五色のスカート走るかな
美しきスカートが先づ轉びけり

自動車は東に向つて、可成りに長い間郊外を走りつゞけてゐる。けれども大連あたりとちがつて

路傍に食ひ物を賣つてゐるものもゐなければ、何かをかぢりながら歩く一人の朝鮮人も見えないのは、圓公に取つてはむしろ物淋しいやうな氣がした。玉蜀黍でもかぢつてるのがゐると、一句出でもするがなあと思つた。

五四

自動車はいつか東大門外の郊外に出てゐた。圓公は何だか東京の郊外に出て、人家のまばらな田舍道をドライヴしてゐるやうな氣がした。ひよいと右手を見ると、田圃の中に色々な旗が立つて、大分に人だかりがしてゐる。處々に馬がつないである處から考へると競馬があるらしい。

嘗てハルビンに於て、日本人が競馬を興行せんとした時、入場せんとする凡ての支那人に對して憲兵が盛に干渉したが爲に、遂に競馬がおじやんになつたといふ話を思ひ出して、圓公はさすがに支配權といふものゝ威力を思はずにはゐられなかつた。

左手の山路から出て來る小學生の列を避けつゝ、車はその邊りから左に折れて、暫らくして森の中に止まつた。

其處には朝鮮特有の濃厚な色彩と、可成りにグロテスクな形態とをそなへた、一すした建物があつた。朝鮮皇室の金谷廟であるといふ。

「これが廟ですか、墓はどこにありますか」

「あれです、あの一番後ろにあるのが墓です」

「へえ、あれが皇帝の陵墓ですか」

圓公は奉天に於ける北陵の壯大な規模を思ひやつて、如何にその小規模であるかを驚かずにはゐられなかつた。

素朴であるとか、瀟洒であるとかいふのとは趣を異にして、グロテスクではあるが、如何にも小造りである。堂々といふやうな形容詞そこどけである。如何にも衰亡國の陵墓を思はずにはゐられない淋しさと、物足らなさとがしみ〴〵と味はれるのである。殊に廟へ入る門さへもあまりにあつけないものである。場所といつても、如何にもあつさりしたものである。通路から一町も入らない小高い麓に他愛もなく設けられてゐるのである。

圓公はきよとんとして、一句も思ひつかなかつた。徒らに、へえ！　〳〵！　といつてあきれてゐた。

車はすぐに引かへした。大方半ば頃まで歸つたと思ふ頃、バラ〳〵と大つぶの雨がやつて來た。

「おや、夕立だな、いい時引上げたな」

K氏が獨語のやうにいつた。かういふ時にこそ、自動車のお蔭はしみ〴〵と感じられるのである。ひよつこり〳〵と、彌次喜太流でないにしても、人力車なんかでやるのだつたら、歸り路は大變だつたのである。京城の町に近づくに從つて雨は愈々烈しくなつた。八月の初め東京を立つてから大

連についた日と、十月始の此日とで、旅の間たつた二度しか雨を見ない圓公にとつては、此の雨は寧ろ珍らしい物であつた。殊に此の日のにはつく〴〵と大陸性が味はれるやうに思はれた。何といふ凄じい驟雨性の猛烈な夕立だ。悠々自動車を驅つてゐる圓公には、却て心地よくさへ思はれた。

家も人も流れよと降る驟雨かな

電車まで洗ひ流せと驟雨かな

芋のやうな夕立が降る京城府

烈しい夕立の中を、話をするでもなく、ぞべ〳〵とゆく朝鮮人の姿は面白いもの〻一つであつた

そべ〳〵と夕立をゆく白衣かな

宿に歸ると雨はからりと止んでゐた。

五五

K氏と夕飯をやつてゐる處へ、市山氏が訪れて來た。K氏の支那放浪の懐舊談が出た——。

何でも若い時、支那の內地にゐた頃のことである。藪醫者もやつてゐたので、數里の路を馬をもつて迎へられて、出鱈目な診察をしたに拘らず、死にかゝつてゐる病人が治つたといふので、まるで神のやうにさへ思はれた。そしてそのあとで方々から迎へに來られて閉口したことがある。要するに凡ては信ずるにあるといふやな話をK氏すがると、市山氏は圓公の腰の痛について、例の批杷

葉液の功果をかつぎ出した。東京でG雜誌とかゞうんとかついだので、その液を京城にもつて來て非常に流行してる友人の醫者があるから試みて見よといふのだ。物は試しといふので、市山氏は直ぐに電話で醫者を呼んだ。その液といふのは、香氣から見ると青酸か何かゞはいつてゐるやうだ。存外いゝ香りである。それを布片につけては、溫めながら患部を押へて貰つて見ると、圓公は何だかすうとして、もう直つたやうな氣持になつて來た。

「これはいゝ！　これは利きさうだ」

圓公はうれしい心地になつて醫師を歸した。そして二三回試みでもすると、實際奇蹟的に全治でもしさうな氣がした。K氏も市山氏も眼を丸くして喜んだり腹をかゝへたりした。

その內に例の松の實の話が出た。朝鮮特產の五葉松の實で、色々な功德が述べ立てられた。そして總督府の御用商人から買へば、三分の一位の値で買へるといふので、電話はすぐにそこへかけられた。

一夜が賑かな笑の中に更けてゆく。

ふとK氏が圓公の妻に向つていつた。

「奧樣、失禮ですが、一寸そのお指環を拜見いたしませうか。」

「これでございますか、これはほんのつまらぬものでございます。」

彼女が躊躇してゐると、

「いゝえ、大變けつこうなものゝ様です一寸拜見させて下さいませ」
そして氏は受けとるなりいつた。
「立派なダイヤでございますな、大變立派なものです。」
「此黒ダイヤは大連で買ひましたのですが、本ものでございませうか」
彼女は別の紙包のを差出した。
「ゑゝ本物でございますとも、黒ダイヤは只今では大變安くなりましたからね。その以前の十分の一もしますまい。」
「それから恐れ入りますが、此翡翠は本物でございませうか」
彼女は今はもう安心して進んで尋ねるのであつた。K氏はそれを手にとるなり、
「ゑゝ本物でございますとも、支那の立派な商人からお買ひになれば決して間違はありません。こんな物を練物でこしらへたりしては却つて損が行きます。それでも日本の商人だと安心は出來ませんけどね」
寶石鑑定の通人であるK氏が、まるで支那の商人と同じやうなこととをいつてゐる。けれども氏の説明をきくと、彼女はすつかり安心して翡翠の帶留めをしまひ込んだ。

五六

翌朝圓公夫妻は朝の急行列車で釜山に向つて出發した。停車場には勘彌君一族と、市山君とその友人など、六七人が見送つてゐた。殊に圓公が恐縮したのはK氏が記念品までもつて送られたことであつた。記念品と云ふのは例の先皇帝附であつたS氏の姉にあたる人とかゞ、皇帝から貰つたといふ曰く附きの花瓶風の水入れである。K氏は丁重に之を圓公に贈つたのであつた。大抵の紀念品に對して、それほどのありがた味を感じない圓公も、K氏の好意に對しては衷心から敬意を表しないではゐられなかつた。
汽車が南に進むにつれて、風光はいよ〳〵日本の内地のそれに似て來るやうに思はれた。汽車の窓から折々外をながめた圓公は、小川の邊りにしやがんでゐる小娘などを見ると妻にいつた。
「あれごらん、やつてる〳〵。成程あゝして毎日白衣の洗濯をしてるんだねえ」
考へて見ると、清淨を好むといふことから始まつたのか、それとも染めることに困るとか、簡單を求めたことから始まつたのかも知れぬが、兎にも角にも今となつては、容易にぬけられない習慣であらうことを思ふと、いつも〳〵白衣の洗濯にばかり沒頭してゐる朝鮮婦人は、何となく氣の毒でならぬやうに圓公の妻は思つた。
「何だか可哀想なやうですね」
「慣れて見ればそれほどにはないかも知らないが、隨分いやなことだらうね。第一骨が折れるだらうからね」

「あの人達はしやぼんだつて、あまりつかひもしないでせうからね」
汽車が釜山についたのは、もう暗くなつてからのことであつた。夜霧の深くとぢこめた暗には、市島女史が母堂と共に迎へてゐた。
丁度その朝京城を立つ時、圓公は市島氏に電報を打つて、海上の模様を調べておいてもらひたいといつてやつたのだつた。海が靜かであれば、そのまゝ下關に直航するが、もし荒れるやうだつたら、釜山か東萊溫泉に一二泊する豫定であつたからである。市島氏の取調によると海は大丈夫といふのである。それをきくと、名殘を惜みながら、圓公はすぐに聯絡船に乘込んだ。
船は思つたより大きいが、荷物が少いせいか馬鹿に尻尾が浮上つてゐる。大海に出るや否や、何だか、ふわり〳〵やり出しはせぬかといふ不安がないでもない。
まもなく船はすべるやうに暗の海に向つた。市島氏母子が振つてゐるハンカチがいつまでも〳〵薄暗にほの白く光つてゐた。
「三月餘りの間、さま〴〵な運命に出遇つたりして、さまよひつゞけた亞細亞大陸よ、いつまでも思ひ出の種として、私の頭の底から離れないであらう大陸よ、さらば！〳〵！」
圓公の頭の中で物いはぬ聲がした。
埠頭の燈火はもう朧ろげに夢の中のやうにちらついてゐる。波の音は可成りに烈しく耳を打つて來る。尻の輕さうな船は果してふわり〳〵やり出した。

「こいつはいけない！」
圓公は念の爲めに米國製の船醉藥を飲んだ。そして殘りの半分を妻に分けた。大連行の際に私かに飲んで功果があつたやうに思つたからである。そして何よりも眠るが第一！ と、さつさと床の中にもぐり込んだ。
いつもはなか〳〵眠りつかれない圓公も、今夜はぢきに寢込んだ。そしてうまいことには、藥のせいかぐつすり寢込んだものらしい。
眼がさめて見るともう朝である。そして今にも船は下の關につかうといふ處である。
「これは驚いた。まご〳〵してゐると泡を食ふぞ」
二人はあたふたと上陸の用意をした。そして二十何年か前に、二人が結婚して、萩への山路を厭つて、わざ〳〵下の關から船によつた時のことを思ひ出して語り合つた。
「あの時は、下の關を出る頃には靜な夜だつたがねえ」
「一等が足らないので、私はいゝ氣持になつて甲板に寢てゐましたつけ」
「眼がさめたら、響灘の沖で恐ろしく荒れてゐたね」
「澤山甲板に寢てゐた人が一人もゐなくなつて、私し眼がさめた時には、もう船室へ行くことも出來ないで、いくら呼んだつてちつともきこへないし、ほんとに死ぬ思ひで泣きましたわ」
「昨夕はほんとに靜かでよかつたね」

「全く今まで何も知らないで寢込んでゐましたわ」
京城で勘彌君に作つてもらつた四尺の樫の棒を命の親として、圓公はひよこり〳〵と甲板を下りて、プラツトホームに出た。
「やあ！　日本に歸つたな！　矢張り日本だな！」
圓公は心地よく呼んだ。
「もうこれまで來れば、お家へ歸つたも同じですわねえ」
迎への務を果した彼の妻も喜んでいつた。

夕霧にハンカチ仄見ゆる埠頭かな
暗の海に船すべり出る埠頭かな
目が覺めて見かへるや霧の響灘
朝風や見かへる霧の玄海洋
玄海の思出遠き夜長かな
海戰の思出もなき夜長かな
ぐつすりと寢て渡りけり月の日本海
朝霧や杖ついて日本の土を踏む

富士五湖廻

一

來年は〳〵といつて、四五年間妻をまたせておいたのだが、やつと仕事が一段落ついて、本も出たので、今年こそはといつて、八月の始に天氣の定つたのを見屆けて腰をあげる。
市内の何處の驛からでも連絡切符を賣るといふので、連絡とあれば車や舟などに乘るにも便利だらうと思つて、わざと自動車の日歸り旅行をさけて十時過に新宿から何處やら行きの汽車に乘る。始めは電車でなくて、汽車に乘つたつもりだつたが、八王子あたりで氣がついて見ると、機關車でなくて矢倉のやうなパンタグラフとやらいふものが車の背についてゐる。世の中はいつの間にやら此處にも變つてゐることに氣づく。
大月驛で小さい電車に乘かへる。此丈けの人間が此の一車に乘るのだとすると荷物同然だなあと悲觀してゐると、幸にして車を二輛連結した。成るほど田舍にしては分つたことをやりをるわいと思つてる中に、車掌さんが車の中で、富士登山者の爲に自動車券を賣らうとして、散々聲をからして說明する。二度も說明をやつたが、一人も買手がない。お役目御苦勞千萬だ。

一時間ばかりすると有名な吉田驛といふのについた。富士山は胸から上を雲に隠して、恥しさうに腰から下を右手に見せてゐる。

驛を出るとバスが待つてゐる。下山の先客で殆んどつまつてゐる中へやつと腰を下ろす。砂ぼこりの原つぱを二十分ばかり一散に走る。河口湖の側につく。

車を下りて發動機船に乘る。暫くたつてからポツポ〳〵と走り出す。文字通り鏡のやうな湖だ。船頭が、何様の別荘だ、何某の別邸だ、とブルジョアの別荘ばかり、あれとれと問はず語りに廣告をする。一寸も面白くない。それよりか水の深さは幾らあるんだいと私がきく。七八十尺あるといふ。魚がとれるかときくと、捕れるといふ。あんまり捕れさうもない顔付だ。七八十尺の深さでは網も糸も怪しいやうに思はれる。やがて湖心を見ると飯櫃見たいなものがうかんでゐる。船客の一人が昨夕、船津の町で祭があつたのだといふ。さういへばボートに乘つた處が船津といつて、あの飯櫃見たいなものには面白いロマンスがあるのだ。いつか自分が年中行事に書いたことがあつたあれはこの町だつたかなあと薄ぼんやりと記憶を呼起す——

いやさういへば吉田には鎭火祭といふ見事なお祭が、八月の二十日頃にあつたつけと、自分の記憶の悪くなつたことを棚にあげて、別荘の話よりか、さうした話でも何故船頭はしないのだと、とんでもない不平が頭に湧き上る。

船が曲らうとする頃に、あれが煙草の「敷島」の包装に印刷された松のモデルだと船頭がいふ。かういふ風では都人を田舎に引つける資格はない。立派な傳説や面白いお祭の話なんか氣がつかないで、煙草の繪のモデルや、別荘の廣告なんかが何の詩心を旅人に起させるのだ。

二

ボートから上陸すると自動車が二三臺待つてゐる。これは感心な連絡だと思つてさて乘らうとすると、連絡切符の客の乘る自動車はまだ來ぬといふ。何時來るかときけば、何時か分らぬといふ。そして二臺だけは、連絡切符をもたない客をのせてさつさと先に出かけてしまふ。これだからいけない。何の割引だ、何の連絡だと例によつて不平の蟲が愈々頭をあげかけて來ると、乘合でない〻自動車が、連絡切符の方はこれに乘れといふ。取殘されては一大事と、妻と二人に今一人の地方人と、三人で仲よく座を占める。走るわ〳〵、凹凸甚だしい坂路を、命がけで走る。富士はいつの間にか左に見えてゐる。

一時間も走つた頃に、風穴を見るかと運轉手がいふ。見ても善ければと答へると、サービスとして待つてやるといふ。これはまた有難いサービスかな。東京だつたら、一寸見て來る間に待ち賃一圓も取られさうなのを、只のサービスで見せてやるといふ。然も案内料は僅かに五錢だ。天然記

念物として、文部省が指定してゐる富士の風穴の一つ。大に見ようと思つて、他の客の群れに從つて、ぞろ〳〵と森林に入込む。路傍の茶屋から左へ一丁半もはいると、小さな小屋がある。小屋の中にはいると、既にひやり〳〵と地獄から來るやうな風が吹いて來る。案内者から蠟燭をもらつてどそり〳〵と穴を下りてゆく。一歩一歩下るにつれてぐん〴〵と濕度が下つて、背中がしびれるやうだ。大きな氷柱が左右に幾つとなく林立してゐる。まど〳〵してゐると體が凍結してしまひさうだ。それほど地下深く下りてはゐないのに此寒さだ。なるほど普通の穴とちがつて、風穴だからだな。理學を考へて見る。頭が暑くなりさうだ。折角のいゝ心地が駄目になりさうなので考へることをやめて一行について奥深く進む。自分の蠟燭よりは他人の蠟燭の光の方が遙に自分の役に立つ。燈臺もと暗しといふのがこれだなといひながら、同乘の一客が持つてやらうといふ好意を快く感謝しながら、蠟燭をもつてもらつて、いゝ頃にして穴を出る。氷柱があんなに出來てゐて、あんな溫度なのに、歩道には水がぴちや〳〵してるといふのは妙だなと思ひながら愈々穴を出る。まるで煮え湯の中へ飛込んだやうだ。外氣にふれると、目鏡がさつと眞暗に曇る。成る程地獄と極樂の境はほんの一すのことだと思ふ。

風穴に下れば眞夏眞晝間の身も心も凍らんとする
蠟燭を片手に立てば風穴の地獄の暗に氷柱光れり

呼びかはす聲のみ立ちて人顔のほのかに見ゆる富士の風穴
風穴を出れば目鏡くもらひて煮え湯の中に立てる心地す
これやこれわが住む土の上かやと目鏡とりて見る風穴の外

千何百年前とかに噴火したといふ富士山の吐き出したラバの堆積の、うまく埋れなかつた鼻の孔とか耳の孔のやうなものかも知れないが、面白いものを見つけ出したものだ。そしてそこに休息所を設けてゐるたつた一軒の茶屋の冬季の生活は、人間界を離れた風變りのものかも知れない。その風變りな冬籠の生活を送るべく、夏の間の風穴案内でかせぎためる五錢づゝの料金は、安いけれども年中には相當の額に上るであらう。江の島の洞窟などの「蠟燭代思召」といつて、案内もせずに五錢十錢とつて、冷たくも面白くもないものに比べると頗る感じがいゝ。

三

バスはどん〴〵と樹海を下りてゆく。樹海といふのは山から見ると樹の海の如く見える樹林につけた名ださうな。その樹海をなす樹木そのものが、悉く噴出されたラバの上に繁茂したものだから面白い。樹なんど生えさうもないラバも、幾百年とたつ中には、砂をたゝへ苔を生じて、風の助をかりて、樹木の種子をどこからか送られて、今日の樹海をつくり出したのだ。點滴石を穿つのと等

しく、自然の仕事は間斷なき努力であることを敎へられる

いつか精進湖の一角につく。河口湖で上陸地を長濱に求めると、今一つ西湖を横斷するのであるらしいが、それは連絡切符のコースにははいつてゐないのだ。

精進湖の次に本栖湖といふのがある。それにゆくには、定期のバスをまてば、十錢かの切符がついてるのだが、それでは二時間もまたねばならぬといふ。その儘乘來りの自動車だと二人で一圓ほしいといふ。十分ばかりの往復に一圓は東京の圓タクより高い。だが仕方ないまゝに奮發して行つて來る。只百七十尺とかの深さがあるといふ可成りに大きな湖水をのぞいて來る丈けだ。行つて見ないと、物足らぬやうだが、見て來ると一圓はおろか十錢も勿體ない。

兎に角これで三湖は見たのだから、歸りたければ、此儘歸り路に山中湖を見て裾野を通つて御殿場へ出るのだが、それではまことにつまらないものである。評判の五湖廻りも名物のあつけなさほどもない。河口湖の横斷と別莊の紹介と、風穴とラバ、それと腰から下の富士、頭に殘るものといへば只これ丈けである。これでは一人往復七圓の金は高い。むしろ寢てゐて鰻丼でも食つた方がよささうだ。一日で自動車で五湖廻りをする人は、只自動車で疲勞を買ひに來る丈に終るのではないかと思つたが、果してさうであるらしい。どうしても此儘は歸れない。一泊して〻豫定通りに富士の麓でも滿喫するのが衆の得たものだらう。かう思つて精進湖を渡らうとすると、一會社の營業で

定期船なら一人の賃錢二十錢だが、臨時の借切り船は一圓五十錢だといふ。だがツーリスト・ビューローの連絡切符をもつてゐれば、臨時でも二十錢で向岸の旅館地帶へつけるといふ。如何にも人を食つた話である。何とかして財布の紐を解かせ、財布の中へ腕を押込んでつかみ出さうといふやり方である。だん〻〻値切ると一人四十錢、二人で八十錢までにまけるといふ。相談一決してさてボートに乘ると、發動機が動かない。二十分待つても、三十分もまつても、船は知らぬ顏をしてゐる。怒るよりも可笑しくなる。如何にも醜態の丸出しである。かうした調子で四方の客が呼べると思つてゐる地方人の頭は如何にも遲れたものである。廢物になつた墨田川の一錢蒸汽をうまく湖水にもつて來て運轉してゐるのはいゝ思ひ付きだが、今年中には陸路を自動車で廻れるやうになるといふから、さぞ舟會社の重役連中も頭痛がし出すことだらう。

四

精進湖畔――富士を眼の前にして宿泊するには最も好適地である此湖畔に、宿屋が五六軒あるが、三軒ばかりは要するに一軒の經營で結局三軒の宿である。茶代は廢止といふ話も有るらしいが、出せば幾らでも辭しないといふやり方で、要するに何れも餘り淸潔でないのが氣持を引きつけない。高くとも安くとも泊らせるといふ兩天秤が、吾々にはいゝ感じを與へない。何にしても五月から十月一杯

だけしか營業が出來ないといふので、學生でも何でも、客でさへあればといふ大衆主義が普通で、少し離れた精進ホテルだけは一年中營業をしてゐるといふ。

旅館にはいつて見ると、その多くは二町歩位の平地に奥まつて散在してゐる。外には左手の村に向つて進む湖岸に一軒ある。何とかいふ此一村が、要するに富士山麓の湖水を抱いてゐるのだ。そして天氣の具合では、富士の逆姿が湖心にふうはりと浮ぶといふのである。富士を目近く見るには、成る程此村此湖畔に超ゆるものはなさゝうに思へる。此日は遂に富士の胸から上を見ることが出來ないで日が暮れてしまつた。暮れるにつれて靄はすつかり富士山を足元まで包んでしまつて、明日は雨にでもなるのかしらと怪ませる位だつた。

夜になつて湖畔に出て見ると、原つばの到る處にチラ〳〵と燈火が見える。男女の學生連がキャンピングをやつてゐるのだ。まさかの時には旅館あり、側に清冽な水あり、殆んど致はゐないし、土地は乾燥してゐる。草地ではある。絶好の野營地ではあるらしいが、汚物の始末は充分にゆくか知らとこれだけは、他人事ならず心配になる。即景三句。

キャンプ〳〵呼交はしつゝ歌ひけり

歌ひつかれてキャンプのあかり消えにけり

カンテラの酒買ひに出るキャンプ哉

路傍に佇ずんでゐると、村のお婆さん達が暗の中を挨拶をして通つてゆく。かうした素なほな氣持のいゝ地ではある。

路ばたにたゝずむ知らぬ旅人に聲かけてゆく村の人かも

十時を過ぎると定期のボートの交通もたえてしまつて、五六軒しかない湖畔の村はひそまり返り、きり〴〵すの聲ばかりが徒らにしげくきこえ出す。

湖のほとりの家は皆いねてきり〴〵すばかり鳴きしきるかな

折々天地をゆるがして、夜も轟き渡るのは、自動車道を開かんが爲の隧道工事の爆彈の響である。その音が響き渡つたあとの靜けさは、やがて湖の漣を熟睡へとさそつてゆく。

湖畔に立つてゐる小高い何とか山は、四周の展望に此上なくよいから、馬か駕籠によつて上つて見ろと、宿の主婦さんから盛にすゝめられたが、馬は危險だし駕籠はあまりに古めかしい上に値段が高いし、徒歩で上るには、一里近い山路は聊か物過ぎてゐる。丈夫でもない妻の希望に、同意せずして落ついてゐることにする。

電燈がつき出す頃から、盛んに色んな蟲が集つて來る。そしてそれが目の先鼻の先を飛び廻つて、とてもぢつとしてゐることは出來ない。夜更けをぼかんとしてゐようとした私はがつかりした。

窓あけよと蛾の群れて來る夜半かな

蛾の群の障子打つ音に夜更けたり

五

轉寢には丁度いゝ温度ながら、障子を打つ蛾の音に詩想を妨げられて床に入る。

一眠りしたと思ふと「お客様、富士山が見えます〳〵」といふおかみさんの聲が、耳元でけたゝましく響く。驚いて飛起きて見る。五時だ！

首の邊りに手巾でも卷いたやうな富士山が、正に目の前に素裸の雄姿をさらけ出してゐる。呼べば答へさうな鼻先である。誠に偉大なる存在である。黒ずんだ靈峰の堂々たる姿を目のあたりに見つめた私は、暫くして「大きいなあ！」と叫んだ。

富士が見ゆ富士が見ゆると起されてばねの如くに刎ね起きにけり

富士見ゆと呼ばれて緣に立ちにけり目をこすりつゝ午前正五時

刎ね起きて窓にし立てば大いなる素裸の富士目の前にあり

まだあけぬあしたの空に默し立つ富士仰ぎつゝをろがみゐたり

薄白き雲のみ空を背にしてさやかに立てり大いなる富士

大いなる富士の姿の黒ぐろと晴れたる空にさやに立てるも

大いなる富士黒ずみて目の前に默々として立ちてゐるかも

眞黒き素裸の富士青ずみて晴れたる朝の空に立てるも

見れどもあかぬ富士の姿をながめつゝ番頭氏の腕をかりて湖心にボートを浮べる。湖の水が年に一尺づゝも減じて、水路が次第に塞つてゆくことを、彼は頻りに物語るのも無理はない。湖底から到る處にラバの晴礁が飛出して、これまでボートの進められた所に、段々行けなくなることを日々のやうに彼は經驗してゐるからである。富士の噴火と共に出來たのか、噴火したから出來たのか、それからそれと湖底をつないでゐさうな富士五湖は、本當に年々深さを減ずることを頻りに傳へてゐるが、或は何時の日にか此等の湖水がから〳〵になつてしまふことなきを何人が保證し得るものがあらう。だが、そんな時はまだ百年や二百年では來ないだらうから、湖畔の人々も安心してよからう。

六

一泊したことが五湖廻りにどれ丈けか大きな意義を與へたことを喜びながら、十時過歸途に上る。

バスは昨日來た路を陸路吉田驛までまつしぐらに逆に進む。富士はもう胸から上の方をヴェールに包んで折々顔を出すに過ぎない。

吉田驛からは別のコースを取つて、山中湖畔を經て、一路須走に向つて、裾野の下降を續ける。一

望幾里の裾野を眼下に見下ろしつゝ、既に秋草の咲盛つてゐる山路を左に右にくるり〳〵と廻りつゝ遠く駿河灣あたりまでをながめながら、見る〳〵須走口につく。

須走や金剛杖の鬼の列

此處には既に、汽車に遲れるのを恨みつゝ、バスを待ちわびてゐる富士登山者が二三十人もゐた。私達のバスが着くと、一同はどや〳〵と乘込んだが、勿論收容し切れる筈もない。滿々員を積み込んで出た後で、新に其處から一臺が仕立てゝ出されるのである。此等の人々の爲に、立派な待期バスが二臺も用意されてゐるのに、私達のバスの來るのをまたないで、どうして出されないのであらう。乘る人も乘せる人も、誠にのんびりしたものである。乘る人はそのくせ腹ではやきもきしてゐるに——

四時半バスが御殿場驛に着くと、臨時列車がやつて來て、私達を樂々と吸ひ込んだ。考へて見ると御殿場廻りは一度で澤山だ。時間と金との浪費である。二度目からの五湖めぐりは、連絡のない自由な切符で、甲州大月を經て吉田口へ出で山中湖なんか見るよりも、再び同じ路を逆行するに限る。費用の點からも時間その他色んな點から、その方がずつと愉快にやれるからだ。

來ん年は來ん年はと妻に誓ひける五湖を廻りてほつかりしたり

期待したほどもない五湖廻りではあつたが、それでも精進湖一泊の富士展望は忘れられない印象である。五湖廻りなんかどうでも、一泊旅行なら何度してもいゝと思ふ。

雷に追はれて

二千貫の書を公にして、頭のつかれを休めるべく、八月の初を別所溫泉に出かける。宿を和泉屋といふ。食事がすむと三階の大廣間に室換をして貰ふ。

その夜は非常に暑くて寢苦しんでゐると、いつか隣室の夫婦者としては怪しまれる客が、帳場へ電話をかける、巡査が來るして、五十圓の蓙口がなくなつたといつて、うつかりすると、私達に疑でもかけさうだつたが、宿のおかみさんの劍幕が強くて、遂に話は一先づ有耶無耶にすんだやうだ。

泥棒と誤られかけて旅の夜の暑き

翌朝も警官が出つ入りつした。隣の客は危く詐僞扱ひにされたやうだ。私達は頗る安心した。

泥棒の疑晴れて朝涼し

ふと浴場から歸つて來た妻は、一町許はなれた豚小舍の火事を發見して怒鳴り立てた。「泥棒騒ぎ、火事騒ぎ、今度は何事だらう」妻はかういつて笑つてゐた。

近所の觀音境内で、樂隊の音が賑かなので行つて見ると、淋しげな猿芝居である。小舍代も出さうもない入りである。翌日のお祭は大夕立で臺なしである。猿芝居は遂にみじめな結果に終つてし

まつた。涙なしには聽けぬ話だ。

芝居する猿が蕾猴の祭かな

夕立や雨を見てゐる猿芝居

觀音は北向觀音といつて、長野の南向山善光寺と對するもので、維茂將軍が戸隱山鬼女退治の際、觀音が向をかへて助けたと傳へてゐる。隣の不動堂では坊さんが太鼓を打ながら、物凄く護摩をたいてゐる。健康も衛生もあつたものではない。信仰ほど物凄いものはない。

命かけて護摩たく僧の暑さかな

翌朝は十町餘もある「本朝緣結大神」に參詣する。路傍には百日紅が盛りである。

百日紅の炎えて朝霧晴れかゝる

覺めがての梟鳴いて朝涼し

蔵の常樂寺は北向觀音の別當で、二人の若僧は此寺から毎朝觀音にお勤に行くのである。寺の奥には國寶多寶塔がある。

毎日午後になると烈しい夕立があつた。夕立に濡れながら、毎日のやうに、宿を求めては斷はれて歸る四五十人の客の姿が、氣の毒でならなかつた。大廣間は私達二人には勿體なかつたが、夜の火取蟲には少からず困らされた。

あけ放つ大いなる室をうつろなる風いたづらに吹きぬけてゆく

風涼し三階の廣間吹ぬけて

一匹の蟲溫泉の宿を占領す

溫泉の町の夜はさすがに賑かである。賑かな女子供の笑聲の中に、いつ暮れるともなく暮れて、いつ明けるともなく明けてゆく、

溫泉の町の暮るゝともなく明けにけり

溫泉の町の沸きかへる夜の涼みかな

溫泉の町や物皆にほふ夕涼み

安樂寺は七堂伽藍を殘してゐる曹洞宗の巨刹で、開山樵谷禪師と幼牛禪師の木像は國寶に指定されて博物館に移されてゐるといふ。四層八角の古塔も國寶である。百疋石は天然紀念物にされてゐるが、遂にその姿を見出せなかつた。

歸京の前日には十五年の昔の旅を偲ふべく、善光寺に詣でた。そして汗をふき〳〵へと〳〵になつて刈萱堂にさへ上つた。堂から見下ろすと、狹苦しく建てられた町の姿があまりにもあさましくてならなかつた。何故もつとゆつたりと、廣々として自然を樂みながら、人間は住まうとしないのであらうとしみ〴〵と思はれた。

見下ろせば人間の世の暑さかな

汗ふきふき登るや因果の刈萱堂

空模様が急に怪しくなつて、雷鳴さへそへて來た。私達夫妻は下駄の欠けるのも忘れて急坂をかけ下つた。

雷に追はれて涼しく急坂下りけり

雷は遂に空鳴に終つてしまつた。別所に歸つたのはもう暮に近かつた。（昭和一四、八月）

近江八景

一

京都で開かれた藝術學會へ出席の序でに、妻を促して近江八景廻りに出かける。宿から目と鼻の三條驛へ行くと、八景廻りは今出た電車でないと間に合はぬといふので、思ひ出して芭蕉の墓詣をする。大津で石山行に乘換へて、石場で下車すると二三丁で義仲寺である。

門を入ると「朝日將軍木曾義仲公」と記した碑がすぐ目につく。平氏を討つて、都で驕傲を誇つた義仲の末路が、あさましく涙をそゝる。

驕傲の將軍の碑や秋の風　　紫蘭

義仲の碑に隣つて、楔形の自然石がある。面には單に「芭蕉翁」と記され、傍の句碑には

木曾殿と背中合せの寒さかな　　又玄

とある。成る程薄命な一代の驕傲將軍と、永遠に民族藝術の象徴たる野人との背中合せは、うたゝ皮肉の感をそゝつて止まぬ。

廣からぬ庭内は寂びるにまかされて、幽寂の秋氣身にしむを覺ゆる。

こほろぎの聲細々と朝の庭　紫蘭

寂しさや碑の蔭に畫のきり〳〵す　同

出かけに氣がつくと、入口の片隅には大きな芭蕉が霜にやつれてゐる。

歸途に警察署前の廣場に立寄る。地に這うた老松を呼次の松といふ。昔の五十三次の一、打出の濱と呼んだ此地の船頭が、呼次をした時の息み場であつたといふ。妻は飛行機の飛交ふ琵琶湖を見渡して、腰をあげようともせぬ。

その昔打出の濱や秋の風

やがて晴嵐で名高い粟津に下車して見ると、昔の松原の面影は殆んど偲ぶに由もなく、人絹會社がいかめしく建てられ、傍に鮮人の穴居生活のみじめさが目につく。

二

この前妻を案内して石山寺に參詣した時には、時間が遲くて寶物の拜觀を許されなかつたが、今日は萱前の事とて、千年の闇を偲はせる御堂に案内される。紫式部の源氏の間の扉も開かれたが、そこから琵琶湖の片影だに見えさうもない。が三上山に月でも出たらと思ふと、

名月や紫式部筆おいて

などロずさまれる。鐘樓を見つけた妻は、撞木の綱にさがつて鐘をつかうとするが、鐘が高くて撞木が鐘にふれぬ。

鐘遂に撞けども鳴らず秋の風

瀬田川の川縁に出ると、船頭のすゝめる儘に、八十錢出して八景の一、瀬田の夕照を偲ぶべく、御座船に乘る。折柄三高の短艇競漕日であつたが、一向に戰時らしい氣勢があがらぬ。

瀬田について驚いたのは、想像よりも、繪で見たよりも、長橋の短いことである。これでは俵藤太が大蛇と戰つた聯想も起らぬ。

長橋は繪より短し秋の暮

まだ時間が早いので、芭蕉の

唐崎の松は花よりおぼろにて

の句で名高い唐崎の松を見るべく、引返して、大津でバスに乘換へる。時間の關係が惡くて、下車すると、日が暮れさうなので、バスの上から松の面影を瞥見するに止める。

霧の中に松の影見えて走りけり

人生旅行にも似た淺ましさに自らあきれながら、浮見堂で下車する。琵琶湖を隔てゝ、近江富士と呼はれる三上山に對して、御堂の中には金色の千體佛がまつられてゐる。御堂に月がさし込んだ

時の崇高な趣が想像に浮ぶ。

金色の千體佛や月上る

浮見堂の邊りには枯蘆が散在して、堅田の落雁の一景を思はしめる。バスに乗り後れじと、十丁ばかりを堅田驛まで急ぐ。汽車に乗るにも時間が都合惡く出來てゐるのは面白い。

やがて三井寺をバスの中から拜む頃には、湖水のあなたには暮色が漸く迫りかけてゐた。

湖の水より暮れて秋寒し

矢走の歸帆も、比良の暮雪も心に蓋いて、近江八景の外觀だけは一日で片づけたが、所謂八景の儘賞に、かうしたあはたゞしさで滿足せねばならず、又滿足しようとする近代人のあさましさを我ながら輕侮し嘲罵し、悶笑せずにはゐられなかつた。けれども今は戰時である。かゝる幸福に浴することの出來るだけにも、

皇恩のありがたさに感激深きを覺ゆるのである。

（昭和十六年十一月二十二日）

犬の如く

大東亞戰爭第二年に入つて、西南大平洋には到る處に日章旗翻り、國威愈々揚る。

涼しさや南へ萬里日章旗

夏に入つて旅行の禁が聊かゆるめられたので、疲れ切つた頭を休めよと勸められて川治溫泉に向ふ。淺草雷門で、一電車を待つて乘つたが立錐の餘地もない。

錐となつて電車の中の暑さかな

落つかぬ旅の心を扇かな

汗拭くや互に皺を笑ひつゝ

田植歌襟を正して聽かんとす

二三日前まで茹でるやうな暑さだつたのが、皮肉なもので、今日は雨勝ちな模樣と變りかけた。

雨の日を涼しかれと山の旅に立つ

日光の一つ手前で乘りかへて、鉛結になること更に三十分。此間にやつと腰を下ろして、携へて來た鮨をかちる。

鮹結になつて鮹食ふ電車かな

鬼怒川の次、新藤原で下車して、更にバスに詰込まれてゆられること三十分。身の毛もよだつやうな斷崖絶壁を、バスは巧にうねつてゆく。川治に着いたのは東京を出てから、まさに四時間半の後であつた。

案内所で豫約しておいた××莊へ行つて見ると、知らぬといふ。それでも丁度一室が空いたばかりだといふので、二階へ案内される。

落つかぬ胸をなでつゝ汗を拭く

赤蜻の涼しく見ゆる田舍かな

赤蜻をうまくつかれて涼しけれ

見下せば小雨の中を、谷川にかけた橋上に傘が行き交ふ。碧潭の底に赤い帶が映えて見える。

碧潭や逆さに浴衣の帶赤き

何といつても蚊のゐないのが、私には無上の有り難さである。前線將士の勞苦を思ふとすまぬことだが、私には蚊に食はれると物狂はしくなる癖があるからだ。

一日の命延びたれ蚊帳つらず

夜半に目が覺めると、川の瀨音が靜に涼しく響く。妻は蚤が食つて寢られぬといふ。

瀨の音の魂にしみ入る夜や涼し

蚊帳つらぬ夜すがら蚤に食はれつゝ

朝のすが〳〵しさを期待してゐたが、鬱氣四方をとぢこめて、小雨が降つて、すつかり期待を裏切られた。朝食がすむと、豫定があるから、滯在するなら、狹い舊館に入つて我慢しろ、晝食は饅飩より仕方がないと女中がいふ。昨日に打つて變つて、無愛想な態度である。犬のやうに追はれて逃るか、豚にでもなつて我慢しろといふ風である。時局を考へると尤ともうなづかれる。即ち直ちに犬となることの涼しさを求めて逃げ出す。

犬となつて涼しく坂を下りけり

一時間餘りバスを待つて、やつと引上げはしたものゝ、歸りの電車のこむを恐れて、一旦日光に着いて汽車によることにする。母を連れた若い娘さんも同じ方針に出て、途中で旅館のぼり方のひどい話をする。金の世は暑くもあり涼しくもあるかなだ。

紙幣よむや涼しくもありまた暑く

電車が日光に着くと、私は切符をどこへやつたか忘れてしまつた。改札口で散々な思ひをして、やがて帶を解くと、切符は帶の中から飛んで出る、

帶解くや切符涼しく飛んで出る

果して歸りの汽車はからりとして樂々と乘れた。宇都宮で乘かへても樂であつた。

乘換へて凉しき汽車の上りかな

歸り途をわざ〳〵池袋で下りて、夕食を一食堂でとる。溫泉場の食物より、遙に豐富で、美味で四分の一の代である。わざ〳〵旅に出かける愚を味ひ、犬の如く追はれて歸つたことの有り難さを今更のやうに喜ぶ。

（一七、八、一〇）

千年の旅

一

奈良は憧れの地である。京都と共に、いつも私の魂を引きつけ、私の魂を躍らせる地である。千年の歴史が薄絹のやうに、私の魂をつゝんでほゝゑませる。奈良、京都の文字を見、音を耳にすると、ゆかしい昔の面影が、見る〳〵眼の前に髣髴として、私は母の腕に抱かれて子守唄を聽かされた六十年の昔を思ひ出す。

去年の十月の藝術學會の時も、一日は妻と奈良に遊んだが、その時はひどく雨に降られた。その前年、大阪から廻つた時も雨に降られた。それに引きかへて、今年は五月に國文學會が奈良で開かれた。憬れの奈良に宿をとつて、心ゆくばかり奈良の空氣に醉ひ、奈良の歴史にひたり、奈良を包む香味を味はひ、老の魂を養ふべく、又しても妻を促して出かける。

五月十三日の夕方に出發する。翌朝京都につくと、先づバスに飛乘つて上賀茂に向ふ。謠曲『賀茂』を通しての心願の地である。想像とは全くちがつて、山の麓ではなくして、丘陵を背にした平地である。だがとう〳〵と流れる御禊川の水は、靈山の絶頂から融けて流れた雪の雫が、大地の底

深く幾千丈となくしみ込んで、再びこん〳〵と湧き上つたかと思はれるほどの、冷さと清々しさを湛へてゐる。私は妻にまねて、手に掬んで腸まで洗はずにはゐられなかつた。

手に掬めば魂も冷ゆるや御禊川

明日の葵祭を拜することの出來ぬ不幸を悲しみつゝ、初夏の青嵐に吹かれながら、下賀茂に向ふべく、教へられた儘に加茂川堤を下る。

十五分ばかりと聞いた京大の植物園に、一時間ばかりして、疲れ切つて着く。東大のよりか規模は大きいが、花は既に散り盡して、學童の外に人影は見えぬ。

花散つて人の影なき若葉かな

散り殘る牡丹あぶなき微風かな

下賀茂では緋の袴の巫女姿が繪葉書などを頒つてゐる。

下賀茂や巫女は暑げに緋の袴

馬場は幕目すが〳〵しく清められて、明日の御輿の渡御をまつてゐる。

あさやかに幕目涼し祭待つ

再びバスに乘つて、妻の憧れである秀吉の鳳呂を見るべく、東本願寺に入つて聞くと、西本願寺だと教へる。行つて見ると、今は國寶になつてゐて、容易には參觀を許されぬといふ。

奈良へ向ふにはまだ時間が早いので、渡邊の綱がとつた鬼の腕で名高い東寺に詣でる。こゝでも歩いて十分といはれたが、疲れた足は一時間かゝつてやつと着く。廣い境内を右往左往する。規模はさすがに雄大で、今でも眞の鬼ならずとも、怪しい鬼や狸位ゐは出さうな靈域である。

朧夜や狸も鬼も躍るべし

電車で逆に京都驛まで引返せばよいものを、奈良電の停留場が目の前に見えたので歩いた爲に四時發の急行電車に丁度乘後れる。所が次の電車は嬉しや準急の臨時であつた。五時過には懐しの奈良の宿に客となる。

くたびれて宿かる頃を藤の花　　芭蕉

を思ひ出しつゝ、五重の塔を窓から斜に見る一室に腰を下ろす。

宿とれば若葉のあひや五重の塔

並木宗助と安田蛙文の合作淨瑠璃『南都十三鐘』で知られた寺は、十間ばかり上にあつた。

二

十五、十六兩日私が學會に通つてゐる間、妻は心にまかせ足にまかせて、名所舊蹟をあさりつゞけてゐた。

奈良につくまでは、鹿の群にも鐘の音にも、土の香にも醉ひたさで一ぱいであつたが、鹿は暮れると臥床に歸るらしく、今は大佛の鐘もつかれず、折柄丁度闇夜ではあり、現實は私達の夢を破つて日が暮れると公園の中へは足を向けもしないで、淺ましくも燈火を追うて巷を彷徨して、東京では見ることの出來なくなつた夏蜜柑や苺などを買つて來ては、舌鼓を打つのであつた。

希望の實現と飽滿の恐ろしさ！飽滿はいつか人を殺し、神經を痲痺せしめ、一切を忘却の淵へ驅りたてる。憧憬も希望もいつの間にか打碎かれ、人を化して平凡と鈍感の石塊となし、生ける屍と葬り去つてしまふ。學會が終ると私は戰慄しながら、妻と約束しておいた三笠山の麓にかけつけた。短い時間に見得る限りを又しても繰返し〳〵て見る。

鐘鳴れば奈良は悲しも鐘つかぬ都となりて更に悲しも

奈良の都、奈良の名勝、物といふものに千年五百年の歴史がこもつてゐる。限りなき哀話が織込まれ、無量の情趣が包まれてゐる。盡くる所なき味と絶ゆることなき香り、それらを限りある時間で味ひ盡さうとするのは愚かなことである。暇にまかせ、限りなき時間にまかせて、思ひの儘にゆつたりと味ふてこそ、奈良千年の美を魂を、香味を、眞に味ふことが出來るのである。誠にこの地に永住し、この地の土に化する覺悟あつてこそ、奈良は、京都は、始めて眞に味はれるのである。遠からず奈良の人となり、奈良に移住する希望を妻と語り合つて宿に歸る。

青嵐千年の松靜かなり
行く春や千年の燈つぎかへて

三

十七日は法隆寺見學である。

法隆寺の驛に下りると、路傍で串團子のやうな餅を五錢づゝで賣つてゐる。それが飛ぶやうに賣れてゆく。芭蕉の十團子が思ひ出される。

行く春や小粒の餅が飛んでゆく

二十年前に、一度拜觀した法隆寺の影は夢の如く消えて、新にした印象も一月たらぬ中にまた朧になつてしまつた。これでは一千年を隔てた我國最古の建造物の特長が何處にあるときかれても、又しても小學生以上の答が出來さうもない。

行く春や千年の壁畫影淡く

法隆寺と共に、私の頭に永くこびりついてゐたのは、龍田の紅葉である。謠曲や淨瑠璃の中にも屢々背景となつてゐる龍田をば、今度こそと、妻を促してとぼ〳〵と歩く。

山の麓か溪谷かと思つてゐた想像はまた裏切られて、田圃の中を流れる小さな川にしか過ぎない

のが龍田川である。水も淺くて、川幅も五六間には足らぬ。兩岸五六丁の間に植えられてゐる紅葉も今は若樹はかりである。

紅葉狩名にこそ殘れ龍田川
　末世なれやもんぺ姿の紅葉狩

思ふに奈良の都の榮えた時代には、大宮人はかうした地にまで自然の美を求め、遊樂にふさはしい風光をさがしたりしたのであらう。紅葉の木蔭に二時間ばかりを遊んで、價貴き珍らしい甘味を一茶店に見出して驚く。

王寺に出て、奈良に歸るなり、再びバスを借りて法華寺に赴し、宿につくと、家から速達が屆いて、中學時代からの友人、泉の訃を傳へて來てゐる。奈良は遂に私に悲の地となつてしまつた。

友ゆくと奈良にて知りぬとこしへに悲しき都と奈良はなりけり

四

十八日には二度目の橿原神宮參拜に出かける。見ると西大寺までの電車線路に近く、「平城宮趾」の大石碑がある。今まで幾度か通過して、これである。觀察の鈍さに我ながら呆れる。

西大寺で電車を乘かへると、文字通り立錐の餘地もない込みやうである。繪のやうな垂仁天皇の

御陵を池の中に拜しながら、一時間ばかりで、神宮驛の一つ手前の御陵前で下車して、

國祖神武天皇の御陵に參拜する。

御陵に廻らされてゐる御玉垣は、嚴そかに苔むして、蒼古幽寂の氣が四邊に溢れてゐる。とこしへにゆるぎなき國礎を築かせ給うた御聰明な御風姿と、建國の緒を此地に創らせ給うた御英斷とを偲び奉りつゝ、靜かにぬかづけば、自ら大古の面影髣髴として眼前に展開し、風なきに落散る松葉の一片も懷しく、踏む眞砂の一粒々々にすら深き緣のつながる心地して忝なく、暫しは去りもあへず、只ぼんやりとして佇むのであつた。

閑かさや松の落葉の落つる音

悠久二千六百二年、口にこそいへ、數へこそすれ、その間に影を隱し姿を消した人間の數そも幾何ぞ。國興り國亡び、一族盛へ、一族衰へ、治亂隆替は數へ切れぬほど繰返され、興廢盛衰絶えざる間にあつて、炳乎として日月の如く、日出づる國は日に月に隆昌の一路をたどつて、全世界に赫々たる光明を投げつゞけ、皇統は連綿として彌榮えに榮え、大和民族の勢威今や古今に絶し東西に併びなきものである。われ今世界に比なきこの國に生れ、古今にためしなき此時に生き、此處に面のあたり國祖大天皇の御陵の前に立つ。感極りて涙滂沱として止まる所を知らぬ。

これやこの日の本の國建てませる大すめらぎのみさゝきやこれ

地の上に國一つありうまし國いやさかの國名を大日本

綏靖天皇の御陵を遥拜して、引返して小松の間の小徑を進むこと四五丁、道は開けて神宮の裏御手洗所に達する。參拜者の數は二年の前と少しも變らぬ。

大やまと國とこしへの礎を太しくたてし武き天皇
地の上に國は數あれ三千年のすべらきの國たゞ一つあり

全世界戰亂の坩堝と化した今の今、日に月に彌榮の輝を拜みつゝ、年々に神宮參拜の喜を重ね得ることの有り難さ、尊さ、心をこめて必勝の大戰完遂を祈念し奉る。

參道に出て暫く池畔に憩ひ、やがて長谷の觀音に向ふ。

五

八木で參宮線に乘換へて、先づ淡山神社に參拜すべく櫻井驛に下車する。櫻井といふので正成を思ひ出して、妻に遺趾を尋ねさせると、驛員は不審さうに

「ちがいます、あれは河内の櫻井です、此所は大和です」

私達は眞赤になつた。あまりにも無學であつた私達だ。淡山神社へと聞くと、今日はバスが損して、出るか否か不明だといふ。二里の路を歩くことは時間が許さぬ。已むなく高級自動車を走らす。

神橋前で車を下りて、裾をまくつて六七丁の急坂を上る。上りつめると、右側の山腹の斜面に小ぢんまりと、關西特有の丹綠で塗られた輝かしい社殿が初夏の日に輝いてゐる。「その壯麗なること日光の東照宮に比すべく、關西日光といふ」と說明書にあるが、思へば以ての外の說明である。自分勝手に財寶を費して建造した日光東照宮と、國家の大忠臣を祀つた淡山神社とを徒らに比較してなるものか。金銀づくめに飾り立てた東照宮よりも、丹綠の二色で塗つたばかりの簡樸さに對してこそ、寧ろ虔しやかに頭が下るのである。傍には珍らしい十三重塔がある。

朱と靑の祠さやかに饗の峯
饗の峯割つて日に映ゆる祠かな
ゆるぎなき國の礎守りける千年の昔の神にぬかづく

七八圓はとられるだらうと思つた車代は十三圓だといふ。一寸驚きはしたが、旅程を乱さずに濟んだことを喜んで默つて支拂ふ。

長谷の觀音は次の初瀨驛にある。露伴の『二日物語』に書かれた、西行が、別れた妻との邂逅所である觀音堂が、私達を引つけるのである。驛を出てバスを利用すると、十分で寺の階段下につく。ゆるい傾斜の階段をゆつくり〳〵數へながら上る。兩側に大方は散り盡した牡丹を惜しみながら、四百九十幾段かを數へると觀音堂に達する。『二日物語』のあの劇的な場面、――一人の尼が